

Ambientな哲学 目次

哲 学

- 1 系譜学について
- 2 永遠回帰となでしこ
- 3 永遠の命はあるか（1）——輪廻転生と終末論
- 4 永遠の命はあるか（2）
- 5 おひとりさま考——一期一会
- 6 私と汝——西田哲学と臨床精神医学
- 7 新しい冷戦の始まり——力への意志
- 8 死に関する科学的ニヒリズム批判——3つの死生観
- 9 哲学するとは何か——ambient な「家具の哲学」

精神臨床

- 1 死にたくなったら全力で逃げろ
- 2 トリエステ（1）——マットと薔薇
- 3 連れ去り事件の真相（深層）
- 4 無敵の人——「黒子のバスケ」脅迫事件
- 5 「途絶」について——記述と沈黙（顔）
- 6 残虐な少年事件——佐世保

文 学

- 1 トリエステ（2）——サバとひとりの女
- 2 益子直美——上を向いて歩く？
- 3 ピダム——愛の疑惑（「善徳女王」）
- 4 忍びよる破滅と傍観者——鷗外の小説の主人公たち

時 事

- 1 西村主審の采配——ブラジル対クロアチア
- 2 フェミニズムへのテロ——都議会セクハラやじ
- 3 裁判員裁判の陥穽——求刑超え
- 4 有敵の人——ある科学研究者の死

哲 学

系譜学について

1

14日にオーストラリア戦で2-2、勝ち点1。16日にベトナム戦で3-0、勝ち点3。18日にヨルダン戦で7-0、勝ち点3と、なでしこ JAPAN は合計勝ち点7、オーストラリアと同点だったが、得失点差でうわまわってリーグ1位通過で、準決勝トーナメント戦に進んだ。ワールドカップのアジア枠は5でベスト4になったなでしこは既にワールドカップへの出場権を手に入れた。いずれも会場はホーチミン市（昔のサイゴン）。

この間ベトナムと中国との間では西沙諸島近辺の石油資源の掘削を巡り、海上でのトラブルが発生した。中国は勝手に現場海域を掘削、ベトナムの抗議も無視し続けていた。

5月7日西沙諸島近辺で中国公船がベトナム公船に体当たりをしてきた。中国側は80隻、ベトナム側は30隻でにらみ合いが続いていたがついに爆発した。



その後、中国はベトナム側からの3日～7日の間の170回もの追突があった、と抗議した。このでたらめぶりにベトナム国民は激怒ベトナム南部ホーチミン市近郊のビンズオン省工業団地を中心に14日には大規模なデモが起こり、

＜ビンズオン省工業団地＞

中国系企業が襲われ、日本企業も巻き添えをくらった。その後中国の猛烈な抗議と政府のデモ統制によって次回も呼びかけられていたデモは起こっていない。中国系の住民は危険を感じて帰国したものも多い。

ベトナムは10世紀後半まで約1000年間中国歴代王朝に支配された歴史があり、19世紀後半にはフランスの植民地となり、1949年まで約65年間フランスに支配されていた。その後1962年からはアメリカとのベトナム戦争（～1975サイゴン陥落）を経て1978年にはカンボジア進攻を巡って同じ社会主義国家でありながら、中越戦争が勃発。1989年にやっと中国と和解した。

1. このようにもともとベトナムと中国は仲の悪い国であり、しょっちゅう国境紛争を起こしてきた。そういう意味では昔の感覚で中国が土足で踏み込んでくることは大いにあり得ることだ。習主席が「アジアはアジア人民が守る」と5月21日上海のCICA（アジア相互協力信頼醸成会議）The Conference on Interaction and Confidence Building in Asia で演説したらしいが、この「相互協力信頼醸成」という大仰な会議名には笑ってしまう。相互協力を破壊している国はいったいどの国なのだろうか。

ところで女子サッカーのアジア大会を見ていてふと感じたことを記したわけだが、今年に入ってからロシアのクリミア実効支配、中国国内の民族テロ、タイ政権崩壊など頻発する政治的危機をニュースなどで知らされると、グローバルな観点で世界が見えているようだが、実際にはランダムに宗教紛争、国家間抗争、民族紛争が火山の小爆発のように起きているとしか思えないことに気づく。これらは10年単位くらいを経てやっと一まとまりの地域別の時系列にまとめ



られたりその、因果的推移が語られたり、その目的論的处理方法や、正義の起源に遡った審判が下されたりするのだろうが、そういう伝統的な歴史学が行ってきた歴史描写は現代に有効なやり方なのだろうか、という疑問を禁じえない。勿論、政治行動を起こすための正確な戦略の素描をすべきだなどと言っているのではない。またど

こかの国の義に反する行為を弾劾するための罪名表を作ろうとするわけでもない。

ここで思い出してみることは1970年代に入ってフーコーが行った伝統的歴史学への批判である。フーコーは「ニーチェ、系譜学、歴史」の冒頭で次のように言っている。

パウル・レーは、生成を線条的に記述した——たとえば道德の全史をただ功利性だけを考慮して整理した点で、イギリス人たちと同様に誤っている。まるで、言葉はその意味を保ち続け、欲望はその方向を保ち続け、観念はその論理を保ち続けたかのように。まるで、ひとが口にし、望んだものの世界が、侵略、闘争、掠奪、変装、策略を知らなかったとでもいうかのように。そんなことから、系譜学にとって慎重さが不可欠のものとなってくるのだ。単一の究極指向性のまったく外に、さまざまな出来事の独自性を見定めること、それらの出来事を、最も予期しないところ、歴史などもたないということになっているもの——さまざまな感情、愛、意識、さまざまな本能、の中に探ること、それらの出来事の回帰を、進化のゆっくりした曲線をあとづけるためにではなく、それらが多様な役割を演じた多様な場面を再発見するために把握すること、それらの出来事の欠落している点、それらが起こらなかった時点までもはっきりさせること（プラトンはシラクサへ行ってもマホメットにはならなかった……

(フーコー「ミシェル・フーコー思考集成Ⅳ」所収 伊藤 晃 訳)

生成を線条的に記述するのではなく、系譜学は最も予期しないところ、歴史などもたないということになっているもの——さまざまな感情、愛、意識、さまざまな本能、の中に探ること、それらの出来事の欠落している点、それらが起こらなかった時点までもはつきりさせることなどをまず課題とする。

それゆえ系譜学は、微細にわたる知識、多数の素材の集積、忍耐を要求する。系譜学は、その「巨石建造物」を築くのに、「有益な大きな誤謬」ではなく「厳密な方法によりうち立てられた、まがいものでない小さな真実」を用いなくてはならない。つまり、博識という点である種の執拗さが必要なのだ。系譜学は、哲学者の高所からの深遠な見解が科学者のもぐらのような視力と対立するようなくあいには歴史と対立するのではない。逆に、理念的なもろもろの意味の超歴史的な展開や無限定な目的論と対立するのである。系譜学は「起源」の探求と対立するものなのである。

(同)

系譜学は「厳密な方法によりうち立てられた、まがいものでない小さな真実」を用いる。

系譜学は「哲学者の高所からの深遠な見解」や「科学者のもぐらのような視力」を用いない。

系譜学は理念的なもろもろの意味の超歴史的な展開や無限定な目的論と対立する。

伝統的な歴史観と系譜学を対照的な表にしてみよう。

	伝統的歴史学	系譜学
因果的客観性	客観的「起源」の探究	ある視点(perspective)からの解釈学。「由来」の偶然性
究極の真理	歴史の連続性、因果性、必然性、の「真理」の探究	究極論、目的論の素朴な信仰の否定。偶然性による布置
対 象	遠いもの、価値あるものの言説の尊重	卑近なものも含めて「出来事」を探求

ついでに「由来」と「現出」を探求する系譜学の「歴史的感覚」についてのフーコーの用法。

(7) 歴史的感覚には三つの用い方があり、その各々がプラトンの三つの歴史の様相と一つずつ対立する。第一はパロディー的で、現実の破壊となる用い方で、これは歴史—追憶または再認のテーマと対立する。次は解体的で、同一性の破壊となる用い方で、これは歴史—連続あるいは伝統と対立する。第三は犠牲的で、真理の破壊となる用い方で、これは

歴史—認識と対立する。いずれにしろ、記憶の形而上学的でかつ人類学的なモデルから歴史を永久に解放するような、歴史の用い方をすることが肝要なのである。歴史を反 - 記憶とすること——そしてその結果として、そこでまったく別の形の時間を展開させることが問題なのである。

(同)

フーコーの自在な論旨の展開には驚かされる。

それにしても私にはなでしこ JAPAN がアジア大会で優勝してくれることを願うことくらいしかない。歴史も系譜も私の貧弱な頭では点灯のしようがないらしい。

2014. 5. 21

<永遠回帰>となでしこ

1



私は昔からそんなに、なでしこ JAPAN が好きなわけではない。しかし、単調な男子サッカーの<健闘>ぶりに較べてみれば、なでしこの勝負は見ていてまことに面白い。緩急見せ場を作って奇跡的に成果を出す。勝利したからよかった、という単純なものではなく、そこに涙あり、笑いありという起伏があることが実に<勝負>というものの本質に根ざして面白いのだ。いつでも勝ち続ける・・・というのは面白くない。いつでも負け続けるとしたら、ますます面白くない。負けると思ったら

勝ってみたり、勝つと思ったら負けてしまったりという意外性をつなげていくところでひとつの「物語性」を作り出しているところが面白いのだ。それは彼女らが意図して演出しているわけではないのだろうが、監督と一体となってチームの個々人が<そう>なっていくというのが面白いのだ。

前回はヴェトナムの問題と絡んで、「系譜学」のことを考えてみたが、今回はなでしこの問題と絡めて「永遠回帰」について考えてみたい。

22日ホーチミン市のサッカー場で日本は中国と対戦した。準決勝である。日本はアジア大会に13度出場し、4回の準優勝、5回の3位を得ているが、優勝したことはまだな

い。前半は両者無得点で後半に折り返し、後半6分CK（コーナーキック）で澤のヘディングがゴールネットを揺らした。先手をとったが35分ペナルティキックで一点を取られ同点となり、決着がつかないまま、延長戦に入った。酷暑、高湿度の中、両者は激闘を続けたがついに決着がつかず延長後半、ロスタイム中に日本にCKのチャンスが転がり込み、このプレーで試合終了の場面で宮間のコーナーキックを岩清水がヘディングで合わせ、ついに決勝点を奪った。実に劇的な勝利であった。澤のヘディングといい岩清水のヘディングといいどちらも芸術的なものだった。

澤はゴールの左前のスペースに少し右旋回しながらダッシュ、宮間のキックボールは澤の側頭部にスライスされる形の攻撃でキーパーの横を高速で抜いた。岩清水はゴール右横に構え宮間のキックボールにどんぴしゃで合わせると、ボールはデフェンス陣をあざ笑うかのように前方ネットに吸い込まれた。

さて、このような試合と永遠回帰とは何の関係があるのか？



ニーチェの永遠回帰説は強度の哲学ではあっても、同じものが永遠に回帰する、というのは決定論や運命論とどこが違うのかということで哲学者を悩ませてきた問題である。同じものが永遠に回帰するのであれば、人間には選択の余地もないし、あれこれ考えて行動することには意味がないことになる。この件たとえば、

フランスの哲学者ドゥルーズは骰子にたとえて次のような解釈をしている。

ひとたび投げられた骰子は偶然の肯定であり、骰子が落ちてきて出る目は必然の肯定である。必然は偶然により肯定されるが、それは、存在は生成によって、一は多により肯定されるという厳密な意味においてである。骰子は偶然に投げられるのだから必ずしも勝ちの目、すなわち十二——これが骰子ふりを再び生みだす——が出るとはかぎらない、と言っても無駄であろう。成程それはそうだが、しかしそれは、遊戯者がまず最初に偶然を肯定することを知らなかった場合にのみ言い得ることである。なぜなら、一が多を廃棄したり否定したりしないのと同じ様に、必然は偶然を廃棄することも、撲滅することもしないからである。

（ ドゥルーズ「ニーチェと哲学」第一章 11 骰子ふり ）

骰子を振る前には無数の偶然的可能性がある。しかしひとたび振って結果が出てしまえば、その結果は1つである。なでしこの試合においても中国が勝つ場合も日本が勝つ場合もいろいろあったにちがいない。（偶然としての選択の多数性）しかし結果は日本が2－1で勝った（結果としての必然性＝一）。この必然は両者が争っていた時点での偶然性を「廃

棄することも、撲滅することもしない」

したがって、ニーチェが必然（運命）と呼ぶものは、偶然そのものの廃滅ではなく、その組合せである。必然は、偶然そのものが肯定されればされるほど、偶然のおかげで肯定される。なぜなら、そのものとしての偶然にはただ一通りの組合せしかなく、偶然のあらゆる分枝の組合せの仕方はただ一通りしかないからであって、この仕方は多の一として、つまり数あるいは必然として存在するからである。

（ 同 ）

永遠回帰は既にあつた過去の結果を再現することである。しかしそれがどんな結末であつたかを人は知らない。この時点では偶然性のひしめき合う選択がなされていることになる。ところでその再現した結果は次の未来時においては同じように再現されることになる。こうして永遠回帰繰り返される。偶然性のひしめき合っている時点での選択には自由意志が働いており、そういう意味ではこの選択は決して決定論や運命論ではありえない。

投げられた骰子がひとたび偶然を肯定すると、落ちてくる骰子はふたたび骰子ふりを回帰させる数や運命を必然的に肯定する。この意味において、遊戯の第二の時間はまた二つの時間の総体でもあり、あるいは総体と等しい遊戯者でもある。永遠回帰は第二の時間であり、骰子ふりの結果、必然性の肯定であり、偶然のあらゆる分枝を結び合せる数である。しかしまた、それは最初の時間の回帰、骰子ふりの反復であり、偶然そのものの再生産と再肯定である。永遠回帰における運命は、また偶然の「歓迎」である。

（ 同 12 永遠回帰のための諸帰結 ）

こういうわけで・・・更にドゥルーズは都合のいいことを言っている。それは「否定的なものは回帰しない」ということだ。（邦訳書271ページ「永遠回帰の教訓は、否定的なものの回帰は存在しないということである」 第五章 13ディオニュソスとツァラトゥストラ）この意味は邦訳書を読んでもらう事にして・・・すこし難しいが次の箇所も挙げておく。

能動的破壊が意味するのは、無への意志における価値転換の地点、価値転換の時期〔契機〕である。破壊が能動的になるのは、反動的な力と無への意志との同盟が破棄され、無への意志が肯定に変じ、肯定の側に移行して、反動的な力そのものを破壊する肯定する〈力〉と関わりをもつようになるときである。破壊は、否定的なものが肯定する〈力〉に転換され、変換される度合に応じて能動的になる。すなわち、「生成の永遠の歓び」。これは直ちに「廃滅の歓び」、「廃滅と破壊の肯定」と言いかえられる。これがディオニュソス哲学の「決定的な地点」である。すなわち、否定が生の肯定を表現し、反動的な力を破壊し、能動性〔活動〕にその諸権利を回復してやるような地点。否定は肯定する〈力〉の雷鳴となり、稲妻となる。至高の地点、焦点、超越的な地点である〈真夜中〉は、ニーチェにおい

ては反対物の均衡や和解によってではなく、反対物の変換によって定義される。

(同 第五章 9 ニヒリズムと価値転換。焦点)

「破壊は、否定的なものが肯定する〈力〉に転換され、変換される度合に応じて能動的になる。すなわち、「生成の永遠の歓び」。」・・・<否定的な力>は<反動的な力>が<肯定的な力>によって破壊され、その<肯定的な力>とかかわりをもつにつれて能動的となる。そして逆に<否定的な力>は肯定する〈力〉の雷鳴となり、稲妻となる。そうなった時点ではもはや<否定的な力>はなく、それは継承（回帰）されない。

スポーツの勝負の世界は、まことに骰子振りの世界に似ている。骰子を振るまでは様々な偶然がひしめき合うが、振ってみれば単純な結論（必然）が出るだけだ。人はその結果をあれこれと批評し合い、別の結果を期待してまた骰子をふる。スポーツの世界でもこのことを人類は永遠に繰り返しているのだ。思うに恐ろしいことはその結果は既にあった過去の再演と考えることである。せめて試合中に選択の自由が、偶然性があったと思いたい。その進行に一喜一憂しながら・・・

2014. 5. 23

<付記> 5月25日、ホーチミンでの対オーストラリア戦で日本は1対0でオーストラリアを下して、初めてアジア大会の優勝を勝ち取った。前半のCKで宮間のキックに岩清水がヘディングであわし、バーを叩いたボールがゴールラインを割った。（おまけに澤の駄目押しヘディングまでついていた。）またしてもフナッシーならぬイワッシーの出現で一点をもぎとり、この一点を守りきって日本は辛勝したのだ。



永遠の命はあるか（1）

——輪廻転生と終末論



1

過日、私は大津の琵琶湖カフェ（哲学カフェ）で「永遠の命はあるか」という提題でのディスカッションに参加した。

当日（6月22日）老若男女12～3人が参加しジュリアン・バジー

ニの「100の思考実験：あなたはどこまで考えられるか」の21番「生の宣告」という文章が配布され、それを参考に話が展開されていった。その思考実験の一文を以下に掲げる。

21 生の宣告

永遠の命は喜ばしいだろうか？

ヴィタリアはその昔、永遠に生きられる方法を見つけた。しかし、今、それを捨て去ることを誓った。

二〇〇年前、マクロプロスという医師から不老不死の霊薬の処方箋を授かったヴィタリアは、若気のいたりでそれを調合し、飲んでしまった。今になると、生へのその強欲さが呪わしい。友人も恋人も知人たちも、年老いてすでに死んでしまい、ヴィタリアはひとり取り残された。死が近づいてこないため、気力も野心もまるで湧かず、どんなことに取り組んでも虚しく思えてしまう。退屈であきあきした気分がつのり、もはや終わりがくることだけが望みだった。

実際、この半世紀以上というものの、この世から消滅する方法を探ることだけが、人生の目的だった。そして、ついに霊薬の中和剤を手に入れたのだ。数日前にそれを飲んだところ、たちまち身体の衰えてくるのが感じられた。あとは、昔の自分のように、誰かが永遠の生を宣告されないようにしなければならない。霊薬そのものはとっくの昔に廃棄した。ヴィタリアは処方箋を手に取り、火の中へ投げ入れた。そして、紙が燃えるのを見ながら、この何十年かで初めてほほえんだ。

ヴィタリアは、医師から不老不死の霊薬の処方箋を授かって飲んだが、いまではそれを呪わしいことと思っている。なぜなら自分は長生きできるが、次々と友人も恋人も知人たちも、年老いてどんどん死んでいくのに自分は不老不死になったため、ぽつんと取り残されていってしまうのだ。この苦しみから逃れるため彼は、霊薬の中和剤を手に入れたたちまち身体の衰えてくるのを感じられるようになった。初めて彼に、微笑がもどった。

まあ、こんな内容なのだが、ディスカッションでは、みんなが永遠に生きられるようになったとしたらその時のイメージとは？とか、生前良い思いをした人はずっと生きたいと思うかもしれないが、生前生きるに辛い思いばかりした人は更に生きようとはしないのではないかと。また仙人となって仙界で暮らすのがいいとか、桃源郷の話だとか、輪廻と解脱の話とかいろいろ出された。

カフェは結論を求めるものではないので、2時間ばかりの、この会は終わった。私としては命は死後どうなっていくのかについて、より興味があるので以下にその辺の事情について述べる。

ソクラテスは毒杯を仰ぐ前に弟子たちに向かって滔滔と靈魂不滅説を説き続けた。魂のようすばらしいものが生滅したり、壊れたりすることはない、と。（「パイドン」）

さてその不滅の魂はいったい何処に行ってしまうのだろう。

プラトンの「国家」第十巻の最終場面で語られたのには、「エルの神話」というのがある。

（a）エルの神話

エルは勇敢な戦士で、戦争で最期をとげ、死んで12日目に火の薪の上に横たえられた時、甦ってあの世のことを物語る。

それによると・・・人間が死んで、身体を離れた魂は不思議な場所に到着する。そこには裁判官が座っており、生前のいき方に判決を下し、天上の通路がふさわしいか、地下の通路かふさわしいかを判断して振り分ける。それから千年たって地下の旅から帰ってくるものは百年間の生前の罪を10回にわたって償い、地上の出口に帰ってくるのだが、その出口でまた判定を受け、不可であれば、皮をはがれ、肉を裂かれてまたタルタロスに投げ込まれる。可であれば、旅に出て運命の三女神のところへやってくる。



その三女神とは、**ラケシス**（運命を割り当てる女：過去）、**クロートー**（運命の糸をつむぐ女：現在）**アトロポス**（運命の糸を断つ女：未来）という女神たちだ。魂たちは神官の采配によって生前の生き方を参考にして自分の新しい生涯を選び、ラケシスの下に集結する。

このとき選ぶ順番はくじ引きだが、見本からどの生涯を選ぶかは自分の責任である。

（責めは選ぶ者にある。神にはいかなる責めもない）

ある男はよく考えもせず、独裁僭主の生涯を選んだ。しかしよくよく調べてみると自分の子どもたちの肉を食らい、数々の禍に見舞われる運命となっていた。このことを知って男は散々に自分の選択を嘆く。またオルフェウスは白鳥の生涯を選んだ。女に引き裂かれて殺されたので女の胎から人間として生まれることを良しとしなかったのだ。さらにオデッセウスは数々の苦労が身にしみ、野心も枯れ果てたので厄介ごとのない私人の生涯を選んだ。その他人間から動物へ、動物から動物へ、という選択もあった。要するにここにはありとあらゆる見本があって、順番はくじ引きだが、次回の生涯の関しては選んだ本人の責任だという訳である。



さて、ラケシスの元に魂が集結すると、ラケシスはおのこの魂に応じたデーモン（魂の保護者）を選び魂にあてがう。するとデーモンは魂をクロートーのもとに連れて行き、糸巻きでつむいでもらい、さらに今度はアトロポスのところで糸巻きがほぐれないように切ってもらい、

その後三女神の母アナanke（必然の神）の下を通過すると、恐ろしい炎熱をくぐり、**レテ（忘却）の平原**に進む。魂はそこに流れる河（アメレース）の水を飲むと今までの一切のことを忘れてしまうのである。魂たちはその後異なった軌道を通して流星のようにして上方に誕生していく。

以上がエルの語った「あの世」の物語（神話）である。プラトンはこの神話からいくつかの教訓を引き出している。

自分の力の及ぶ範囲でつねにどんな場合でも、より善いほうの生を選ぶだけの能力と知識を授けてくれる人を、もし見出して学ぶことができるならば、それによって、われわれのひとりひとは、いまいろいろの生涯の見本として語られたすべての条件が、互いに結びつく場合にも、単独に別々のものとしても、善き生ということに対してどのような関係をもつかを考慮しながら、美しさが貧乏あるいは富といっしょになるとき、またどのような魂の持ち前とともにあるとき、どのような善いこと悪いことをつくり出すかを知らなければならぬ。氏素姓の良き悪き、私人としてあることと公的な地位にあること、身体の強さ弱さ、物分りの良き悪き、そしてすべてそれに類する魂の先天的ないしは後天的な諸特性が互いに結びつくとき、何をつくり出すかを知らなければならぬ。そうすれば、その人は、すべてこれらの事柄を総合して考慮したうえで、もっぱら魂の本性のことに目を向けながら、魂がより不正になるような方向へ導く生涯を、より悪い生涯と呼び、より正しくなるような方向へ導く生涯を、より善い生涯と呼んで、より善い生涯とより悪い生涯とのあいだに選択を行なうことができるようになるだろう。

（ プラトン「国家」第十巻 ）

良き生、悪き生の組み合わせによって生じるよき人生を判別できれば、その人の生涯においてより良い生涯を選ぶことができる。そして「国家」終結部では以下のように「魂は不死なるものであり、ありとあらゆる悪をも善をも堪えうるものであることを信じるならば」「この世においても、われわれが物語った、かの千年の旅路においても、われわれは幸せであることができる」と結んでいる。

このようにして、グラウコンよ、物語は救われたのであり、滅びはしなかったのだ。もしわれわれがこの物語を信じるならば、それはまた、われわれを救うことになるだろう。そしてわれわれは、〈忘却の河〉をつつがなく渡って、魂を汚さずにすむことだろう。しかしまた、もしわれわれが、ぼくの言うところに従って、魂は不死なるものであり、ありとあらゆる悪をも善をも堪えうるものであることを信じるならば、われわれはつねに向上の道はずれることなく、あらゆる努力をつくして正義と思慮とにいそしむようになるだろう。そうすることによって、この世に留まっているあいだも、また競技の勝利者が数々の贈物を集めてまわるように、われわれが正義の褒賞を受け取るときが来てからも、われわれは自分自身とも神々とも、親しい友であることができるだろう。そしてこの世においても、われわれが物語ったかの千年の旅路においても、われわれは幸せであることができるだろう

(同)

(b) 輪廻転生

「エルの神話」では、魂は地底の千年（天上はまた別コース）を経て三女神のもとに終結する時、神官の采配のもとに次の生涯を選ぶのだが、すくなくともここには人生の選択が託されている。神官や運命の女神による強制、命令ではない。そういう意味では地底で苦労した魂にも少しは希望があることになる。しかもこの経緯も前世のこともレーテの河の水を飲んで忘却してしまうのだから、新しい気持ちで実は自分の選んだ生涯を生きることになる。この「エルの神話」では、人間の魂は不滅でこの世の罪を償いながら、新しい生涯を選択して永遠にこの世とあの世を回帰して循環する事になる。

それではヒンドゥー教や仏教で言う輪廻の世界はどうなっているのだろうか。

まずヒンドゥー教ではその前身のバラモン教に「五火二道説」がある。五火説というのは死者は月にとどまり、雨となって地に降り、植物に吸収されて穀類となり、それを食べた男子の精液となって女との性交で胎児となり再び誕生する、という説である。二道説の「再生のある道」はこの五火説を示しており、輪廻説の萌芽となった。これに信心と業の結果で次の来世が決まるとされる。更に因果応報説が強調され、輪廻転生説が整えられていった。

しかしヒンドゥー教の救済（解脱）は**梵我一如**であり、合一における忘我の境地であった。すくなくとも「我」は空無ではなくアートマンという不滅の実体である。

これに対して仏教においては「**無我**」（アナートマン）が立てられ、その輪廻説における救済は梵我一如ではなく、この輪廻の環を断ち切ることにあった。すなわち〈解脱〉。仏教内における輪廻説は善趣と悪趣



(地獄)という単純な境位から部派仏教の世親あたりから五道(天、人、畜生、餓鬼、地獄)が説かれその後、修羅が加わって**六道**となった。そして大乘仏教になってから自らの意のままにはならなく六道輪廻を繰り返す衆生に対して自らの意志で転生先を選べる縁覚・声聞・菩薩・如来を加えて十界を立てた。要するに解脱するものは六道に輪廻しない。解脱しないものは六道に輪廻し、永遠に苦を受ける。

ところで輪廻するもの(その主体)はだれなのか? 無我という実体なき者の輪廻は想像もできない。そこで唯識論においては第七識にマナ識(自我)第八識に**阿頼耶識**(無意識)を立て、この阿頼耶識が輪廻の主体であるとした。

さて、仏教の眼目はあくまで梵我一如ではなく、解脱への道である。しかし解脱できないものは永遠に六道をさまようからある意味で永遠に苦しみから逃れられない。このことに一工夫加えて簡便な方法で解脱しうる道を示したのが浄土教であった。古来解脱するには途方もない修行と年月が必要であった。それが**即身成仏**でこの世にいるうちに解脱できることになり、更に「南無阿弥陀仏」一句唱えるだけで解脱できることになった。これは**日本浄土教**(法然、親鸞)の大きな功績であったろう。このことで学問僧や荒行者しか解脱できなかったのが平凡な一介の庶民でさえ簡単に成仏できるようになったのだ。こうして日本の大衆は六道輪廻から救済された。もちろん信じるものだけだが。

さて死んだらわれわれはどのような輪廻の道をたどるのだろうか? もっとも知られているプロセスを示してみよう。(ひろさちやの「仏教『死後の世界』入門」より)

人間が末摩(死の急所)に触れて死ぬと(断末摩)娑婆(現世)に別れを告げて冥土の旅に出かけることになる。この旅のことを仏教では「中陰」と言い、この期間に前世の罪を裁かれ、配所に赴くことになる。中陰は7日ごとに7回の裁判を受ける。冥土の死者は微細な形をしており、香しか食べられない。最初の7日目には、秦広王の前で殺生の罪を問われる。ここで弁明が受け入れられれば、次の7日の猶予が与えられる。この7日間の間に死者は**三途の川**を渡る。渡し賃は六文。この川の対岸には懸衣翁と懸衣嫗(奪衣婆だつえば)が居り、奪衣婆が剥ぎ取った死者の衣を懸衣翁が受け取り、それを衣領樹に引っ掛けて生前の罪の重量を測り、それによって次の審判官、初江王の所に送られる。

また三途の川を渡る前にそこに広がっている河原を「**賽の河原**」という。こどもの死者はそこで石を積み上げて早死にの不幸をわびて布施をしなければならない。(こどもは自分の意志で男の精子に飛び込みこの世に生まれてくるため、早死には親に対しての不幸となる)しかしそこには無常にも鬼がやってきて積み上げられた石の塔を金棒で打ち壊してしまう。その子どもたちをわが衣に抱きとめて救うのが**地藏菩薩**である。また、生者の追善供養(回向)も死者の罪を軽くする。

14日目の初江王の審判は懸衣翁の報告を聞いて行われる。ここを通過して次の7日を過ごす宋帝王の審判が待っている。



泰山王の最終判決

ここは邪淫の罪を問い、罪ある男には男根に猫が噛み付き、女には女陰に蛇が跳びこむ。

次の第4の審判では五官王によって身口意の悪事が裁かれる。

次の第5の審判が閻魔王によるものである。ここの鏡には死者の犯した罪が余すところなく映されている。

この後、念には念を入れて第6回目の審判（変成王の審判）第7回目の最終審判（泰山王の審判）があって、死者自らに6つの門を選ばせる。（業の結果は免れない。）ここで中陰が終わって四十九日満中陰となる。この6つの門が繋がっているところが、よくご存知の六道（天、人、修羅、餓鬼、畜生、地獄）である。

こうして解脱しえない死者はこの六道を循環する。

以上四十九日を表にまとめておく。

	日にち	審判官	内 容
1	初七日（七日）	秦広王	殺生の罪
2	二七日（十四日）	初江王	衣領樹の示す生前の罪の重量
3	三七日（二十一日）	宋帝王	邪淫の罪
4	四七日（二十八日）	五官王	身口意の罪
5	五七日（三十五日）	閻魔王	すべての罪
6	六七日（四十二日）	変成王	五官王、閻魔王の報告によるチェック
7	七七日（四十九日）	泰山王	6つの門を選ばせる。

（c）永遠回帰

円環的な生についての教説ではニーチェの永遠回帰説がよく知られている。この説では前世、来世の区別があって、前世の業績で審判されて来世のポジションが決まるといった具合ではない。しかしそれに似たような構造がないではない。永遠回帰説には二重の環と言ったらよいだろうか、2つの側面がある。

- （1）**宇宙論的な回帰**（すべての物事がそのまま同じように永遠に回帰する）
- （2）**倫理的な回帰**（宇宙論的な回帰が必然性の環であるとする、こちらは人間の生きる偶然性や自由や意味といったものが加わった生成を行う）

ニーチェの回帰説はこの自由の環を必然性の環が締めくくるという二重の構造になっている。以下「ツァラツストラはかく語りき」からの引用でこの問題を考えてみよう。



「ああ、人間における最悪といっても、なんと小さいことよ。ああ、人間における最善といっても、なん

と小さいことよ」と。

人間にたいする大きい倦怠—これがわたしの首を絞め、わたしの喉の奥深くへ匍いこんだのだ。そしてあの予言者が予言した「一切は同じことだ。何をしてもむだだ。知はわれわれの首を絞める」ということばがわたしの首を絞めたのだ。

長期にわたる一つのたそがれの感情がわたしの行く前をびっこを引きながら歩きつづけていた。疲れて死ななばかりの、死に酔いしれた悲哀である、それがあくびをしながら語ったのだ。

「おまえが飽き飽きしている人間、あの小さな人間は、永久に立ち帰ってくるのだ」——そうわたしの悲哀はあくびをしながら言った。そしてわたしの歩む先を離れず、いつまでたっても休息しようとしなかった。

(中略)

——「ああ、人間が永久に立ち帰ってくる。小さい人間が永久に立ち帰ってくる」

わたしはかつて、最大の人間と最小の人間の裸身を見た。その二つはあまりにも似かよっていた——最大の人間さえ、あまりにも人間的だった。

最大の人間もあまりに小さい。——これが人間にたいするわたしの倦怠だった。そして最小のものも永遠に回帰すること——これが生存にたいするわたしの倦怠だった。

ああ、嘔気、嘔気、嘔気。——そうツァラトゥストラは言って、嘆息し、戦慄した。おのれの病気のことを思い出したのである。だが、そのときかれの生き物たちは、かれのことばをさえぎった

(ニーチェ「ツァラトゥストラはかく語りき」第三部 快癒しつつある者)

この文章ではツァラトゥストラは「人間が永久に立ち帰ってくる。小さい人間が永久に立ち帰ってくる」ことに対して「嘔気、嘔気、嘔気」と言って、嘆息し、戦慄したとなっている。「喜ばしき知恵」の341ではもう少し微細にあらゆる物事・物事がそっくりそのまま永遠に繰り返されることに人間は耐えられるだろうか、と問うている。いわゆる自然的・宇宙論的繰り返しの回帰である。すべての出来事が、物理的・機械的に必然に則って繰り返され、そこに自由の入り込む余地はない。タルタルスの坂を永遠に転がり落ちることを繰り返すシジフの苦しみだ。ここにはぞっとするニヒリズムがある。

それに対して人間の自由はないのか？



いっさいの『かつてそうであった』は、一つの断片であり、謎であり、残酷な偶然であるにすぎない、——だが、創造する意志は、ついにそれにたいして、『しかしわたしはそれがそうであったことを欲したのだ』と言うのだ。

——創造する意志は、ついにそれに

たいして、『しかしわたくしはそれがそうであったことを、いまでも欲しており、これからも欲するだろう』と言うのだ。

(中略)

意志はすなわち力への意志である。こういう意志はあらゆる和解よりも高いものを欲しなければならぬ。——しかし、どうして意志がそれをするようになるだろうか。意志に、過去へさかのぼって意欲することを教える者は誰だろうか

(同 第二部 救済)

同一物の永遠回帰は必然の運行を指し示すが一方でニーチェは倫理的な側面も記している。それは、ただ単に過去あったことを反復するだけではなく、創造する意志は過去に対して『**しかしわたしはそれがそうであったことを欲したのだ**』『わたくしはそれがそうであったことを、いまでも欲しており、これからも欲するだろう』

と言う。過去は苦しみと後悔に彩られたものばかりではない。「力への意志」は過去に重量を掛けながら、現在を偶然、生成、多様性によって真昼の肯定、必然が許す偶然の最高位に引き上げる。これが「正午の思考」肯定の真昼である。現在はこうして「未来の過去」となり未来は「過去の現在」へと循環する。このとき現在の生成は単なる過去の再現ではなく、あらゆる組み合わせの最善を目指す肯定として是認される。ここに必然の環と自由の環とが二重に組み合わせられるのだ。そのとき

それにしても、勇氣は最善の殺害者である、攻撃する勇氣は。それは死をも打ち殺す。つまり勇氣はこう言うのだ。「これが生だったのか。よし。もう一度」と。

こういうことばのなかには、高く鳴りひびく剣のたわむれがあるのだ。耳ある者は、聞くがよい。

(同 第三部 幻影と謎)

「**これが生だったのか。よし。もう一度**」という**運命愛**の肯定が訪れる。こうして永遠回帰説は、倫理的重量を必然の環に負荷しながらひとつのこの上ない形を作ろうとする。結局この重量の掛け具合によって未来も、過去もその意味を変えてしまうことになり、来世による審判こそないものの、この真昼の極点に形を結晶化できるか否かがその後の人生、歴史を決定付ける。しかし個人の人生は死ねば死につきりじゃないかって？

『いまわたしは死んでゆく、そして消滅する』と、あなたはそのとき言うだろう。『そしてたちまちにしてわたしは無になる。魂も肉体も、滅びることにおいて変わりはない。』

だが、わたしがからみ込まれていたもろもろの原因の網目は——ふたたびわたしを創り出すだろう。わたし自身が永劫の回帰のなかのもろもろの原因の一つなのだ。

わたしはふたたび来る、この太陽、この大地、この鷲、この蛇とともに。——新しい生、よりよい生、もしくは類似した生へ返って来るのではない。

——わたしは、永遠にくりかえして、同一のこの生に帰ってくるのだ。それは最大のこ

とにおいても最小のことにおいても同一である。だからわたしはふたたびいっさいの事物の永劫の回帰を教えるのだ。——

——だからわたしはふたたび地と人間との大いなる正午について語り、ふたたび人間たちに超人を告知するのだ。

——わたしはわたしのことばを語った。わたしはわたしのことばによって碎ける。それがわたしの永劫の運命だ——。すなわち告知者としてわたしは滅びるのだ。

没落してゆく者が自分自身を祝福する時が、来たのだ。こうして——ツァラトゥストラの没落は完了するのだ』

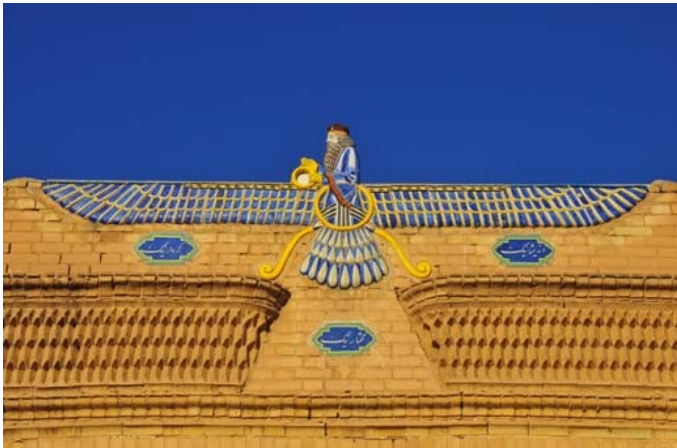
（ 同 第三部 快癒しつつある者 ）

「いまわたしは死んでゆく、そして消滅する」しかし「わたしはふたたび来る、この太陽、この大地、この鷲、この蛇とともに。」倫理的起動によって選択されずらされた円環軌道に、私は死を乗り越えて次の人生を誰かに似たものとして再生していくことになる。（うへん、これはちょっとニーチェの曲解か？ツァラトゥストラは「わたしは、永遠にくりかえして、同一のこの生に帰ってくるのだ。」と言っているからね。少なくとも個人の再生ではなく個人を含んだ歴史・自然の連続的な大きな再生の環を考えないと個人の死は乗り越えられない。このあたりショウペンハウアーの意志説——個人を超えた連続、と似ている。）

以上を表にしてまとめておく。

立場	実体	審判	要因	到着点	救い
エルの神話	魂	悪人は千年後	生き方	忘却→来世	倫理的生き方
ヒンドゥー教	我（アートマン）	死後すぐ	業	来世	梵我一如（解脱）
仏教	無我（アナートマン）阿頼耶識	初七日～四十九日	業	来世（六道）	悟り（解脱）
永遠回帰	主体・自然		力への意志	同一物の回帰	運命愛極点（正午）

2014. 7. 2



永遠の命はあるか（2）

キリスト教では宗教教団は次の3つに分類されたりする。

- 1 チャーチ・・・伝統的大手教団（カトリック、バプティスト、メソヂスト）
- 2 セクト・・・かつて邪教教団と排斥されていたが解散に至らず教線を拡大してきたもの（モルモン教、エホバの証人・・・など）
- 3 カルト・・・セクトより新しく教祖、カリスマが活躍中の小規模教団（「神の子教会」「統一教会」ハーレ・クリシュナ、ラジニーシ教団、）

カルトはセクトになり、セクトはチャーチになる。この過程は日本仏教史における鎌倉新仏教にもあてはまるであろう。その中で浄土宗、浄土真宗は天台宗というチャーチから出て、新しいカルトとなり弾圧後セクトとして成長し、やがて大教団（チャーチ）となった。

日本の浄土教についてはこの論考の最後に触れる。前回「永遠の命はあるか（1）」ではギリシャのエルの神話、ヒンドゥー教、仏教における輪廻思想、ニーチェの永遠回帰説について触れた。これらは円環的時間の回帰を特徴とする死生観を特徴としたものだったが、今回扱うものはむしろ直線的な時間を主軸としそこに一種の終末論を含んだ破局がやってきて善悪の最終決戦が為され、最後に善人が救済されていく構図になっている思想について述べる。

2 ゾロアスター教

ゾロアスター(Zoroaster)は紀元前6世紀に活躍したイランの宗教家であり、ニーチェの「ツアラストラはかく語りき」の *Zarathustra* のモデルとなったことはよく知られている。30歳の頃サラバン山の山頂で光明の神アフラ・マズダの天啓を受けて預言者となった。その教えはペルシャ東部でその地歩を確立し、西方に広がっていった。彼の死後起源3世紀に起こったササン朝ペルシャで国教として栄えたが7世紀半ばにペルシャ帝国が滅び、イスラム教の出現と拡大によって、次第に衰退していった。インドではパーシー教、中国では祆教（拝火教）として、また日本にも伝えられた。

その教説は聖典「アヴェスター」に説かれている。その根本原理は二元論であり、強い終末論に支えられている。

- | | | |
|---|-------------|----------------|
| { | 善神アフラ・マズダ | ・・・光明・生命・清浄の原理 |
| | 悪神アングラ・マイニュ | ・・・暗黒・死・不浄の原理 |

宇宙はこの2つの神の抗争によって成り立っているが、最終的には善神アフラ・マズダの勝利で結末を迎える。

個人的な終末観においては、死後の人間の霊魂は風に運ばれ、チンウァト橋（審判の橋）の前で3人の天使の審判を受ける。善人は天国へ、悪人は地獄へどちらでもないものは煉獄で最後の審判を待つ。



個人的ではなく歴史的な終末観では、ことの規模はもっと大きくなり、この世の存続期間は天地創造から1万2千年とされる。各期間は3千年ごと四期に区切られる。以下表に示す。

ゾロアスター教の「死後の審判」「天国と地獄」「救世主」「最後の審判」という考え方はゾロアスター教のオリジナルであり、これが後の宗教に（ユダヤ教、キリスト教、イスラム、大乘仏教）大きな影響を与えた。

3 キリスト教（ヨハネの黙示録）

期 間	時 期	出 来 事
第一期	精霊の創造期	アフラ・マズダが、大天使、空、地、水、動植物、人間
		ユが悪霊の創造
		戦闘期。この3千年の終わりにゾロア
		は頂点に達し、最後の審判の日がやっ ターの末裔メシアが出現し、天より突 地上を焼き払って浄化し、アフラ・マ マイニュを完全に打ち破り悪の軍隊は る。このとき「最後の審判」が行われ、 設され、全人類は天国・煉獄・地獄か なり、新しい不滅の世界が始まる。

政治的、宗教的な迫害や、危機に

対処するためにその最終結末に至る歴史を神の側の勝利をもって語る黙示録は神と悪魔との壮絶な抗争として描かれている。その内容は新約聖書の「ヨハネの黙示録」を読んでもらうのが最短距離だが、今、分かりやすいように表にまとめてみる。

神が示そうとする大きな巻物には七つの封印が施されており、これを剥がしていかなければ中の文字は読み取れない。天上でこの巻物の封印をはがすのは神の子羊（イエス）である。ヨハネはその内容を聞き幻視している。

七つの封印は4つまでが白、赤、黒、蒼の馬で、騎手は勝利や災いの力を託される。第七の封印が解かれると大きな巻物の中身が現れる。この第七の封印の内容はそれぞれ7つのラッパによって示されていく。いずれも地上の災いが示され、第七のラッパ（最後のラッパ）が吹かれると何かが盛られた「鉢」が現れる。その内容は今度は小さな巻物によって示され、ヨハネはこの巻物を食べるように言われて食べる（食べる＝自己展開）すると次々に「鉢」が現れ地上への災厄をもたらす。第6の鉢ではハルマゲドンに王達が終結し、決戦の準備を始める。第7の鉢にいたって、第1の決戦が始まり、ここでバビロン＝ローマ帝国（大淫婦）は崩壊し、地上へキリストが再臨する。キリストはここにサタンを千年間幽閉し、地上の国「千年王国」を樹立する。千年後サタンは解放されここに「最終決戦」が行われることになる。注意すべきことは第7の鉢が現れたところでまず第1の決戦が行われ、ここはまだ最終決戦ではないことだ。この第1の決戦の後、地上における至福の千年間が続きその後、サタンが解放されて起こる第2の決戦が「最終決戦」なのだ。この決戦において神は勝利し、復活した死者達への「最後の審判」が行われて初めて「神の国」＝永遠の世界が始まるのだ。

以上の筋書きは下表によって確かめていただきたい。

「ヨハネの黙示録」——「七つの封印」

	内 容			
第1の封印	白い馬、勝利の騎手			大きな 巻物（表）
第2の封印	赤い馬、戦争の多発			
第3の封印	黒い馬、飢饉			
第4の封印	蒼ざめた馬、多くの死			
第5の封印	白い衣、迫害と殉教者			
第6の封印	天地万物の更新			
第7の封印	<ラッパ> 1～7			

前兆期	第1のラッパ 第2のラッパ 第3のラッパ 第4のラッパ 第5のラッパ	地上の災い 血の海 にがよもぎの河 太陽・星の異変 神を信じぬもの の苦役		大きな 巻物（裏）
艱難期1 5ヶ月				
艱難期2 3年半	第6のラッパ	火による人類の 滅亡		
艱難期3 3年半	第7のラッパ (終わりのラッパ)	<鉢> 1～7		
		第1の鉢 第2の鉢 第3の鉢 第4の鉢 第5の鉢 第6の鉢 第7の鉢	独裁政権への疫 病 血の海 血の河、水 太陽の炎熱 暗黒 ハルマゲドンの 準備 大地震・天変地異 第1の決戦 バビロンの崩壊 地上へのキリス トの再臨 サタンの幽閉 サタンの解放 サタンの敗北 あらゆる死者の 復活と審判 神の国：永遠の 世界の始まり	小さな 巻物 (ヨハネは 食べる) 千年王国の 樹立：地上 の国 (千年間) 最終決戦 最後の審判

以上が「ヨハネの黙示録」における「七つの封印」の概略だが、少しき気になる個所に「千年王国」の樹立がある。「千年王国」は地上における至福の国であって、虐げられた民衆にとっては「神の国」に入るよりもこの地上の国で至福を極める方がより、手っ取り早い方法であった。「千年王国」に入るときの決戦（終末）は、最初の決戦であって、最終決

戦ではない。しかしローマ帝国にあってはこの「千年王国」がしばしば待望された。それ



でもキリスト教が国教化され、教会が実質的な権力を握るに至った3世紀頃の教会にあっては終末論を振りかざし、世に革命を起こそうとするこの「千年王国」の考え方は、邪魔なものでしかなかった。それ故そういう考え方は異端として退けられたのである。4世紀に入って、ローマがゲルマン民族に占領されるや、キリスト教の権威は地に堕ち、そのとき護教論をぶったのがアウグスチヌスだった。彼は「神の国」の中で、この千年王国について王国は既にイエスの出現によって始まっており、その実現は「教会」が実践しているとして、終末論的「千年王国」論を否定した。

しかし、この千年王国的な考え方はその後もいくつかのヴァリエーションを伴って、再現された。(太平天国、大本教・・・) なかでもマルクス主義には「原始共産制→階級社会→

社会主義社会→共産主義社会」という時系列にこの考え方を含んでいる。すなわち「社会主義社会」は「千年王国」の始まりであり、「共産主義社会」はその最終決戦が行われた後の永遠の世界であるというオプティミズムにその考え方がよくあらわれている。

しかし現実の「千年王国」は、官僚と民衆との格差社会、収容所によって異端者を排除虐殺する独裁国家、どこまでも権力に執着し、他国・他民族と絶えざる紛争を引き起こして拡張を続けようとする、現代のレヴェイサンに他ならない。

この終末論の特徴はハルマゲドンでの決戦は第1の決戦であり、その後至福の千年王国が始まりその最終期に解放されたサタンとの第2の決戦(最終決戦)が行われ神は勝利し、ここで復活した死者たちの最後の審判が行われ、永遠の世界が始まるとされていることである。終末論を持つ宗教教義では最後、善が勝ちその後永遠の世界(神の国)が続くと考えている。

4 日本浄土教



釈迦入滅年は一般にはBC 486年とされているが、古来中国、日本ではBC 949年が基準であった。末法思想というのはこの入滅年を基準にして500年ごとに仏教のあり方が衰退していくという考え方だ。

BC 949～449	正法時代 ・・・教（教え） 行（修行）証（悟り） が保たれる
BC 448～AD 51	像法時代 ・・・教行のみ が保たれる
AD 52～（AD 552）	末法時代 ・・・教のみ残る。 修行するものも悟りを開く ものも居なくなる。

中国では像法時代に500年足し、日本では正法時代に更に500年足して末法時代とした。従って日本の末法時代はAD 52年に1000年足した1052年（永承7年）に始まるとされた。

この時代あたりからの出来事を拾ってみよう。

985	源信「往生要集」
1052	末法時代の始まり 。前九年の役
1058	新築内裏炎上焼失、法成寺焼失
1059	興福寺焼失
1156	保元の乱
1159	平治の乱
1185	鎌倉幕府
1186	大原談義（法然）
1204	七箇条起請文（法然）
1206	法然土佐配流、親鸞越後配流
1211	法然帰洛
1212	一枚起請文（法然）
1235	親鸞帰洛
1247	親鸞「教行信証」

さて、日本の仏教は平安時代、大乘仏教の優位性を説く最澄、その中でも密教の優位性を説く空海らの活躍によって奈良仏教の助走から大きく先へ展開して行った。しかし、末法の時代に入り天変地異が続き、時代の混乱が深まるにつれて加持祈祷や自力修行による救済（**聖道門**）では時代のニーズに応えられなくなっていった。教団に拠ることや、修行の可能な人間しか悟ることが可能でないとしたら多くの民衆を含んだ人々には何の救いの可能性も残されていなかっただろう。しかし仏教の「**本覚思想**」（悉皆成仏、悉有仏性）によればどんな人にも仏性は備わっているはずだから、一部の人間しか救われないのはおかしいのだ。

日本浄土教に深い影響を与えた源信は末法時代の前に亡くなっているが、その著「往生要集」は浄土門の仏教に決定的な影響を与えた。その序文には修行の方法は様々あろうが、自分のような「頑魯の者」には濁世末世において、そういう難しい修行はできようもないので、とりあえず悟り易く、行い易い念仏の教えに限ってここに集める、といったことが記されている。聖道門より**浄土門**の勧めである。

大原来迎院に隠棲した良人は「一人一切人、一切人一人、**一行一切行**、一切行一行」（一人の念仏は他の一切の人の念仏に影響を与え、その逆も真である。一つの念仏は一切の念仏の価値を持ち、その逆も真である。）この相互融通性のある考え方が「**融通念仏**」と呼ばれた。なかでも「一行一切行」（信をこめられた一つの念仏は一切の念仏に価する）という考え方は、何万回となく念仏を唱える「行」に対してむしろ一回の「信」を重んじているという点で後の人に大きな影響を与えた。ひろさちやは「仏教の歴史8——末法の世の救い」の中でこれを

{ 多念義・・・行を重んじる仏教者
 一念義・・・法然
 (無念義)・・・親鸞

のようにまとめている。

濁世末世における救いのあり方は修行より、信仰の方に重きがおかれたのだ。（明恵のようにそれに反発し、法然批判をした華嚴宗の僧もいたが・・・）

以下に法然の「一枚起請文」（ほとんど遺言）と親鸞の「教行信証」総序を掲げる。

一枚起請文

唐土我朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる、観念の念にもあらず。又学問をして念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑ひなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候はず。

（ 法然「一枚起請文」 ）

智者達の観想や学問的な念仏論によるのではなく、往生極楽のためには、「南無阿弥陀仏」と言うこと以外に別の仔細俟はず、と法然はきっぱりと断言している。

かるがゆへにしんぬ、圓融至徳の嘉号は悪を転じて徳をなす正智、難信金剛の信樂はうたがひをのぞき証をえしむる真理なり。しかれば凡小修しやすき真教、愚鈍ゆきやすき捷径なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし。機をすて浄をねがひ、行にまどひ信にまどひ、心くらく識すくなく、悪おもくさはりおほきもの、ことに如来の発遣をあふぎ、かならず最勝の直道に帰して、もっぱらこの行につかへ、ただこの信をあがめよ。

(親鸞「教行信証」総序)

この文の前に、釈迦の命を狙った提婆達多や父親殺害の阿闍世の事件は弥陀があえて犯させた事件であって、その機縁で阿闍世の母、韋提希夫人に救いの説法（「観無量寿経」）を行い世に教えを広めることができた、という文言がある。

それに続けて、悪を転じて徳をなす正智（圓融至徳の嘉号）、うたがひをのぞき証をえしむる真理（難信金剛の信樂）が賛美され、「機をすて浄をねがひ、行にまどひ信にまどひ、心くらく識すくなく、悪おもくさはりおほきもの」は「もっぱらこの行につかへ、ただこの信をあがめよ。」と結ばれ、ひたすら行信につかえあがめることが力説されている。

阿弥陀仏の浄土＝極楽世界、に生まれ変わることは円環的な輪廻の永遠の循環的苦役から解放されることである。この救済はニーチェが永遠回帰であくまで地上の最高の強度を求めたこととは異なって、来世での完全な救済を宗教が定義したことになる。時間論的にはキリスト教やゾロアスター教での直線的なカタストローフと最後の審判による永遠の神の国を定義するのとは異なって、円環的な時間の切断と苦からの救済という意味を持っている。日本の浄土教の場合それは現世での仏国土の建設といういよりも信を持つものに見えている彼岸としての仏国土であって、より観念性が強い分、宗教的な完成度も高い。自力行を否定することで浄土教は釈迦を宇宙仏の使者とし、仏の絶対的な救いの手に任せるという＜信＞を教義の中核に据えることで（仏法僧）、キリスト教の神と子と精霊（法）の教義に近くなった。そういう意味では本来の仏教のあり方から大いに逸脱しながら鎌倉時代に新しい宗教として展開されていったものである。

2014. 8. 1

おひとりさま考――一期一会

1



7月10日の京都新聞の夕刊、「現代のことば」で評論家の川本三郎は「老いの一人暮らし」という一文を寄せている。

川本は6年前に奥さんをなくし、今年で70歳になった。「選んだ孤独は良い孤独」というフランスの言葉をもっともと思い、「良い孤独を」めざしたいという切り口から、話は網野菊の小説「ひとり暮らし」に繋がっていく。網野の「ひとり暮らし」は昭和34年79歳で亡くなった永井荷風の死にちょっとした衝撃を受けて書かれた心境小説風の短編だ。川本は主人公よし子の荷風評を共感をもって記す。

＜荷風の死は長患いでもないし、非業の死でもなかった。孤独に死ぬことは前もって予期していた結果であり、これはこれで幸せであったのではないか。＞

荷風の死は一般に預金通帳を後生大事にかかえこみ普段着にベレー帽をかぶったまま寝室で倒れ死んでいた、といういささか滑稽な「文豪」の死、として扱われやすい。すくなくとも「アメリカ物語」や「フランス物語」を書いた明治のモダンな新帰朝者というイメージとの齟齬を強調されやすい。少なくとも哲学的病死や自殺といった深刻なイメージでは語られない。2回の離婚と空襲で家を転転として最後は仮寓でぱったりとなくなった。お手伝いさんには必ず毎日来て異常がないか確かめてくれと言っていたそう。それというのも死んで間を置いて腐敗臭漂う中で腐れ、ただれた肉体として発見されたくなかったからだという。

ひとり暮らしの主人公よし子は荷風の死には涙がこぼれるが、よき先例として受け取る。それは非業の死でもなく、哲学的な自死でもない、ひとり暮らしの普通の死であったのだと「生死についての諦めや覚悟」を示してくれた先例として思いみるのである。

今日風に言えば荷風は男の「おひとりさま」であったわけだが、焼き出された空襲の苦い経験から財産を肌身離さず、結構な金持ちとして逝った荷風は現代人の参考となるだろうか。

生涯シングルであろうが、死別離婚によってシングル・アゲインになったにせよ、人は誰しも最後は一人になる。(看取ってもらえる配偶者がいれば幸いだとしても。どちらが先に逝ってしまうかは、しかしわからない) シングルで死ぬための心構えが必要なのだ。上野千鶴子の「おひとりさまの老後」はそんな不安に応えるためのノウハウを列挙した本で結構面白いが、ただそれだけの本だ。老後の見取り図はこれほど単純とは言えない。しかし老後入門したい人は読んでみて悪くはないかもしれない。

それよりも——私が気になったのは網野菊の八世市川団蔵の自死を扱った小説「一期一会」の方だ。

2

八世市川団蔵は昭和41年(1966)6月四国遍路結願の帰り道小豆島から大阪行きのフェリー上から入水して自殺した。84歳であった。この年、4月には引退興行を行い「菊畑」の鬼一法眼、「助六」の意休役を演じた。5月1日になって四国遍路に出発一番札

所霊山寺を皮切りに30日結願大窪寺に到着入水はその帰り道だった。

この自死を三島由紀夫は「団蔵の死は、強烈、壮烈、そしてその死自体が雷の如き批評であった」（「20世紀」）と述べた。

三島が70年に自決した時、吉本隆明が「私が死ぬ時は団蔵のようにひっそりとでありたい」と語ったのが妙に私の脳裏にこびりついていて、死ぬ2年位前にぼったり京都駅の新幹線乗り場付近で車椅子に乗って鬱然と消えていく吉本を見たことがある。死に際はひっそりと静かなものであった。ただ、私は団蔵については何も知らず今日に至り、網野菊の小説「一期一会」によって始めてその概要を知った。

父、七世市川団蔵に較べて息子の団蔵は「花のない役者」と言われ続け、本人は何度も引退を申し出ているが慰留されてきた。生涯脇役に徹し、引退興行「助六」では助六にい



多彩な登場人物 左から白酒売り 助六 意休 白玉 揚巻

の探す名刀「友切丸」を所持している）小説「一期一会」の中で網野はこの最期の芝居を見て不愉快になった、と記している。なにも最後の最後になっていびり殺されるような役をやらな

くても・・・というのがその不満の原因なのだが、何しろ本人が指定した役なのだしそれも仕方がない。むしろこの自虐的な役こそ団蔵の、その後を予告する布石だったと考えなければならない。

また、当日ではないが団蔵の当たり役「井伊大老」の仙英禅師（直弼の幼い頃の学問の師）が井伊大老に別れを告げる時「一期一会」と書いた箕傘を置いて去るシーンを網野は印象深いものとして書いているが、これなど直弼の運命を予感し、もはや会うこともあるまいという意を告げた場面で、まさしく団蔵の運命を予期させるものであったろう。（仙英禅師）



団蔵は死に当たって「我死なば 香典受けな 通夜もせず 迷惑かけず さらば地獄へ」と書いた。またそれ以前には「永生きは損じや 月々いやなこと 見聞く憂き世は あきてしまった」という狂歌も作っていた。団蔵の厭世観と手際の良い身のかたづけ方は、つつましやかに見えて「雷の如き批評」であったろうが、その生き方・死に方には確かに何か考えさせられる「覚悟」の周到さを感じてしまう。最後におなじ境遇をかこっていた網野菊の一句。

冬支度するもひとりや石^{つわ}落の花

2014. 7. 17

私と汝——西田哲学と臨床精神医学



7月12日～13日に稲盛財団による初めての合同京都賞シンポジウムが京大で開催された。(後掲新聞記事参照) 内容は生命科学分野、思想・倫理分野、情報科学分野の3部門に分かれて一般シンポジウムを初日に、更にそれを深めてワークショップを2日目に行うというものだった。わたしは思想・倫理分野に両日とも参加した。講演者の中におなじみの木村敏がいた。2日目は思想・倫理分野のテーマが「京都学派の現代における意義と可能性」というものだったが、各人ばらばらな発表で残念ながらこのテーマを表現しうることではなかった。

木村敏の発表の中で彼の大好きな西田の「私と汝」の次の1節が問題となった。

私と汝とは絶対に他なるもの、である。私と汝とを包摂する何らの一般者もない。しかし私は汝を認めることによって私であり、汝は私を認めることによって汝である、私の底に汝があり、汝の底に私がある、私は私の底を通じて汝へ、汝は汝の底を通して私へ結合するのである、絶対に他なるが故に内的に結合するのである。

(西田幾多郎「私と汝」二)

この部分はよく引用される有名な部分であるが内容は決して易しいという訳ではない。シンポジウム当日ではこの「私の底に汝があり、汝の底に私がある」の「底」とはいったい何なのかということが問題になった。なぜならこの「底」というのが自他を結びつける

鍵言葉となっているからだ。木村はう〜んとうなりながら、「間主体的なアクチュアリティ（働き）は、ヴァーチャリティ（力）によって支えられている」といったような内容のことを言った。このヴァーチャリティ（力）が「底」なのだというヒントである。

実際には、この文章で自他関係を「底」という空間概念で捉えていることに注目しなければならない。この文章の省略されている前半部分を取り上げてみよう。

由来、弁証法というも、単に過程的に考えられその根底に場所的限定のあることが注目せられないのであるが、絶対の死即生である絶対否定の弁証法においては、一と他との間に何らの媒介するものがあつてはならない、自己が自己の中に絶対の他を含んでいなければならぬ、自己が自己の中に絶対の否定を含んでいなければならぬ、何らか他に媒介するものがあつて、自己が他となり、他が自己となるのでなく、自己は自己自身の底を通して他となるのである。何となれば自己自身の存在の底に他があり、他の存在の底に自己があるからである。

（ 同 ）

ここで言われていることは自己は他者との＜媒介＞によって他者となるのではなく「自己は自己自身の底を通して他となるのである。」という部分である。つまり場所的限定を主眼にもつ絶対弁証法においては「一と他との間に何らの媒介するものがあつてはならない、自己が自己の中に絶対の他を含んでいなければならぬ、自己が自己の中に絶対の否定を含んでいなければならぬ」ということなのだ。これが「底」（自己の中に含まれた絶対否定）の意味なのであつて、ここを省略して論じていては「底」の意味は分からなくなってしまう。弁証法的限定には「直感」が必要だ。この「直感」は・・・

直感ということは一つのものが直ちに他となる、一が自己自身の内から他に移り行くというこでなければならぬ。その間に両者を媒介する何物かがあると考えられるかぎり、それは直観ではない。かかる限定が考えられるには、一の底に他があると考えられねばならぬ、自己自身の底に絶対の他があると考えられねばならない。

（中略）

背理のようではあるが、真に自己の内から他に移るということは、一面において無媒介的に飛躍的に移るという意味を有っていなければならない、そこでは一步一步が直観的と考えられるのである。何らかの意味において対象的限定という如きものが考えられるならば、真の直観という如きものはない。真の直観というものが此の如く弁証法を包むと考えられねばならぬとともに、真の弁証法というものが絶対否定を媒介とする絶対弁証法と考えられるかぎり、直観によって基礎付けられていると考えなければならない。唯、直観というものが単に受働的とか、自発的とか考えられ、弁証法というのも、ノエマ的に、連続的に考えられるかぎり、両者は全く離れたものとするほかないのである。

(同)

真の弁証法というものは直観的なものであり、「背理のようではあるが、真に自己の内から他に移るということは、一面において無媒介的に飛躍的に移るという意味を有っていなければならない」「直感ということは一つのものが直ちに他となる」ことであり、両者（自他）を媒介する何物かがあるのではなく「一の底に他があると考えられねばならぬ、自己自身の底に絶対の他があると考えられねばならない」

これで、だいたい「底」の意味がわかっていただけたらうか。

「間主観性（間主体性）」の理解は主客分離の哲学を克服するための現代哲学の基盤的な考え方だが、西田のこの考え方は実に明快に「間主観性」を説いている。他にこの考えを理解するよい本としては、フッサールの「デカルト的省察」木村敏の「あいだ」がある。

少し長いが西田の力説する部分を引用しておく。

自己が自己において絶対の他を見ると考える時、我々の自己は死することによって生きるという意味を有し、他の人格を認めることによって自己が自己となる、私の根底に汝があり汝の根底に私があるということが出来る。かかる弁証法的限定においては私に於て見る他と考えられるものは、単なる他ではなくして汝の呼声の意味を有っていなければならない。すべて表現と考えられるものはかかる意味を有ったものでなければならぬ。表現というのは我において我に対して見られる他というべきものであつて、しかもその背後に他の呼声の意味を有ったものでなければならない。自己の底に絶対の他を認めることによって内から無媒介的に他に移り行くということは、単に無差別的に自他合一するという意味ではない、かえって絶対の他を媒介として汝と私とが結合するということでなければならない。自己が自己自身の底に自己の根底として絶対の他を見るということによって自己が他の内に没し去る、即ち私が他において私自身を失う、これとともに汝もまたこの他において汝自身を失わなければならない、私はこの他において汝の呼声を、汝はこの他において私の呼声を聞くということが出来る。

(同)



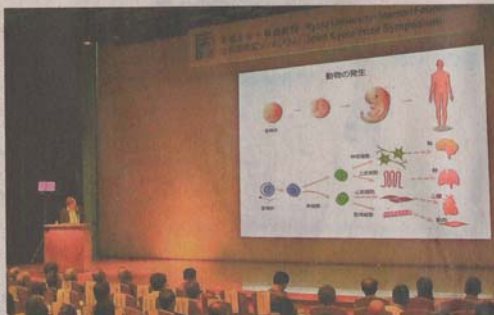
2014. 7. 18

***京都新聞 7月13日朝刊

京大と稲盛財団 初の合同シンポ

る分子のカドヘリンを発見した竹市さんは講演で、同分子が組織や体の形にも大きく関係していることを写真や図を使って紹介し、集まった約4500人の市民が熱心に聴き入った。13日は生命科学、思想・倫理、情報科学の各分野で講座が開かれる。

(松尾浩道)



竹市雅俊さんから国内外の研究者が講演した
シンポジウム(京都市左京区・京都大)

1



主な内訳は、オランダ１８９、マレーシア４４、オーストラリア２７その他米国１、日本人の乗客はいなかった。（子ども８０人、オーストラリアに向かうエイズの専門家６人を含む）日本の旅客機は東京を目指す場合ロシア北部を通過し、ウクライナを横切ることはない。

32

ウクライナは親ロ派撃墜の盗聴記録を公開、撃墜機が民間機であったことを事後確認したような会話が、そこに記録されている。またウクライナは、ブク地对空ミサイルの移動状態を極秘で撮影公開した。ロシアのプーチン大統領はウクライナ上空で起こったことはウクライナの責任と逃げをうった。

18日国連安保理ではアメリカの国連大使とロシアの国連大使とが双方の非難合戦を行い、それでも事態の早期調査の必要性は確認された。さっそく欧州安保協力機構（OSCE）が30人の調査員を現場に派遣したが、親ロ派の妨害で19日現在、十分な調査はできないままになっている。



子供80人＝マレーシア機撃墜

以上が事件のあらましだ。

折も折、イスラエルは17日、ガザ地区への地上進攻をおこない、ハマスとの戦闘によって、多大な民間人の被害者（死者）を出している。このような世界の混乱を見るにつけひとつの意志が、あるいは力へ向かった意志が世界史の一局面に結集し乱れあっているような印象を受ける。これを力への意志、といったらいいのか、或いは権力への意志？

すこし古い時代であれば、神か絶対者がこの地上世界の彼方、天空で将棋の駒でも動かすように事態を展開させ、楽しんでいるかのようにも見える。絶対者の遊戯は地上世界の悪夢、地獄なのだ。ここで少し哲学的課題に戻って、「力への意志」について考えてみよう。

2

「力への意志」(Wille zur Macht) はどう解釈されるべきなのか。誤解されやすいのは「力へ向かっての意志」とか「権力獲得のための意志」と言ったような解釈であるが、ドゥルーズは次のように書いている。

三、力の質は、その原理を力（への）意志のうちにもつ。そして「誰が解釈するのか」と問われるならば、力（への）意志がと答えよう。解釈するのは、力（への）意志なのだ。しかし、このように力の質の源泉にあるためには、力（への）意志はそれ自身質を、とりわけ流動的で力の質よりもなお精妙な質を、もたなければならない。「君臨するのは、力（への）意志の全くの束の間の質である」直接的に発生論的あるいは系譜学的な境位に関わる、力（への）意志のこのような質、流動的原初的種子的なこのような質的諸要素〔境位〕は、力の質と混同されてならない。また、ニーチェによって用いられる用語に固執することが肝要である。つまり、能動的と反動的とは力の本原的な質を示しているが、肯定的と否定的とは力（への）意志の原初的な質を示している。肯定と否定、価値評価と価値軽視は力

(への) 意志を表現しており、能動と反動とは力を表現しているのである。そして反動的な力もやはりなお力であるのと同じ様に、否定する意志、ニヒリズムも力(への) 意志をもっている。

(ドゥルーズ「ニーチェ」第二章 能動と反動 7

ニーチェの用語法)

力そのものは意志することはできない。意志するのは「意志」そのものしかありえない。従って「力への意志」というのは「意志」なのであって、とりわけ否定・肯定の判断力、総合力を持った意志という意味だ。こういう解釈ではさきほどの「力へ向かっての意志」とか「権力獲得のための意志」という意味にはならない。判断の総合力(という資格を持った) を持った意志。

力の本源的な質 能動的と反動的

意志の原初的な質 肯定と否定

なぜ、こういう解釈になるかという、ニーチェにとって、「生への意志」というショーペンハウアーとの対比が重要だったのだ。

ショーペンハウアー 生への意志 意志は盲目的・・・沈静化：ペシミズム

ニーチェ 力への意志 意志は肯定への力の総合力を持つ：運命愛

ショーペンハウアーの世界では、意志は盲目的に凶暴に表象界に姿を現す。その災厄・不幸を避けるためには芸術的慰謝なかでも音楽は意志の荒れ狂う力を鎮静化し、人間を安静に導く。また重要なのは余計なことを意欲しないという禁欲的な態度が重要となる。それに対してニーチェの場合、意志は否定的にもなりうるが盲目的に凶暴なものではなく肯定的に事態を総合する力を持っていると考える。(運命愛、今一度！そうあった様に意欲すること)「道徳の系譜」のなかからこの対照的な態度を抽出してみようと思うがその前にショーペンハウアーの「意志」説について補足的に掲げておく。

いまかりに、可能性の領域へ向かって、そして因果の連鎖のすべてにわたって、なんらかの明確な見通しがわれわれに許されたとしよう。大地の霊が立ち現われ、きわめて優秀な個人、先覚者、英雄だちかその力をいよいよ発揮せんとした直前に偶然によって滅ぼされてしまったさまを、一幅の絵をもって見せてくれたとしよう。――

それから、その事件が世界の歴史を変え、最高の文化と啓蒙の時代をもたらしたかもしれないのに、じつに盲目的な偶発事や、無意味な不慮の出来事によってその発生を妨げられてしまった数々の大きな事件を大地の霊が見せてくれたとしよう。そして最後に、全時代に豊かな稔りをもたらしたであろう偉大な個人の立派な力技が、誤算や情熱に身をあやまっ

てか、あるいは事の必然にせまられた結果か、いずれにせよ、無価値で不毛なもののため



に無駄に費やされたり、遊び半分に浪費されたりしたさまを、大地の霊が見せてくれたとしよう。――

これらすべてのものを目にしたとしたら、われわれは慄然として、失われた全時代の財宝を嘆き悲しむであろう。ところがおそらく大地の霊は、微笑しながらわれわれにこう語るであろう。――

「さまざまな個体とその力とが流れ出る泉は時間と空間のように汲みつくせないものだし果てしのがないものである。なぜなら個体とその力とは、時間と空間という現象のこの形式とまったく同じく、これまたやはり、意志の現象したものであり、意志の眼に見える形態であるにすぎないからだ。いかなる有限の尺度をもってしてもあの無限の泉を汲みつくすことはできまい。だから、萌芽のうちに息の根を止められてしまった大事件や、人間の業には、けっして減ることのない無限性が、再生の余地をのこして、あいかわらず門戸を開いている。この現象の世界では、本当に得することもなければ、本当に損することもあり得ないのだ。存在するのはただ意志のみ――意志、物自体。意志、いっさいの現象のこの泉。意志の自己認識ならびにそれに基づいて決定される意志の肯定または否定、これこそただ一つの事件そのものにほかなるまい」――

（ショーペンハウアー「意志と表象としての世界」第二巻 35節）

「意志、物自体。意志、いっさいの現象のこの泉」意志は「無限の泉」「物自体」、あるいはその最も似た姿としては「イデア」であって、「表象」（現象）とは区別された本質的なものと考えられている。このことに注意しながら「道徳の系譜」を見てみよう。

（a）一つ目は晩年「パルジファル」を創作しニーチェとの別れの直接的原因をつくったワーグナー批判。（ショーペンハウアー批判にもなっている）。

しかしそんなことは彼（注：ワーグナー）にとって何でもないことになった。ショーペンハウアーの理論と革新、一すなわち、ショーペンハウアーの理解した如き音楽の独裁性が《音楽の光彩を加えるに》より多くの力をもつということを彼はたちまちにして見て取った。ショーペンハウアーによれば、音楽は爾余一切の芸術とは区別さるべきものであって、それ自体において独立的な芸術であり、諸他の芸術のように現象界の模写を提供するものでなく、むしろ意志そのものの言葉を、しかも「深淵」から直接に、その最も独自の、最も根源的な、最も原本的な啓示として語るものである。ショーペンハウアーの哲学に根ざすと思われるこうした音楽価値の異常な高騰につれて、音楽家そのものの価格もまた一挙にして未曾有の騰貴を来たした。爾来、音楽家は神託となり、祭司となり、否、祭司以上のものとなり、物「自体」の一種の吸い口となり、彼岸からの電話機となった。――それ以



来、彼は、この神の腹話術師は、音楽を語ったばかりではない、——彼は形而上学を語った。彼がやがてついに禁欲主義的理想を語るに至ったとしても何の不思議があろうか………

(ニーチェ「道德の系譜」第三論文 禁欲的理想は何を意味するか 五)

音楽家は神託となり、祭司となり、否、祭司以上のものとなり、物「自体」の一種の吸い口となり、彼岸からの電話機となった結果、禁欲主義的理想（「パルジファル」）への通路となったのである。

(b) 今ひとつはショーペンハウアーのカント美学の誤解、むしろスタンダールの正しさ、ひいては力への意志の享樂性の肯定。

ショーペンハウアーは美の賓らす一つの効果を叙述した。意志の鎮静ということがそれである。——だが、これとても果たして常規のものであるか。ショーペンハウアーに劣らず官能的な、しかし彼よりはもっと幸福に生れついたスタンダールは、前に言ったように、美のもう一つの効果を強調する。曰く、「美は幸福を約束する」と。スタンダールには、美による意志の（「関心の」）刺戟ということこそ事実だと思われるのだ。そこで結局ショーペンハウアーその人に対してこう抗議することができるのではあるまいか。——君はこの点で君自身をカント学徒だと思ったのは甚だしい間違いだ、君は美に関するカントの定義を全然カント的に理解してはいなかった、一君もまた一つの「関心」から美を楽しむのだ、しかも最も強烈な、極度に個人的な関心から、すなわち、拷問を受けている者が、その拷問から脱がれようとする関心から美を楽しむのだ、と………ところでわれわれは最初の問題へ戻ろう。「一人の哲学者が禁欲主義的理想を奉じる場合、それは何を意味するか。」——ここでわれわれは、少なくとも第一ヒントともいべきものを捉える。すなわち、彼は拷問から脱がれることを意欲するのである、と。——

(同 六)

カントの「美は無関心な適意」であるというのをそのまま信じたショーペンハウアーは間違っていた。「君もまた一つの「関心」から美を楽しむのだ」。そういう意味からは「美による意志の（「関心の」）刺戟ということこそ事実だ」として「美は幸福を約束する」と言ったスタンダールの方がニーチェには好ましく思えた。少なくともこの享樂的エピキュリアン風の言い方こそが力への意志へ繋がるものだ。

あらゆる動物は、従って（哲学者動物）もまた、各自の力が完全に発揮しえられ、各自の権力感情の《最大》が発揮されるに好都合な《最善》の条件を本能的に追求する。あらゆる動物はその《最善》への道を遮るような、また遮りそうな一切の妨害や障碍を同じく本能的に、しかも「すべての理性よりも更に高い」繊鋭な嗅覚をもって忌避する（——私の言うのは、「幸福」への道ではない。むしろ力への、行為への、最も力強い行為への道であり、しかも大抵の場合は実際は不幸への道である。

(同 七)

「あらゆる動物は、従って（哲学者動物）もまた、各自の力が完全に発揮しえられ、各自の権力感情の《最大》が発揮されるに好都合な《最善》の条件を本能的に追求する。」この傾向は「力の感情」への道である。

こうして、「力への意志」はショーペンハウアーの言う現象に対置される本質、しかも盲目的な意志という規定から（それゆえにこそ、ペシミズム禁欲主義が生まれたのだが）、ニーチェにあっては「力へと高められた意志」生を「然り」と肯定する力として盲目的にわれら現象を翻弄するものではありえない力として捉えられていくようになる。（正午まひるの哲学！）

ツアラツストラの次のような言説も参照。

真理に向かって、『生存への意志』ということばの矢を射かけた者は、もちろん真理を射当てなかった。そういう意志は——存在しないのだ。

その理由はこうだ。まだ存在しないものは、意欲するはずがない。またすでに存在しているものが、さらに存在や生存を意欲することは、ありえぬことだからである。

およそ生かあるところにだけ、意志もある。しかし、それは生への意志ではなくて——わたしは君に教える——力への意志である。

(ニーチェ「ツアラツストラはかく語りき」第二部 自己超克)

3

「力への意志」について考えたみたが、地球儀の上で行われている「力への意志」の乱戦は力の能動的と反動的、意志の肯定と否定との複雑な組み合わせの様相を含めて世界歴史の一断面としてしか経験し得ないわれわれにとっては予測できるなものもない。そして力の消耗戦の尽きる日、という絶対地点あるいはノーマンズランド（何処でもない地）での休息においてしか平和は実現できない。双面としての歴史・・・

ところで歴史は絶対精神の具現化でもなければ、系譜学的な積み重ねでもないとしたなら、＜救済＞はどこにあるのか。戦争と戦争との束の間の休憩時間しか平和を約束できない現代には黙示録的な終末的時間もない上、即物的永遠回帰のイクシオーンの苦しみにただ耐えているだけの＜悲劇的＞な物語しか見えてこない。このような時代に「永遠回生しよう」と言うことはなんという勇気を奮い起こさなければならないことか！

2014. 7. 21

[イクシオーン：ふしだらな王イクシオーンはゼウスによって回転する火の車輪に縛りつけられ、地下のタルタロスで永遠の責苦をうけることになった。]

死に関する科学的ニヒリズム批判

——三つの死生観

1



人間の死に関して科学では、それを有機体の無機物への解体として捉える。それにはいくつかの根拠があるが、代表的なのは＜類推＞機能による。なぜなら自分の死後のことは死んだ本人がその感想を述べたり、体験記をこの世に戻ってきて語ることはできないからだ。

（ 勿論、様々な臨死体験の報告や、復活した人の宗教的体験談などがあつ

たりはするが）

そこで、類推とは自分以外の動物、人間の死の有様から同じ生物である自分がだいたいどういう風にして死に至るかということを類推する方法である。人間の場合であれば、おおむね生きた反応を示さなくなり、人体が腐り、骨となっていく様相から生物体としての何の活動も示さなくなる様子から、少なくとも生きている人間の共同社会からその所属を抹消され、生物体としても葬られてしまう過程がその類推の対象となる。その有様は自分も同様に有機体から無機物となり、葬られて骨のみとして残るであろうという類推を呼ぶ。考古学などではこの過程はあまりにもドラマティックであり、何万年も前に生存したとされるマンモスの骨からその生存状態が類推される。同様なことが身元不明の犯罪捜査においても使われている。この方法では破壊されたものから破壊されていない時代の様相の復元がなされ、それが何らかの有用性を持ったりするのである。

こうして死物、破壊物となって、そのもの自身からの証拠を生物（いきもの）時代と同様な方法で聞き取れないことに対する代替としての補充が行われる。これを見てわれわれもこの様相と同様な破壊のされ方、死体への移行を経験することになるだろうという＜類推＞が登場するのである。するとその様相は死後の破壊後を本人は語れないという冷厳な事実をわれわれに見せ付ける。この類推によってわれわれの死後は無機的な物資に還元され土に還り、魂などという目に見えないものなどは存在せず、ただ＜自身＞の存在しない世界が残されてそのまま世界が淡々と持続していくと、われわれに考えさせるのである。

こういった世界観はもともと小粒子の組み合わせから物質はできており、その組み合わせによって化合物の性質が変化するという粒子・原子論を基盤として、有機体も無機物から合成され、その最も高い成果が＜生命＞であるという考え方から来ている。（生命は無機物の離合集散である）そうなってくると生命は切り刻んでもただの物質ということになり、

それなら爆撃で何人死のうが、誰かに殺されようがそれはただの無機物への解体であって、痛くも痒くもないといった生命観が出てきても不思議ではない。この考え方を基盤として兵器はより精緻になり、殺害方法はより大規模にかつ瞬時に行われるようになった。死んだものたちは<ただ>無機物に還っただけだ、というのが殺害者の言い分である。しかも今や、生物は複製され（クローン）再生医療は人の生命の再生方法にまで迫らんとしている。

単純な生物から始まって思考を持つようになった人間に至るまで、しかし生物にはその独特の文化、文明があって、それらは科学的な思考に対してもっと違う考え方をしてきた。

2

私たちが身近な人を失った時のことを考えてみよう。その典型例は父母・兄弟・姉妹といった親族の死であろうか。特に子供にとって父母の死は生育に大きな影響を与える。それはただ単に物質の解体と大地への還元といったドライな世界ではありえない。かけがいのない人（代替不能の人）を失った悲しみはいつまでも消えない。思考と感情を持つ人間の特性は慣れ親しんだ肉親の死に対して深いこころの傷を残してしまうのだ。そのため人間は「喪のしごと」をしなければならないし、無常なる世の中に対しての哲学的防備を固めなければならないのだ。

肉親の死でさえこのような大きな影響力を持つのに、それが<自分の死>であつたらどうであろうか。肉親は長く慣れ親しんだ傍らの人ではあるが、最も長く慣れ親しんでいるのはいうまでもなく自分自身である。だから自分が自分に別れを告げなければならなくなった時、人は不安と恐怖、怒りと哀願、諦めと絶望を感じるのだ。もはや<コギト・エルゴ・スム>と唱えることさえできない。自分がこの世に別れを告げるとき自分の魂はどうなるのだろうか。もう今生限りのお別れなのだろうか、死後の再生はありえないのだろうか・・・などと短い余生を嘆くことだろう。

さて、こんな次第で自分が無機物に解体され土に還ると考えれば、気楽なようで実際には自分への執着というものはそんなに単純に割り切れるものではない。無機物にしかならないというのがあつさりしすぎればしすぎているほど、割り切れているようで、割り切れていないのだ。

3

今1、2で説明した各々の態度を仮に死生観の立場から（1）科学的な立場（2）倫理的な立場、という風に呼んでおこう。

急いでこの世から消えたいと願っている自殺志願者にとっては科学的ニヒリズムはむしろ、あつさりこの世から消え去る根拠となるかもしれない。様々な苦悩を背負ってきた

身体からさようならを告げることができ、もう苦しなくてよいのだから、これほど都合の良い死生観はないだろう。

しかしいつまでも生きていたいほど、そこそこ人生を楽しんでいる人、今死にたくない人にとっては科学的な死生観は冷たくむごい宣告である。なぜなら人間は考古学者や生物



学者のように冷静に＜自分の＞無機物への解体を祝福し、喜んで何もないまま去っていくことができない存在だからだ。それを私は「倫理的な立場」と呼んだが、それはなにによりも人間は生きるにせよ、死ぬにせよそこに何らかの「意味」を求めざるを得ないからだ。まるで生物学の標本や、考古学の発掘物のように、自分を思い浮かべ、自分を埋葬することなど容易にできることではないのだ。人間は生きている様々な人との社会関係、生きている感覚的存在である自分に対する愛しさから逃れ得ない存在だからだ。宗教はその想念を執着、妄執として退けて生きることを勧める。あるいは大いなる神にまかせて自分を帰入させようとする。そこにはしかし、輪廻や解脱、終末と解放といった＜物語＞がある。（こういう立場を第（3）として宗教的立場と呼ぶとよいかもしれない。）

もし、いまそんな壮大な話を抜きにして平凡尋常な人間の人生について考えてみると、そういう人間にとってささやかな自分にとっての＜意味＞を感じて死にたいと思っても不思議ではない。愛する人に惜しまれているとか、この世に何かを残し得たとか、死んでも魂は残って再生するといったような。こういった尋常なこころの動きこそ倫理的死生観の基盤である。その立場からすると、自分の死は考古学的な標本や、生物実験のような無機物の解体過程であって欲しくはないはずだ。自分の死に関わっての＜意味＞の探求・発見こそがその人の死への旅路を安らかにさせる。こういう意味で人間の死は砂のようにはないが同時にその意味の世界は大いに豊かであっていいのではないだろうか。

2014. 8. 2

哲学するとは何か

——ambient な「家具の哲学」



1

哲学<する>という動詞形で物事を提起するのは結局、思い余ったからであろうか。およそ哲学・するという行為がこの日本という国にある、と断言できると誰が思い至るだろうか。

考えることはデカルトがエルゴしようが、日本の農民がエルゴしようが同じことだ。概念があり体系がなければ思考できないなんてことはない。概念や体験は思考のテクニカルベースであって様々な真理や誤謬を快速に分類し、ア

クセスできるように取り計らう。それがデカルトにあって日本の農民になかったわけではない。ただ思考の貯金がデカルトに有利で日本の農民には不利であっただけだ。

日本人は哲学することによって救われてきたわけではない。むしろ戦乱の時代には「南無阿弥陀仏」と唱えることの方が、明日やも知れぬ今日を支えたに違いなく、天変地異の続く国土にあっては「汝救われるべし」の掛け声の方がどんなにか生きる勇気を与えてくれたことであろうか。

にもかかわらず日本人にはなにやら「哲学熱」らしき病気がはやっているようにも思える。それはなぜか？いつかはやった<カルト>の魔法はもう盛んではないのだろうか？だが、<カルト>はアブナイ、自分の財産やいのちさえ根こそぎ奪い取られてしまう危険性がある。それに較べてみれば哲学は温厚で柔弱で真理しか教えず、金品を奪ったり、財産の提供を強要したりしない。

こう思って宗教の代わりに人々は哲学を求めたりする。しかし真理への道はやがて<遠い>ということがわかる。少なくとも「まあ、こんなことを飽きもせず」と感嘆するような、たとえばカントの「純粋理性批判」のような地味な道を淡々と歩いていかなければならないのだ。しかもヘーゲル・マルクス流の社会实践<科学>の結末はいかに歴史が略奪と殺戮に満ちているかを教えるだけだ。地味派と派手派と両股にかけて歩めば、すぐに股が裂けてしまう道理だろう。そうなってくると、地味な探検も派手な冒険もごめんだということになり、幸せな「家庭」を築き蓄財に励むしか他に方法はないことになる。

しかし「哲学」で蓄財はできない。哲学は何を教えるか？哲学の特性、その展開性についてニーチェは面白いことを言っている。

極めて少数の者は次のような特性を持っている。

そこで例えば、《快速調》で走る大胆奔放な精神性と、一点の蹉跌をも犯さない弁証法的な厳密性と必然性は、真に哲学的に共存するものであるが、このことは大抵の思想家や学者たちには彼らの経験からは未知のものであり、それ故に、誰かがそれについて彼らに語

るとしても、彼らにはそれは信じるに足りないのだ。彼らはあらゆる必然性を、窮迫として、苦痛をもって従わなければならないもの、強制されるものとして考える。そして思惟そのものは、彼らには何か緩慢なもの、逡巡するもの、殆んど一つの労苦とも言えるもの、またしばしば「貴族が汗を流すに値する」ほどのものと見なされる。—しかも何か軽快なもの、神的なもの、そして舞踏・陽気に極めて近似したものと見なされることは全然ないのだ！

(ニーチェ「善悪の彼岸」第6章 われら学者たち 213)

「《快速調》で走る大胆奔放な精神性」と、「一点の蹉跌をも犯さない弁証法的な厳密性と必然性」は、真に哲学的に共存するとニーチェは言い、その間逆な思想家や学者たちは「あらゆる必然性を、窮迫として、苦痛をもって従わなければならないもの、強制されるものとして」考える。要するに愚鈍な学者たちには思考は労苦であり、緩慢で逡巡するものとみなされ、快速で必然的な和合のアレグロはいずれにも見出されないのだ。そうなると思いの大きな責任も無視されてしまう。(ニーチェの批判するデューリングやハルトマンのように)

そして、その思想の大胆で軽快で柔軟な歩みと進みばかりでなく、なお何よりもまず大きな責任を進んで引き受ける用意、支配者の眼で見下ろす眼差しの高さ、大衆とその義務や徳からの隔離感、神であると悪魔であることに拘わりなく、誤解され誹謗されるものに対する親切な保護と弁護、——大きな正義に対する悦びと実行、命令する技術、意志の広さ、稀にしか驚嘆せず、稀にしか鑽仰せず、稀にしか愛しない緩やかな眼などがそれだ……)

(同)

「大きな正義に対する悦びと実行、命令する技術、意志の広さ、稀にしか驚嘆せず、稀にしか鑽仰せず、稀にしか愛しない緩やかな眼」・・・こんなことを思想上に思い見ればほとんど狂人としてしか思われたいかもしれない。しかし思想家に必要とされているのはこのアレグロで、しかも必然的な眼と意志の力ではないだろうか。(話がいきなり高大なものになってしまったが・・・)

2

哲学者のイメージが少しは捕まえられたらどうか。日本が19世紀に「哲学」を学び始めた頃、逆にヨーロッパでは哲学の危機がやってきていた。ニーチェは次のように指摘している。

今日では哲学者の発展に対する危険が実際に様々であるから、この果実が一体なお成熟するようになりうるかどうか疑われるほどである。科学の範囲と楼閣は巨怪なもの

に増大し、そして従ってまた、哲学者がすでに修学者として疲れ果ててしまうか、或いはどこかにしがみついて、「専門化」し、そのために全くもはや頂上まで到達して見渡し、見廻し、見下ろすことができなくなるという公算も大きくなった。或いは、遅ればせながら頂上に辿りついて、そのときにはすでに彼の最も油の乗った時と力とが終わってしまっている。或いは、彼はもう傷つき、粗雑になり、退化していて、彼の眼識と全体的価値判断はもはや殆んど意義を失っている。まさに彼の知的良心の繊細さそのものが、恐らく彼を途中で躊躇させ、逡巡させるのである。彼はディレッタントや、百足まがいの万屋や、何にでも触手を伸ばす好事家に墮するのを恐れる。自分自らに対する畏敬の念を失った者は、また認識者としてもはや命令することも、もはや指導することもできないことを、彼は余りにもよく知っている。そうなれば、彼はもう大俳優になろうとするか、哲学上のカリヨストロか精神の鼠捕りになろうとするか、つまりは誘惑者になろうとするかしかないであろう。これは結局において趣味の問題である。それ自体が良心の問題でないとすればだ。

(同 205)

科学の発展によって追い詰められた「哲学者」は専門分化の波にさらわれ、もはや頂上において全体を統御する力を失い、退化し俳優よろしく誘惑者になるしかなくなっている。これはニーチェが捕らえた19世紀のヨーロッパの哲学の現状である。

それに対して一般大衆は哲学者に「何」を望んでいたのだろうか？

事実、大衆は長らく哲学者を思い違いし、見損って来た。科学的人間や理想的学者と取り違えたり、宗教的に昂って墮落した「脱俗的」夢想家や神に酔い痴れた大酒家と思い違えたりした。それで今日でも、誰かを「賢明に」生きているとか、「哲学者として」「生きていると言って賞めるのを聞くが、それはもはや「利巧に、浮き世を離れて」というほどの意味である。智慧ということ、それは賤民には一種の逃避であるように思われるし、分の悪い賭け事からうまく身を引くための方便や手腕のように見える。しかし、真の哲学者は——わが友らよ、われわれにはこう思われるではないか——「哲学的にでなく」、また「賢明にでなく」、何よりも利巧にでなく生き、しかも生の凡百の試煉と誘惑に立ち向かう重責と義務とを感じるものだ。——彼は絶えず自己を賭ける。彼は分の悪い賭け事にこそ敢えて臨むのである……

(同)

大衆は哲学者に思い違いをしている。「科学的人間」「理想的学者」「宗教的に昂って墮落した『脱俗的』夢想家」「神に酔い痴れた大酒家」などと取り違えたりしてきた。しかし今日賢明な哲学者とは「哲学者として」生きているのではなく、「利巧に、浮き世を離れて」生きているだけなのである。絶えず自己を賭ける哲学者などどこにもいやしないのである。ニーチェはこう嘆いている。

そもそも19世紀後半に日本ではフィロソフィア（愛知学）は「哲学」（賢い学問）とか

「形而上学」（メタフシカ：自然学フシカの後に学ぶ学）とか訳されて、ヨーロッパの強大な科学技術を学ぶための基盤となっている学問と認識されていた。日本人が知りたかったのはソクラテスやアウグスチヌスではなかった。とりあえず強大な文明を支えている思想のエキスが知りたかったのである。特に政治学、医学、工学、法学、教育学・・・など。「和魂洋才」と称されるこの頃の日本人の自己規定は魂は神ながらの道、儒学、仏教で事足りるが新しい科学技術としての「洋才」を知り、習得することが必須の要請であったのだ。（ヨーロッパでは既に科学への疑問が芽生えていたこの時期に！）日本はその道に向けて邁進した。それでも日本が独自の哲学的営為を行わなかったわけではない。その試みは京都学派によってなされたが、西田幾多郎、田辺元などの角逐を原動力に発展した＜哲学＞も「絶対矛盾の自己同一」の果てに神秘主義的な自爆を遂げた。

3

（a）

半ば科学に対して興味を持ちながらもニーチェは基本的には科学に対して批判的なスタンスを取っている。

科学的人間の独立宣言、彼の哲学からの解放は、民主主義という代物、いや怪物が及ぼした微妙な影響の一つなのだ。学者たちの自己礼讃と自己慢心は、今日では、到る所で花盛りを迎え、わが世の春を祝っている。——それだからといってなお、この場合における自讃が好ましい芳香を放っているというわけには行かない。「すべての主人から自由になれ！」——ここでもまた賤民的本能はそう望んでいる。そして、科学が余りにも長い間その「婢」として仕えて来た神学から甚だ幸運にも身を禦いで後は、科学はいまでは全く不遜となり無分別になって、ついには哲学に対して法則を与え、自己自らが今度は「主人」の役を——何ということだ——すなわち哲学者の役を演じるに到っている。

（ 同 204 ）

19世紀ヨーロッパにあつては科学は神学から身进行をかわし、あろうことか「哲学」に対して主人役をとろうとしている。その有様は・・・

また時には勤勉な学問的労働者があつて、哲学者の魂の家政のうちに《閑暇》と高尚な贅沢の匂いを嗅ぎつけ、自分がそれで傷つけられ貶されたように感じた。また時にはあの色盲の功利的人間がいて、哲学のうちに単に一連の反駁された体系と、誰の「役にも立たない無駄な浪費とを見たにすぎなかった。更に時には、仮装した神秘主義と認識の限界修正とに対する恐怖が跳び出し、時には個々の哲学者に対する軽蔑がいつしか哲学の軽蔑に一般化された。

（ 同 ）

などと述べられている。しかしこの科学の傲慢に対してニーチェは「悲劇の誕生」の後年書いた序文で次のように言っている。

ギリシア人が、その青春のゆたかさのさなかに、悲劇的なものへの意志を持ち、ペシミストであったとすれば、どうであろうか？ プラトンの言葉を借りるなら、ギリシアに最大の祝福をもたらしたのは、ほかならぬあの狂気だったとすれば、どうであろうか？そして、他面また逆に、解体と弱体化の時に於いてこそ、ギリシア人はいよいよ楽天的に、皮相に浅薄化し、いよいよ俳優的となり、論理に執着し、世界の論理化を熱望し、つまり「明朗」になると同時にますます「科学的」になっていったとすれば、どうであろうか？ 楽天主義が勝利をおさめ、合理性がはばをきかすようになり、実践的ならびに理論的な功利主義があらわれてくるということは、それと時代を同じくする民主主義そのものと同様、ことによると——私のいうことはあらゆる「近代的理念」と民主主義的趣味の偏見にさからうことになるけれど——低下する力・近づく老齢・生理学的疲労の一徴候かもしれないというのはどうだろう？ そしてペシミズムこそ——まさにそうでないといえるのではないか？ エピグロスは、まさに悩める者として、楽天主義者だったのではないか？

（ ニーチェ「悲劇の誕生」——自己批評の試み 四 ）

ソクラテス的論理の世界は悲劇を解体する。ギリシア人は悲劇を忘れ、「いよいよ楽天的に、皮相に浅薄化し、いよいよ俳優的となり、論理に執着し、世界の論理化を熱望し、つまり『明朗』になると同時にますます『科学的』になって」いく。それはしかし「低下する力・近づく老齢・生理学的疲労の一徴候かもしれない」。とすれば、むしろ楽天主義よりはギリシア悲劇におけるペシミズムこそが、そういう皮相浅薄さを打ち破るものではないか。つまり悩める者としてのエピクロス。

これは真理を求めようとする論理（科学）に対置された芸術の優位性をニーチェが強調しているところである。このことは「神学と科学は同盟関係にある。それに対立しているのは芸術だ」と述べている箇所符合する。

科学自らは決して価値を創造することがない。科学の禁欲主義的理想に対する関係は、それ自体としてはいまだ全く敵対的な関係ではない。のみならず、科学は主として、むしろあの理想の内的形成における推進力を示すものである。（中略）科学と禁欲主義的理想と、この両者は実に同一の地盤の上に立っている——私はこのことをすでに示唆した——、すなわち、両者は真理に対する同じ過重視の上に立っている（もっと正確に言えば、真理の評価と批判の不可能ということに対する同じ信仰の上に立っているのだ）。まさにこの理由によって、両者は必然に同盟関係に立ち、——従って他から攻撃されるというような場合には、両者はいつも一緒に攻撃され問題とされるわけになる。禁欲主義的理想の評価は不可避免的に科学の評価を誘致する。諸君、この事実に対して眼を刮き、耳を敬てるがよい！（芸術——私は他日それについて更めてもっと詳述するつもりだから、予備的に言ってお

くのであるが、——芸術においては虚偽そのものが神聖化され、欺隔への意志が良心の咎めを受けることなしに許されるから、芸術は科学よりは遥かに根本的に禁欲主義的理想と対立する。ヨーロッパがこれまでに生んだ最大の芸術敵視者たるプラトンの本能はこのことを感知した。)

(ニーチェ「道德の系譜」第三論文 禁欲的理想は何を意味するか 二五)

科学と禁欲主義的理想(キリスト教)とは「真理に対する同じ過重視の上に立っている」すなわち、真理の評価と批判の不可能ということに対する同じ信仰の上に。これに対して芸術にあつては「虚偽そのものが神聖化され、欺隔への意志が良心の咎めを受けることなしに許されるから、芸術は科学よりは遥かに根本的に禁欲主義的理想と対立する。」

こういうわけで科学は真理を求めて芸術の欺瞞を暴く(プラトンのように)が、その代わり人間の救済・・・盲目的意志からの救済を放棄する。これが科学の楽天主義だ。

現代では科学の危機とはそのテクノロジーが人間の能力を超えて統御不可能になりつつあることへの危機感が中心課題だが、神学や哲学の主人となろうとしている科学そのものが実際には自分の主を忘却し、暴走しようとしているのはひとえに倫理・宗教が提示してきた世界観を包含しえなくなっている自縄自縛の姿なのだ。ニーチェの批判は科学の落ちこんだ蟻地獄の楽天主義に対して悲劇のペシミズム、盲目的な意志への克服を目指すものだが、「力への意志」はそれを何処まで語りえたのだろうか？

(b)

科学についても一言付け加えるなら、「客観性」ということについてだろう。20世紀前半からフッサールが「学問の危機」として取り上げた主題がここにあるが、「遠近法の解釈学」を旨とするニーチェにとっても、この点は認識論として言及しておかねばならないことだった。客観的人間について・・・

客観的人間は一個の道具であり、一つの高価な、毀れ易い、そして曇り易い計量器であり、芸術品的な鏡であつて、大切にされ、尊重さるべきものである。しかし、彼は何らの目標でも、何らの出口や上り口でもなく、爾余の生存がそこにその存在理由を見いだすようないかなる補足的人間でもなければ、いかなる結論でもなく——まして端初でもなく、産出や第一原因でもなく、支配者になろうとする強健な、力強い、自体的な存在でもない。却って、単に柔かい、吹き膨まされた、華奢な、軽快な鋳型壺であつて、それに従つて「形づくられる」ためには、まず何らかの内容と実質とに待たなければならない。——通常、それは実質と内容を欠く人間であり、「自己を欠く」人間である。従つてまた、《蛇足ながら》女にとっても全く取るに足りない代物である。——

(「善悪の彼岸」 207)

客観的人間は一個の道具であり、実質と内容を欠く人間であり、否定形で述べれば「

爾余の生存がそこにその存在理由を見いだすようないかなる補足的人間でもなければ、いかなる結論でもなく——まして端初でもなく、産出や第一原因でもなく、支配者になろうとする強健な、力強い、自体的な存在でもない。」と痛烈な批判がされている。要するに「客観的」という真理には「意志」が存在しないのだ。

4



最後に日本の哲学的風土について言及しておかなければならない。

どうみても日本人は「哲学的」民ではない。しかし勤勉に「哲学的」でありたいという意欲だけは持っているのかもしれない。昨今「哲学カフェ」や公開の研究会などに専門家のみならず哲学大衆が集まるのはそういう風潮を代表している。喧々諤々

と議論をするのは嫌いだ、そうかといって何も問題にしたいのは呆けていると間違いかねられない、そこでこの胸のもやもやを晴らすために彼らはやってくるのだが、たいていは失望して帰って行く。そこにあるのは適度に礼儀正しい、結論を求めないおしゃべりであり、なにか空しい気持ちに対する慰めであり、自分と同類がいるという安心感なのだろう。そういう意味では日本人は何と小まめな勤勉家たちであることか！問題が適度にかきまぜられ、共有された疑問符を持ち帰ってますます混乱してしまうらしい。問題に加速をつけ、浅瀬から深海を遊覧するダイナミズムはこういった集会には無縁であって、その場に立つ眺望はいかにも貧相である。学会、学会に準じる研究会、国際交流大会、大学のゼミ等もこういった傾向と大なり小なり同じである。彼らは原書を隅々読み、引用箇所を暗記するくらい勤勉であったり、泰西の＜大＞哲学者を「彼は」と呼ばわって批判的に論ずるが、言っていることは内容空疎な二番煎じばかりである。よく「勉強」しているのに、論述に自分なりのアイデアがないから退屈極まりない文献めぐりと未熟な生活雑感を交互に差し交わしながら退屈で不愉快な時間を浪費しているにすぎないのだ。

こういった風土の中で「哲学」はいかにして可能なのか、いやそもそも「哲学」とはいったい何なのか？

私にはますますそう思われるのであるが、哲学者は明日と明後日の必然的な人間としていつも彼の今日と矛盾する状態にあったし、またあらざるをえなかった。彼の敵は、いつの場合にも今日の理想であった。哲学者と呼ばれるこれらすべての非凡な人間の促成者たち、また自分自身を稀にしか智恵の愛好者と感じることなく、却ってむしろ不愉快な馬鹿

者で危険な疑問符だと感じた者たちは、——これまで彼らの任務を、その厳しい、望みもしない、拒みがたい任務を、しかも結局はその任務の偉大さを、彼らの時代の良心に疾しさを感じるようになるということに見いだした。彼らはほかならぬその時代の徳の胸に生体解剖のメスを加えることによって、彼ら自身の秘密が何であるかを暴露した。それは人間の一つの新しい偉大さを知ること、人間を偉大にする一つの新しい前人未踏の道を知ることであった。

(同 211)

「哲学者は明日と明後日の必然的な人間としていつも彼の今日と矛盾する状態にあった」という認識、そこから彼らは「厳しい、望みもしない、拒みがたい任務」に従事した。すなわち「人間を偉大にする一つの新しい前人未踏の道を知る」ことだ。それにしても哲学への道はかくも峻厳なものなのであろうか？

真の哲学者を教育するためには、彼自身も、その侍僕である哲学の科学的労働者が立ち停まり、——立ち停まらなければならないそのすべての段階にかつては立っていたということが必要であろう。彼は自ら恐らく批判家であり、懷疑家であり、独断家であり、歴史家であり、それに加えて詩人であり、蒐集家であり、旅行家であり、謎解きであり、道徳家であり、予見者であり、「自由な精神」であり、更に殆んどすべてのものであったのでなければならない。そうであつたればこそ、人間的な価値と価値感情の領域を遍歴し、様々な眼と良心とをもって、高みからあらゆる遠くを、深みからあらゆる高みを、隅からあらゆる広さを眺めることができるようになったのである。(中略) これらの研究者たちにとっての責務は、すべてのこれまで起こった事柄や評価された事柄を概観しうるように、熟考しうるように、把握しうるように、取り扱いうるようにすること、すべての長いもの、そうだ、「時間」そのものをさえも短縮して、過去の全体を圧服することだ。これは一つの巨大な、かつ驚嘆すべき任務であつて、この任務に就くということには確かにいかなる鋭敏な矜持も、いかなる頑強な意志も満足しうるであろう。しかし真の哲学者は命令者であり、かつ立法者である。彼らは「かくあるべし」と言う。彼らは始めて人間のどこへ？と何のために？とを規定し、その際にすべての哲学的労働者、すべての過去の圧服者の準備作業を意のままに利用する。——彼らは創造的な手をもって未来を掴み、そして存在するものと存在したもののすべてがその際に彼らにとって手段となり、道具となり、ハンマーとなる。彼らの「認識」は創造であり、彼らの創造は一つの立法であり、彼らの真理への意志は——力への意志である。——今日そういう哲学者たちが存在するだろうか。すでにそういう哲学者たちが存在したろうか。そういう哲学者たちが存在しなければならないであらうか。

(同 212)

「批判家であり、懷疑家であり、独断家であり、歴史家であり、それに加えて詩人であり、蒐集家であり、旅行家であり、謎解きであり、道徳家であり、予見者であり、『自由な

精神』であるようなそんな哲学者が存在するであろうか？

更にニーチェは「真の哲学者」について付け加える、「真の哲学者は命令者であり、かつ立法者である。」「存在するものと存在したもののすべてがその際に彼らにとって手段となり、道具となり、ハンマーとなる。」彼らの「認識」は創造であり、彼らの真理への意志は——力への意志である。

こうニーチェは広言する。それにしても哲学するハンマー、ハンマーによって哲学する？ではなくて、さしずめ今日では哲学はポップな頭脳的散歩、アンビエント ambient な個室の家具であってもいいのではないか。かつてサティが「家具の音楽」を広めたように、いまやわれわれは「家具の哲学」ambient 環境に癒された、くつろげる哲学の道を歩いていてもいいのではないだろうか。

2014. 8. 6

精神臨床

死にたくなったら全力で逃げろ

——元ひきこもり IT 起業家、家入一真

1



以前当ブログで紹介したことのある起業家、家入一真に関する番組が5月19日NHK「ハートネット」で放送された。彼は29歳の時、史上最年少でジャスダックに上場し、名をはせたが、その後35歳で昨年の都知事選に立候補、落選したものの9万票を集めた。

しかし、彼の人生はけっして順風満帆ではなかった。中学時代にいじめにあい、高校では不登校となり中退、2年間押入れに閉じ込めるひきこもり生活を送った。先生はみな「逃げるな」といったが「逃げていなければ自殺していた。」というのが振り返ってみた彼の実感である。その後母から紹介された詩人、ギタリスト、17歳で事故死した山田かまちに衝撃を受け、また新聞配達の仕事込みで知り合ったKと出会い、人間のよさを実感し始める。Kは家入を積極的に食事や映画に誘い、プリクラ写真なども2人で撮った。

「自分をダメ人間と言うことで自分を許せるようになり、また他人も許せるようになった。」と語る彼は、現在三つのIT企業の社長であり投資会社、飲食店の経営者である。そして2年前に生き辛さを抱え、行き場を失った若者のためのシェアハウス「リバティー」を作って家賃3万5千円でその家を提供しており、そこには20代の男女13人が生活を共にしている。志望はまちまちで、ITデザイナー、ITエンジニア、歌手、志望不明などの若者たち。

その中には大学受験に失敗して立ち直れなかった若者が、自分で作ったおにぎりの店頭販売で「自分の作ったものが、人によろこばれることの喜び、自分の本当にしたいことをやれる満足感」などを味わっているという報告もある。

ここには、家族の支え、友人との交流、世間の人の励ましなどを糧に育っていく若者の姿がある。

2

ところで「ひきこもり」は今、全国で70万人を超え、長期化、高齢化していることが問題になっている。こうしたミドル（35歳～44歳）の人たち（ひきこもりではないが非正規

雇用)についてインタビューしたヤフー掲載の社会学者河合薫の記事「置き去りにされる、“40代非正規”の貧困と孤立」を紹介してみよう。

氷河期世代の男性。二度リストラを経験し、現在、製造業関係の非正規社員 A さん（男性）最初の会社は業務縮小で大幅なリストラを敢行、彼の所属部署は消滅。2 つ目の会社は外資系に買収され、日本社員の半数がリストラされた。

「やっぱり正社員になりたいですよ。でも、『あきらめるしかない』かなって。うん、あきらめるしかないなと思っています。40 過ぎを正社員で雇ってくれる会社は、ありません。連敗が続くと、まるで底なし沼にいるようで。あがけばあがくほど、沈んでいく。そういう自分しかイメージできなくなってくるんです」



「世の中、なんやかんやいっても仕事。40 過ぎて、母親と 2 人暮らしで非正規だと、世間はまともな職につけない、どうしようもない『パラサイト中年』だっていう目で見ます。『しっかりしなさいよ』とか、『お母さんも心配してるぞ』とか周りから言われると、相当キツイ」

「すると、だんだんと人と関わりたくなくなるんです。同級生にも会いたくないし、昔の会社の同僚とも連絡はとらない。人と会えば会うだけ、他人が妬ましくなる。だから会わない。今は、母の面倒を見なければならぬんで、なんとか頑張ってますけど、1 人になったらヤバイです。さびしいとか、そういうんじゃない。孤独感というより、疎外感に近いかな。すみません。暗い話で。ネガティブ過ぎて自分が怖いです」

彼は苦笑いしながら、そう話した。そして、「でも、なんか自分の話、聞いてもらったら、少し楽になりました。ありがとうございました」と頭を深く下げたのである。

（ 河合薫「置き去りにされる、“40代非正規”の貧困と孤立」 ）

「世の中、なんやかんやいっても仕事、」しかし「40 過ぎを正社員で雇ってくれる会社は、ありません。」「どうしようもない『パラサイト中年』。」だから「同級生にも会いたくないし、昔の会社の同僚とも連絡はとらない」それは、孤独感というより、疎外感に近いという。

また、労働政策研究の調査結果によれば、同じ壮年層でも、正社員の場合の収入は、500 ～700 万が最も多い (26.15%)。一方、非正規では、100～150 万が 20.7%で、その格差は年齢とともに広がっていく。

河合は“人間付き合いのシャッター”を下ろすと、ポジティブな感情を抱く瞬間は、果てしなく激減する。その結果、ますますネガティブ思考が高まり、孤立し、人嫌いになり、生きる力が失せていくのである。」と書いている。“人間付き合いのシャッター”を下ろす

という表現は今の疎外されたミドルの心象を表すのにぴったりの言葉かもしれない。

この A さんは非正規ながら働けている。しかし失職したミドルで泥沼にはまっていく人の場合、職につけないまま数年を過ごし、ひきこもりになっていくというケースもあるのだ。全国に配置されている若者サポートセンターなどは 39 歳までが対象で 40 代を過ぎてしまうと、なかなか適切な対応をしてくれるわけではない。現状の厳しさを行政やサポート機関がもっと目を見開いて対応してくれることを切に望みたい。

2014. 5. 24

トリエステ（１）——マットと薔薇

1 バラ rosa



2007 年、サンレモ音楽祭の優勝曲は「一本のバラを」Ti regalerò una rosa だった。

歌ったのは 31 歳のシモーヌ・クリスティッキ Simone Cristicchi。

語りを基調にしたラップ風の歌で、内容は 40 年も精神病院に閉じ込められていたマット（狂人）からのメッセージ。この風変わりな内容は、しかし誰にもこころを打つ何か秘められていたのだろう。受賞した

本人自身が一番驚いてはいたが・・・以下全曲中 3 回繰り返される部分とマットに触れた部分を取り上げる。

TI REGALERO UNA ROSA （１本のバラを）

Ti regalerò una rosa

Una rosa rossa per dipingere ogni cosa

Una rosa per ogni tua lacrima da consolare

E una rosa per poterti amare

Ti regalerò una rosa

Una rosa bianca come fossi la mia sposa

Una rosa bianca che ti serva per dimenticare

Ogni piccolo dolore

あげましょう 一本のバラを
どんなことでも想い描くバラ
どんな涙でも慰めてくれるバラ
そして力強い愛のバラ
あげましょう 一本のバラを
私の伴侶のような白いバラ
どんな小さな苦しみでも
忘れさせてくれる白いバラ



(この出だしのフレーズが歌詞中 3 回繰り返される)

I matti sono punti di domanda senza frase
Migliaia di astronavi che non tornano alla base
Sono dei pupazzi stesi ad asciugare al sole
I matti sono apostoli di un Dio che non li vuole

狂人は文章なしの疑問符
基地に戻ることはない多くの宇宙船
日干しにされた操り人形
狂人は何ら期待されていない神の使徒



出だしのフレーズの叙情に較べて狂人のメッセージは苦しみを搾り出すようなむき出しの迫力がある。そういう意味で優勝するのにふさわしい豪華な、また現代的な記念碑となったのだろう。ちなみにクリ

スティッキは 1977 年生まれ。バザーリアたちの精神病院建設禁止の 108 号法が国会に通った前年だ。彼らの世代は精神病院に苦しめられた前世代の具体的な事実を知らず、彼自身は 2006 年に廃墟となったマニコミオ（精神病院）を南北に訪れ、単行本「狂人たちのなかのカンタウトレー」という本にまとめ、また CD、DVD セットの「鉄格子の向こう側から」を発売、「一本のバラを」はこの CD に収録されていた。

2 マット matto

(1) イタリアの地域精神医療——バザーリア

1978年5月13日にイタリアで精神病院（マニコミオ）を新しく造ることを禁止し、地域精神保健サービス機関で治療を行うことを明記した108号法が国会の下院で可決された。その4日前に誘拐されたモロ首相が遺体で発見されたばかりであった。

この108号法は以下のようなものであり、通称バザーリア法と呼ばれている。（以下大熊一夫「精神病院を捨てたイタリア捨てない日本」より紹介。続く本文は大熊氏の殆ど要約になってしまった。この件について見識浅く、許されよ）その特徴は

- （1）**精神病院（マニコミオ）を新しく造ることを禁止し、地域精神保健サービス機関で行う**ということを明記したことで中途半端な住み分けを厳しく禁じた。「重い患者は病棟払い、軽い患者は地域でどうぞ」といったものではない。重い患者（たとえば統合失調）が普通の市民生活を送ってこそ狂人は復権したといえるという精神から。
- （2）**精神科医に治安の責任を負わせていない**。日本の精神科医、精神病院は「自傷他害の恐れがある」場合強制入院させることができる。108号法では「他害の恐れ」に言及せず、治安はあくまで警察が行うことであって、精神科医の仕事ではないことが記されている。

この108号法案を作る中心となった人物がバザーリアだった。

- | | |
|-------|--|
| 1968年 | パルマで人手不足を解消するため一挙に40人の看護職を雇用、しかし県知事は財政難を理由に任命を拒否。病院職員のストなどで騒乱状態になった。 |
| 1970年 | バザーリア、パルマの県立コロールノ精神病院院長 |
| 1972年 | バザーリア、トリエステのサン・ジョヴァンニ病院院長 |
| 1973年 | 作業療法という患者の無賃労働をやめ労働者として扱い、給料を払った。WHOがトリエステを精神保健サービス事業のパイロット地区に指定。 |
| 1975年 | 患者114人、アリタリア航空の旅客機で一時間夢の遊覧飛行をする。 |
| 1978年 | 108号法案国会を通過。 |
| 1980年 | サン・ジョヴァンニ病院閉鎖 |



病院閉鎖にいたるためには

- （1）精神病院を使わずに患者を支えるのは可能か

(2) 患者を支えるための精神病院よりもっとよい機関＝地域精神保健サービスは可能か。

ということを立証しなければならなかった。バザーリアたちはトリエステのサン・ジョヴァンニ病院を中心にこの問題の検証を行い、みごと108号法案を通し、サン・ジョヴァンニ病院を閉鎖し、地域精神保健サービス中心の時代を切り開いたのだった。

(2) 大戦後の各国の精神医療

<アメリカ>・・・アメリカの1950年代は「病人は家族から見捨てられ、病院から見捨てられた」という時代が続いていたが、1963年のケネディの一般教書演説では、巨大州立病院の悲惨さ（職員不足、過剰入院、劣悪居住環境）を訴え、それからの解放を提案した。その結果1955年時点では55万人が精神病院に入院していたが、1986年には11万人に減った。しかし、受け皿としての地域精神保健センターは最初の提案の全米2000ヶ所設立の予定が、1986年頃でも700数十箇所にとどまり、ロスなどはホームレスが250万も存在していた。（アメリカの人口は2億）ホームレスの多くは（60%近くは）重い精神病、アルコール依存症、薬物依存症患者などであった。つまり、病人を鉄格子から救ったのはよかったが、その受け皿である地域精神保健センターの設置が追いつかず、ケネディは暗殺され、国民皆保険制度のなかった当時、現状を支える環境を整えることができなかった。

<ヴァンクーバー>・・・1971年にブリティッシュ・コロンビア大学で80人を単位として3群に分けた患者の治療効果についての研究が始まった。

(1) 精神病院に入れられっぱなしの人たち

(2) 家庭につれ戻されたが、ケアを受けない人たち

(3) 家庭につれ戻され、外来診療所のケアを受ける人たち。

一番うまくいったのは(3)群の人たちであった。しかもコストがあまりかからなかった。最悪は(1)群の人たちで治療効果は少なく、コストがかかった。

これらの結果をもとにヴァンクーバーは8つの精神保健区に分けられ、それぞれ、ケアチーム（看護師、ソーシャルワーカー、臨床心理士、作業療法士）が精神科医や家庭医と連携してサポートする体制がととのった。ヴァンクーバーとリッチモンドあわせて52万人都市に当事者用の住居が2000人分用意され、収容所臭さはなく、さりげなく市民生活に溶け込んでいる。病状によって、看護師常時住み込み型、独り立ち型、夜間精神科救急専門型、下宿屋型、などがあり、州直轄、法人立、個人立と多彩である。

これらは1976年から1986年の10年間の間に一挙に作られた。

<イギリス>

1948年スコットランドのディングルトン病院は世界で始めて精神病院の全開放を成し遂げた。

1959年、新しい精神衛生法のもとに患者の病院出入り自由を尊重した「自由入院が当たり前となった。1968年全英のベッドの9割が開放病棟となった。リッチモンドにおける50軒、550人分のハウス群の建設、「マインド」イギリス精神保健協会という医療福祉の専門家、法律家、当事者、家族、市民を巻き込んだ大組織の活躍などがある。

＜フランス＞

70年代に広がったサンタンヌ病院のポームルの改革、ジャン・ウリ、ガタリなど有名なラポルトなどがある。しかし豪華病院と貧しい治療共同体に分かれている。

(2005年のWHOの統計で病床数はイギリス万対5、フランス万対11、日本万対28)

(3) 日本の精神医療

私宅監禁の風潮がまだ残っていた日本では戦後、1964年にライシャワー大使が統合失調症の少年に刺された時、「精神病者を野放しにするな、すべて病院へ入れろ」キャンペーンが張られ、患者の精神病院への収容を急いだ。しかし、収容ビジネスとして患者よりも病院経営を優先する病院の矛盾は監禁暴行事件として明るみに出されることになる。

1983年、宇都宮病院内での2件の患者のリンチ怪死事件。1993年大阪の八尾市「大和川病院」での肋骨骨折の患者の死亡事件(系列病院でも似たような暴行事件が多発)。これらは治療よりは収容監禁を優先し、病院経営の利益を重視する経営者たちの考えから起こった事件だった。

大熊一夫は1985年「新ルポ・精神病院」の中で日本の精神医療について次のような提案をしている。

社会が精神病を迎え撃つには、四段がまえの医療福祉体制が好ましい。**第一段**は、気軽に敷居をまたげる浜田クリニックのような町の精神神経科医院。**第二段**は、初発急性症状を手早く鎮圧する都立墨東病院や千葉県立精神科救急センターのような精神科救急・短期集中治療病院。**第三段**は、長期戦になりかけた人、慢性化した人を柔らかに受け止めてくれる三枚橋病院や千葉病院のような懐の深い精神病院。**第四段**として、精神病の人々が社会の中で生きるために、埼玉の「やどかりの里」のような仕掛けと、愛媛の病者集団「ごかい」のような物いう当事者組織。

(大熊一夫「新ルポ・精神病院」 太字＝引用者)

大熊は「精神病院を捨てたイタリア捨てない日本」では基本的には正しい提案であったが、第一段と第四段については大甘だったと反省している。

また近年で日本の参考にすべき取り組みとして、北海道十勝平野の帯広で1982年に作られ始めた定員16名の賄いつき共同住宅、および様々な食品加工場、ジャガイモ・かぼちゃの生産・販売、就労支援、生活訓練・・・などさまざまな社会資源を組み合わせたユニークな取り組みが行われている。

今ひとつ統合失調症の「当事者研究」で有名な北海道浦河の「べてるの家」。発祥は1978年回復者クラブ「どんぐりの会」からであった。病状を病識にもっていき、その「問題」と付き合う（たとえば幻聴が出たときにはそれを「幻聴さん」と呼んでうまく付き合っていく）。それを医者ではなく患者＝「当事者」が行うのである。これで解決（回復ではなく）にうまく持っていくのだ。

日本でも収容所ビジネスとしての「病院」の時代は終わらねばならない時が来ているにしても、地域精神医療の発達他は他の＜先進＞国から較べてみるとはるかに遅れている。＜病者＞に対する理解が深く浸透していかなければ、なかなか厳しい面があるのかも知れない。

2014. 6. 4

連れ去り事件の真相（深層）



岡山倉敷での小学校5年の女兒が7月14日に連れ去られてから5ぶりに、本人の自宅から8キロ先の男（49）の自宅で発見され保護された。

今年に入ってから女兒連れ去り事件があとを断たない。

1月11日、相模原市で小学5年の女兒が犬の散歩に出かけたまま行方不明になり、14日に25キロ離れた駐在所でみつかった。また、1月27日には札幌市で小学3年の女兒が行方

不明となり、2月2日に札幌市内に住む面識のない男の部屋でみつかった。

連れ去った中年の男が女兒とどのような生活をしたのかつまびらかには知らないが、そこにあるのは自分の思い通りに純粋な他人と交流したいという欲望である。「純粋な」と書く語弊があるが、盗撮事件、痴漢など毎日、新聞のねたになるような事件が頻発し、その犯人は国税庁の役人、判事、警察幹部、教師、などだいたいお堅い仕事の人が多い。（いや、報道されるのはそういった本人である方が新聞読者の好奇心を満足させるからだろう。）これも純粋で抽象的な欲望をからくりとしている。

いまや日本の若者、中年の男性は普段からの人間的な触れ合いに欠け、接触に飢えているかのようだ。それを慰めてくれる戦場のマドンナは存在しないし、禁止は逆にこういった事件を誘発する条件になってしまっているし、個人のモラルに訴えたところがカントの

いう理性の格律はここでは働かない。性風俗の紊乱を防ぐために拙速な欲望満足を取り締まらなければならないし、適度な性的欲望の発散（ポルノビデオ、秘密の社交場）は社会的秩序の調整弁というわけだ。フロイトの理論が神秘で猥雑な性の世界を＜科学的＞に解明したとしても、理論はあくまで理論だ。欲望統制のために奔騰する無意識、阿頼耶識の世界をさらけ出せば、性的犯罪は防げるといったものではない。

さて、この人間の純粹で、抽象的な欲望を分析するのにレヴィナスのエロス論を借りてみてはどうだろうか。

秘められたありかたは、恥じらいのないその生起のうちで夜の生をあかしているけれども、その夜の生は、白昼の、しかしただ太陽を遮断された生とひとしいものではない。夜の生はまた、孤独な生のたんなる内部性ともひとしくはない。孤独な生であるならば、それは内密なも



のでありながら、じぶんの抑制を克服するために表出されることをもとめるだろう。夜の生は恥じらいにかかわり、その恥じらいを冒瀆していながら、それを乗り越えることがない。秘密は、あらわれることなくあらわれる。けれどもそれは、秘密が半分だけ、あるいは留保つきであらわれたり、混乱のなかであらわれるからというわけではない。秘められたものと覆いをとられたものとが同時に存在することがほかならぬ冒瀆を定義する。冒瀆はあいまいさのうちにあらわれる。そうはいっても、冒瀆があいまいさを可能にする——あいまいさとは本質的にエロスのなものである——のであって、その逆ではない。恥じらいは愛において超えがたいものであって、愛におけるパセティックなものをかたちづくるのが恥じらいである。挑発的な裸形を示すときにきまってあらわれる恥じらいのなさは、あらかじめ存在する中性的な知覚、たとえば患者の裸体を診察する医者 of 知覚につけくわわってくるものではない。エロスのな裸形が生起し、現前し存在するしかたによって、恥じらいを欠いたありかた、冒瀆の本源的な現象がえがかれる。恥じらいのなさと冒瀆という現象が拓く道徳的なパースペクティヴは、存在の生起としての、この度を越えた露出症によって開かれる特異な次元のうちであらかじめ位置づけられているのである。

（レヴィナス「全体性と無限」第四部、B ＜エロス＞の現象学 熊野純彦 訳）

「夜の生は、白昼の、しかしただ太陽を遮断された生とひとしいものではない。」「夜の生は恥じらいにかかわり、その恥じらいを冒瀆していながら、それを乗り越えることがない。」つまり「秘められたものと覆いをとられたものとが同時に存在することがほかならぬ

冒瀆を定義する。」こうして「冒瀆はあいまいさのうちにあらわれる。——あいまいさとは本質的にエロスのなものである」そして「恥じらいは愛において超えがたいものであって、愛におけるパセティックなものをかたちづくるのが恥じらいである。」

秘められたものであるからこそ、そこにそれを引き剥がしたいという欲望がうまれる。すなわち恥じらいの冒瀆。これは「愛」というよりは「欲望」と率直に言ったほうがふさわしいものだ。西田幾多郎が面白いことを言っている。

エロスとアガペとは固、相反する方向である。我々はエロスの方向に進むことによって神に到ることはできない、何処まで行っても大なる自己を見るに過ぎない。そこから汝に対する義務とか責任とかいうものは出て来ない、自己が絶対者のために存し、絶対の価値に対して当為を有つという意味は出て来ない。しかし環境が個物を限定し逆に個物が環境を限定するという弁証法的運動において真の個物というものが考えられる如く、我々が自己において絶対の他を見、逆に絶対の他において自己を見ると考えられることによって、我々の真の人格的自己というものが考えられるのである。単に他において自己を見ると考えるならば、我と物と択ぶ所はない。神は何処までも我々の底から働くものでなければならない。外から働くものは盲目的力に過ぎない。我々是我々の底に超越を見るのである。それは矛盾であるかも知れない。しかし真に人格的自己と考えられるかかる弁証法的運動としてあるのである。(中略)

エロスによってアガペが基礎付けられるのではなく、アガペによってエロスが基礎付けられるのである。我々の文化と考えるものは宗教によって基礎付けられることによって真の文化の意義があるのである。アガペに基礎付けられない文化は遊戯に過ぎない。

(西田幾多郎「私と汝」四)



「アガペ」(愛)に基づかない「エロスの欲望」は、遊戯に過ぎない。「エロスの欲望」はどこまで行っても大なる自己を見るに過ぎず、自己が絶対者のために存し、絶対の価値に対して当為を有つという意味は「エロスの欲望」からは出て来ない。

こういう風に一刀両断すればすこぶる気持ちよく爽快なのだが、問題はこのように一刀両断できず、冒瀆の欲望に住する人間にとっては純粋な欲望空間はすこぶる安住しやすいところなのだ。ヴァーチャルな世界を実践したくなるといったプラトンの批判したミメシス論によるのではなく、存在が本質に先行するというより、

欲望が存在に先行する・・・といったらよいだろうか、人間はそもそも欠如存在として生まれてきてその欠如を補おうとして充足の幻影にはまり込んでいきやすいものだ。むしろ人間の生はそのために仕組まれている、といってもいいぐらいだろう。それゆえ恥じ

らいとその冒瀆のあいまいさに生きることは何よりも人間にとって蜜の味な訳だ。

こうして女の胸にさわりたい、女のスカートの中を盗撮したいといった禁忌へのちょっとした冒険が生まれ、蟻地獄のようにフェティッシュな、＜罪＞にはまり込む。さらに仮構としての親子、夫婦ごっこのためのプチ誘拐が行われ、コントロールされているはずの日常生活が崩れていく。しかしこのようなくれ合いしたい＞という欲望の真相はいったい何処にあるのか・・・レヴィナスの次の文章などがそのヒントになるかもしれない。

接触としての愛撫は感受性である。とはいえ愛撫は、感覚的なものを超越してゆく。愛撫は、感覚されたもののかなたで、感覚から遥かにはなれて感覚するわけではない。愛撫は至上の糧を把持して、その究極の感覚内容との関係において、飢えという志向を維持しているのでもない。飢えはむしろ、その飢えに約束され与えられる糧へとおもむきながら、飢えそのものを穿つ〔飢えさせる〕。愛撫はあたかも、愛撫そのものの飢えによって養われているかのようである。愛撫とは、なにものも把持しないことにある。愛撫は、みずからのかたちから絶えず逃れて未来に向かうもの——けっして充分に未来ではない未来に向かうもの——を引きおこし、いまだ存在しないかのようにじぶんから逃げ去るものを引きおこす。愛撫は探しもとめ、発掘する。愛撫とは開示する志向性ではなく、探しもとめる志向性である。愛撫とは見えないものへの歩みなのである。愛撫はある意味では愛を表出しているけれども、愛を語ることの不能に苦しんでいる。愛撫には愛を表出することそのものへの飢えがあり、その飢えはしかも不斷に増大してゆく。愛撫は、だから、それが目ざすものよりも遥か遠くへとおもむき、存在するもののかなたを目ざす。存在者としてはまさに、存在することのとびらをすでに叩いている未来すらも目ざすのである。愛撫を生氣づける渴望は、それが満足されるときにむしろふたたび生まれる。この渴望はいまだ存在しないものによってなんらかのしかたで養われているのであり、私たちはそのようにして、女性的なものの処女性へ、けっして蹂躪されない処女性へと連れもどされるのである。愛撫は敵対する自由を支配し、自由をじぶんの対象にしたり、自由から同意をもぎとろうとするわけではない。愛撫は、自由による同意や抵抗を超えたところで、いまだ存在しないもの、「無以下のもの」を探しもとめる。いまだ存在しないもの、「無以下のもの」は、未来のかなたに閉ざされて眠りこみ、したがって可能なものとはまったくことになったしかたでまどろんでいる。

(同)

「愛撫はあたかも、愛撫そのものの飢えによって養われているかのようである。」「愛撫に



は愛を表出することそのものへの飢えがあり、その飢えはしかも不斷に増大してゆく。愛撫は、だから、それが目ざすもの

よりも遥か遠くへとおもむき、存在するもののかなたを目ざす。」つまり、「(愛撫は) 愛を語ることの不能に苦しんでいる。愛撫には愛を表出することそのものへの飢えがあり、その飢えはしかも不斷に増大してゆく。」しかし、「この(注：愛撫という) 渴望はいまだ存在しないものによってなんらかのしかたで養われているのであり、私たちはそのようにして、女性的なものの処女性へ、けっして蹂躪されない処女性へと連れもどされる」その結果「愛撫は、自由による同意や抵抗を超えたところで、いまだ存在しないもの、「無以下のもの」を求めてまどろんでいる。

このように愛撫は「自由」などという高尚なものではなく、渴望の初期への循環を経て無限の遠点に放りだされる。これが愛撫の循環と渴望の苦しみの真相である。

このようにして<触れ合いたい>という欲望は循環し、満足されることはなく無限の遠点を望み見て、純粋な抽象性の前に挫折する。まさしくカフカの掟の門の番人のごとくアガルマ(魅惑的なもの)の門に入れてもらおうとして番人の反応を待っている間に年をとり、こときれてしまう旅人に同じだ。

今、この<触れ合いたい>という渴望が日本列島に充満し、それは安易な犯罪のスイッチを押している。かつて女子高生を監禁し、おもちゃにした挙句、コンクリート詰めにして捨てたという高校生の犯罪があつて、私は慄然としたものだが、(人間=物=処理物) そういった風潮を経て、淋しい日本人が虚妄の蟻地獄に落ちこんでいる。ドラッグの暴走も含め、このこころの空虚さ、構造を断ち切るための真理を尋ねることが今、必要とされている。

2014. 7. 20

無敵の人——「黒子のバスケ」脅迫事件

1



2013年12月、元派遣社員、渡邊博史(ひろふみ)36は藤巻忠俊の人気漫画「黒子のバスケ」の関連先に500通の脅迫文を送付し、マンガの作者の出身校(中退)上智大学に硫化水素の発生する容器と脅迫文を置いたとして威力業務妨害罪で逮捕された。その他、「ジャンプフェスタ」中止を狙った脅迫、「黒バス」同人誌即売会ダブルスクラッチ中止を狙った脅迫、セブンイレブン・ジャパンや玩具会社バンダイに漫画の単行本の販売中止を求めたり、ニコチンを混入させた菓子を郵送し、回収させたりした。

その初公判が2014年3月13日に東京地裁で開かれた。公判スケジュールを列举すると、

第一回公判	東京地裁	2014年3月13日	冒頭意見陳述
第二回公判	東京地裁	2014年4月30日	
第三回公判	東京地裁	2014年6月27日	
第四回公判	東京地裁	2014年7月18日	最終意見陳述
最終回公判	東京地裁	2014年8月21日	判決（予定）

のようになる。被告本人の冒頭意見陳述も最終意見陳述も公判では、肝心な部分は割愛され、到底真実を勘案できる＜陳述＞たりえなかった。幸い月刊「創」編集長の篠田博之が雑誌にいずれも全文掲載し、A4レポート用紙44枚もの最終意見陳述書については長文のすべてがネットで読める。

第一回公判では、

- ・ 自殺未遂・・・6歳（いじめ）21歳（上智大学にからんで）
- ・ 貧しい派遣社員・・・36歳まで通算で収入は1000万円を超えていない。年間200万円超えたことはない。月20万円超えたのは数回にすぎない。
- ・ 自分のように、地位なく、金なく、絆のない人間は「**無敵の人**」と言う。（失うものが何もないから罪を犯すことに心理的抵抗がない）

などを語りながら、最後に「こんなクソみたいな人生やっつけられるか、とっとと死なせろ」

「日本中の前途ある少年たちが、いじけず、ねたまず、ひがまず、そねまず、前向きで明るくカッコいいイケメンに育つことを願って」終わりにすると結んだ。



この冒頭意見陳述はかなりの反響をよび、特に「無敵の人」の部分がマスコミの取材の対象になったりした。（この言葉は2チャンネルの創始者「ひろゆき」が2008年ごろネット上SNSで使い始めたネットスラングだとされている。）ただ渡邊は秋葉原無差別殺傷の加藤や、パソコン遠隔操作ウィルス事件の片山や、女性アイドルグループ傷害事件の犯人などと「無敵の人」として同列に置かれるのは迷惑だとしている。

2

さて彼の生い立ち、思考パターンを確認するのはなかなか難しいが最終公判に提出された最終意見陳述からその概要を拾ってみよう。

第一回公判でも言っているように彼は36歳までの総収入が1000万円を超えていないような半分ひきこもりの貧しい生活をしていただけだが、それを格差社会の犠牲者のように捕らえることは正しくないと言明している。（犯罪が起こると社会のせいにして、「厳

罰化と防犯の強化」を要求する被害者・関係者たちはそれで、大阪教育大学附属小学校の児童殺傷事件の宅間がもはや現れないとでも思っているのか？）むしろ学校ではいじめられ、家庭では虐待されたこどもの萎縮し、モデルを持たない生活状況そのものに問題があったのだと述べている。だから彼の生涯の恨むべき宿敵は両親、いじめっ子3人、小学校の担任の先生2人、塾の講師1人、計8人である。

最終陳述で述べている若者分類を取り上げてみよう。

＜肯定的＞、＜否定的＞の分類は社会生活を送る上での背反する存在のイメージ。

＜肯定的＞	＜否定的＞
①社会的存在 幼少期の親子の安定した関係によって肯定的な自己像をもてる人間	②生ける屍 いじめ、虐待などで否定的な自己物語しかもてない人間
③努力教信者 勝ち組、負け組 努力したけど負け組、 怠けていて負け組	④埒外の民 負け組中の、 努力するという発想のない者
⑤キズナマン 絆のある人 (人や社会や地域と つながっている人間)	⑥浮遊霊 (無敵の人) 絆のない人 (抵抗) オタク化、ネトウヨ化 (浮遊霊の悪化) 生霊 (無敵の人)

①**社会的存在**・・・自分の存在の確かさが保証されている存在。人間が生きる力をもらえる幼少期の「安心」とそれを内在化することができる「親子関係」。この基盤があることでアイデンティティが確立され社会的存在となる。

②**生ける屍**・・・いじめや虐待などで社会的存在の確立のためのプロセスがうまくいかず両親との感情の共有もできず、たえず不安に脅かされ、萎縮している存在。(対価のない義務感、生まれたときから孤立、常に空しく喜びの感情をもてない。自責・自罰感情)

③**努力教信者**・・・日本人の国教？勝ち組になるためには「肯定的な自己物語」が必要。

④**埒外の民**・・・負け組の中でも最初から努力するという発想のない者＝不戦敗。初めから報われる可能性はないと信じ込んでいる。虐待やいじめはそうした「否定的な自己物語」を形成する。自分の運命に対して茫漠たる不満や復讐願望を持つ。

「どこに行っても自分は酷いめに会う」「自分はこの世に存在することを許されない」

⑤**キズナマン**・・・絆のある人（人や社会や地域とつながっている人間）

⑥**浮遊霊**・・・人や社会や地域とつながっていない人間。悪化すると**生霊**となる。どちらも「無敵の人」である。

絆のない浮遊霊はなんとか自分を追いやる強風から逃れようとして2種類の方法を編み

出す（１）オタク化（趣味や嗜好品で現実逃避する）（２）ネトウヨ化（ネトウヨ＝ねっと右翼）不満や怒りを外敵に向ける。保守的政治思想で政敵を罵倒する。（保守系行動団体、中韓排撃、日本主義・・・）。以上の２種類の薬は「埒外の民」には比較的効くが、「生ける屍」には効かない。

渡邊本人の分析として最終陳述より参考に以下。

<参考>

***（いじめ、虐待を受けて「生ける屍」となった自分。）

■「自分がやたらと酷い目に遭うのは、同級生たちと違って『ヒロフミ』という 1 ランク下の身分だからだ」と考えて自分を納得させるようになりました。社会の授業で「人権」という言葉を知れば、「自分は『ヒロフミ』であるから人権がないんだ」と理解し、江戸時代の身分制度やインドのカースト制を知れば、「自分は最下層身分のさらに下の『ヒロフミ』という身分なんだ」と理解しました。

■初めて第三の世界として足を踏み入れた塾でも学校と同じくらい酷い目に遭ってしまった自分は、「もうどこに行っても必ず自分は酷い目に遭うんだ」と強く思い込んでしまいました。

自分の心には自分を保護してくれる両親は内在化しませんでした。代わりに自分を罵倒する両親、自分を「ヒロフミ」と呼んで暴力を振るういじめっ子、自分に理不尽な体罰を加えたり暴言を吐いたりした小学校の担任教師や塾の講師が内在化し、常に罵られているような気がしました。その内に自分は、

「自分はこの世に存在することが許されないのだ」

と思うようになりました。



■このような「生ける屍」である自分が「埒外の民」になってしまうのは必然でした。自分は、「自分は「ヒロフミ」だから何をしてもダメなんだ」という自己物語を持っていました。このような人間がどうして努力できるのでしょうか？

「安心」という壊滅的に毀損している人

間がリスクを取ってチャレンジできるのでしょうか？人と社会とのつながりは不幸の始まりと認識してきている人間が物事に参加できるのでしょうか？自分がなく、自分の意志を持っていない人間が夢を持って努力できるのでしょうか？対人恐怖と対社会恐怖との戦いと人や社会とのつながりからの逃走にエネルギーを消費して疲労し、衰弱し、虚無感に覆われてしまうのです。自分にとって努力とは報いのない我慢であり義務でした。努力と対価としての

勝利や夢の実現がつながってませんでした。

3

渡邊は「浮遊霊」ではあったが、若い頃オタク化もネトウヨ化もしなかった。しかし、かすかな社会とのつながりの3本の弱い糸を持っていたという。

- 1 マンガ家を目指して挫折した負け組
- 2 同人誌の世界の片隅の一人
- 3 新大久保の住人

1はクリエイター養成系の専門学校に行ったが最初から諦めてマンガ家になろうとする望みをもっていなかった。自分は「生ける屍」だったし、「埒外の民」だったから。

2の確信は、藤巻氏は「同人誌の世界の神様だ」という評価で崩れた。

3の快適に思っていた生活も藤巻氏が新宿生まれの新宿育ちという一段ハイグレードな出身によって打ち砕かれた。

次のような述懐。(最終陳述)

■自分には夢などありませんでした。「埒外の民」は夢など持ちようがないのです。自分と
同い年で若くしてヒット作を出して成功したマンガ家がムック本に掲載されたインタビューで「夢は必ず叶う」などと発言しているのを見つけた時に自分は猛烈に腹が立ちました。

「長野の元ヤンキーの脳天気なめえと違って、こっちは『夢は必ず叶わない』人間なんだよっ！」と周囲に人がいることも忘れて大声で毒突いていました。結果として自分は負け組と呼ばれる社会的地位になりました。それは戦って負けたのではなく、また自ら怠惰を選んで負けたのではなく、不戦敗に近い負け方でした。自分は典型的な「埒外の民」でした。しかし事件前にこのように俯瞰的に構造を把握はできていませんでした。原因も分からず気がつくと負け組の席に座らされていたという感じで運命を素直に受容できずにいました。

■検察の人事異動で自分の担当の検事さんが替わりました。その新しい検事さんによる最初の取り調べで、「あなたの人生は不戦敗の人生ですね。それがつらかったんでしょう」と検事さんから言われました。自分はその一言がきっかけで気がついたのです。自分は「黒子のバスケ」の作者氏の成功が羨ましかったのではないのです。この世の大多数である「夢を持って努力ができた普通の人たち」が羨ましかったのです。成功した人たちは即ち努力した人たちです。自分は「夢を持って努力ができた普通の人たち」の代表として「黒子のバスケ」の作者氏を標的にしたのです。

犯行動機はこうに、自分の運命に対して持っていた茫漠たる不満や復讐願望に「黒子のバスケ」の作者がスイッチを入れたということになるだろうか。渡邊は浮遊霊から生霊となって、積年の恨みを犯行にぶつけた。

4

渡邊の成育歴で気になるのは最終陳述の後半に現れる家庭の姿である。

父親は九州の山奥で生まれた田舎物で「子どもの幸せ」などという概念は存在しなかった。子どもに最低限の衣食住を与え、勉強を強制し、遊びを取り上げる（小学校の時「聖天使聖矢」のテレビアニメを見たいと言ってぶん殴られた。）以外何もしなかった。

母親は祖父母からネグレクトされて育ち、祖父は詐欺事件で逮捕されたこともあった。だから母の祖父母への復讐は「子供を祖父のような犯罪者にしない、祖母とはちがう立派な母親」になることだった。母親は祖父のような「欲望を我慢できないような人間」ではなく子供を「欲望を全く持たない人間」に育てれば、犯罪者にならないと考えた。その結果子どもを欲望のもととなる自己充足感をまったくもたない人間に育て上げようとした。しかし結果は・・・ひどいことになってしまった。祖父母に対する娘の復讐はそのこどもに「安心」というやすらぎと信頼感を培うものを根こそぎ剥奪してしまった。そこには「子どもの幸せ」に対しての関心が欠けていた。

渡邊はこう訴えかけている。

- 「生きる力」とは何か？自分はここまで堕ちた人間ですから、それが何かははっきりと分かります。それは根源的な「安心」です。「安心」があれば人間は意志を持てます。自分の意志があれば人間は前向きになれる。「安心」が欠如し、強い対人恐怖と対社会恐怖を抱き、肯定的な自己物語を持たない人間が「生きる力」がない人間です。

- 日本中の前途ある少年たちが「安心」を源泉に「生きる力」を持って、自分の意志を持って、対人恐怖と対社会恐怖に囚われることなく、前向きに生きてくれることを願って終わりにしたいと思います。

この事件に関して香山リカの「創」5・6月号に『黒バス事件』の真犯人は『虐待といじめ』という文章があるが、まだ最終意見陳述書を読んでいない段階なのか（いやいつもそうだが・・・）分析が軽くて、うすっぺらい。

また7月20日（日）関西テレビ「Mr. サンデー」の司会者宮根の冷たく突き放した反感コメントなどは



「勝ち組」の一瞥としか思えず、納得できない放送だった。

日本の若者たちの底流に渡邊のような絶望や無気力が流れていることは疑い得ないし、それが日本という国家の根幹を揺らがしていくことはあながちあり得ないことではないのでないか。渡邊の「日本中の前途ある少年たち」への呼びかけはその意味では心して聞くべきメッセージなのだ。

「無敵の人」が「失うものが何もないから、罪を犯すことに心理的抵抗がない」人と理解する前に「失うものが何もないから、大いなる志を成就しうる人」と理解したいものだ。

2014. 7. 24

「途絶」について——記述と沈黙（顔）

1



私は時々大阪で開かれる「臨床実践の現象学研究会」に出かけることがある。ここで看護学や、哲学の新しい話題に触れながらそれなりに学んでいる。しかしいつまで行ってもある疑念を禁じえなかった。特に関西の大学の若い院生の発表が多いのでその内容の質はまちまちで、しかも看護学と現象学がなじむはずなのに、十分にこなされた論文に出会ったことがなかった。看護学の方からの発表で

は難しい医学用語や看護手法が語られている割に欄外に注記されたり、引用されたりされている哲学者の言葉はとってつけられたような未消化なまま添えられてあったり、西田幾多郎などは内容が誤解されたまま挿入されたりしていた。要するに看護学において現象学的看護学が提起されてから20年くらいたっているとはいえ、日本ではまだまだ哲学を看護学にポップに応用するほど看護学者の間で哲学は理解されていないのだ。同様なことが哲学の発表においても見られた。愛や身体や倫理について論じられてはいるのだが、それと患者を看護することとの関係性は希薄でむしろ取り上げられている哲学者の紹介にやっとの思いでたどり着いているという体の論文が多かった。「哲学→現象学→看護学」「看護学→現象学→哲学」といった流れはざこちなくなじんでいるようではじきあっていたのだ。

現象学における「記述的現象学」（ヤスパース）や「関心 *Sorge*」（ハイデッガー）などが基本になって展開されているはずなのだが、この辺の基本も必ずしも十分に展開されているとは思われない。

そんな時に高槻病院精神科の杉林氏の発表が7月5日にあった。精神疾患に対する取り組みは一般の看護学がどちらかといえばフィジックなものに偏りがちなのを、むしろメタフィジックな受け止めの中で格闘した実践が語られていてたいへん面白かった。以下「途絶」「記述」「顔」の順にその発表の概要と感想を記してみる。

2 途 絶

杉林の経験によると患者との間の「途絶」（会話が突然とぎれ、思考・連想の流れが止まり、沈黙が主となる状態）の体験は統合失調症患者から感じられるプレコックス感（リュムケ）に対しての戸惑い以上にフラストレーションされる体験であって、そのことに担当医として七転八倒したことが語られた。

患者が途絶している間、私もまた途絶せざるを得ない。息苦しい切迫感の中でまんじりともせず患者の「次の言葉」を待つしかない。私はなぜこんなに苦しいのかわからなかった。黙したまま座り込んで慢性スキゾフレニア患者の傍らに自らもまた座り込んで一緒に過ごす時に強く感じるプレコックス感は何度も体験したし、それはそれほど窮屈なものでは最初からなかった。しかし途絶は違つたのである。

なぜこんなに苦しいのか。

（杉林 稔「精神科臨床における記述を考える」・・・当日の発表原稿）

これは30代の男性患者との面接の記録からである。なぜこんなに苦しいのか・・・

（以下 杉林の文の引用はこの発表原稿から行い、■によって示す。）

■ 当時、私は手当たりしだいに文献にあたった。長井真理、デリダ、中井久夫、松尾正、松本雅彦らの論文や著作が私を導いてくれた。けれど最終的には私の自前の言葉で表現できなければ納得できなかった。私の言葉で途絶を理解しよう、私の言葉で途絶について記述できるようにしようと悪戦苦闘した末に、ようやく一応の結論に達した。そしてふと、気づいたのである。

実際の面接場で、いつの間にか途絶がそんなに苦にならなくなっていることに。

患者の呈する症状について根をつめて自身の思考の限界まで考え続けること自体が、いつのまにか治療に何らかの影響を与えているということが簡単に起こってしまったことに私は驚いた。

杉林は、その解決のために当時の錚々たる精神科医の本を読みそれなりに学んだが、「私の言葉で途絶を理解しよう」と悪戦苦闘した。そして実際の面接場で、いつの間にか途絶がそんなに苦にならなくなっていた。そして彼はある＜悟り＞を開くのである。

■ ケースカンファレンスによってもたらされる変化が相対化によってもたらされる水平軸の変化であるとする、私の体験した変化、つまり自分なりの答を求めて自問自答を繰り返すことで突然開かれた境地は垂直軸の変化である、というような感じがした。

ここでは理解と治療はごく当たり前のように一体化している。理解と治療、という風に二分化すること自体が不自然な、すべての発端としての場所がそこに開かれている。私は彷徨っているあいだにいつのまにかこの場所に足を踏み入れていたのだ。

この場所は精神病理学をくする>ことによって行き着いた場所であった。

私は素直にこの場所を信じた。この場所がある限り私はやっていけるだろうと思えた。精神病院という場所に何とか着床しようと願っていた当時の私にとって、それは希望を見いだすことのできる体験だった。

ケースカンファレンスによってもたらされる変化を水平軸とし、自分なりの答を求めて自問自答を繰り返すことで突然開かれた境地を垂直軸とすれば、この座標上に「治療と理解」が描かれており、その場所こそは彼の「精神病理学をくする>ことによって行き着いた場所」であった。

さて「途絶」について。結局杉林はほとんど自分の考えを突き詰める中で「途絶」の意味を体験的に抽出する。

■ 両症例とも、途絶が見られる時期は幻覚や妄想等のいわゆる病的体験は認められず、自閉・ひきこもり等の陰性症状が目立つ時期に限定されていた。時に幻覚妄想が活発になり急性再燃に至ることがあったが、その時期には途絶は消失しスムーズに会話が進行した。この交代現象は興味深い。

途絶は幻覚妄想という病的体験に至らないために施された門の役割を果たしているかのようだったが、逆に途絶の苦しみからようやく抜け出した先が幻覚妄想であったとも考えられる。ともかくこの両者が両立しえず、相互排他的な関係にあり、患者は両者の間を往復し続けていることがわかった。

陰性期の途絶は、幻覚妄想が活発になる急性再燃期には見られず、「途絶は幻覚妄想という病的体験に至らないために施された門の役割を果たしている」かのように見られた。両者は両立しえず相互排除の関係にあった・・・これが「途絶」のからくりである。

根源的沈黙からある意味のある方向に進もうとする手前の次期が途絶の次期だが、杉林はこれを短距離走の号令のピストルになる直前に喩えている。いつまでもピストルがなければ途絶の状態が続く。しかし待ちきれずフライングすると・・・それが幻覚妄想の再燃期の始まりとなる。という意味では途絶は幻覚妄想を防ぐための門ではなく、逆に幻覚妄想は途絶から解放するための抜け道になっていたのだ。

かといって「途絶」の次期がマイナスに評価されるわけではない。

■ 途絶を一つずつ乗り越えながら何がしかの表現を獲得していくプロセスは非常に骨の折れる作業である。時にフライングしたいという強い願望に晒される。自身の現実検討をうっちゃってしまえば、無責任な言葉は次々と浮かび、あることないこと気楽な談話はいくらでも続けることができる。眼前の患者から離れ、自身の体験・実感からひとたび縄抜けすれば、それは十分に可能である。一般論としての、あるいは公約数としての病理や治療を語り始める時も、気楽なおしゃべりが支配する。表現全体が、幻覚妄想に似て現実根ざさない空談と化す。

心ある臨床家はそのような空談を嫌い、寡黙になりがちである。節度のある沈黙によって伝わることは多い。

こう考えると、途絶を抱えておくことの意義が見えてくる。答えが見えているような問題でも、果たしてそれでよいのかと問い、途絶し、そこから空談にならない言葉をたどどしく探していく作業は苦しいが重要な仕事となる。

時にフライングしたいという強い願望に晒されるが、ただの気楽な談話は空談と化す。「心ある臨床家はそのような空談を嫌い、寡黙になりがちである。節度のある沈黙によって伝わることは多い。」

こうして「途絶」の意味は救われる。美しい沈黙論だ。

3 記 述

記述という用語に関してはヤスパースの「精神病理学原論」の果たした役割は大きい。患者の語る患者自身の体験を重視し、そのまま記述すること＝現象学的記述、ここに現象学との大いなる接点がある。

さて杉林にとっての「記述」

■ 患者に向けて、その家族に向けて、医療スタッフに向けて、同僚に向けて、精神科医が何ごとか語る時も、常に何割かは記述という行為が忍び込む。病状説明とはまさに精神医学的記述をわかりやすく伝えることである。記述は頼もしい存在でもあり、またうとましい存在でもあるが、この相棒なくしてはほとんど仕事にならない。内科医にとっての心電図や胸部単純レントゲンに匹敵するものである。

私はこの「記述」という言葉に、もっと広く、もっと根源的で、もっと豊かな意味を与えたいと考えている。精神疾患とそれをめぐるさまざまな事象に寄り添うようにして言葉を紡いだり身ぶりや態度を示したりする、意図的であつたり非意図的であつたりする、あらゆる表現・表出に記述という言葉を用いたい。

「記述」は「頼もしい存在でもあり、またうとましい存在でもあるが、この相棒なくしてはほとんど仕事にならない。内科医にとっての心電図や胸部単純レントゲンに匹敵するものである。」という風に理解される。しかしこの「記述」そのものは実にとらえがたいものである。この点を杉林は以下のように説明する。

■ 私にとって記述とは、これら一連の出来事を私の体験として刻みつけることである。「記述する」という動詞を別の動詞に言い代えとするなら、「刻みこむ」あるいは「刻みつける」という動詞が最も近いように感じられる。

記述は「体験を記述する」という形式での事後性にとどまるものではない。われわれは記述したことを体験するのであり、「刻みつける」ことによって体験が浮き彫りになるのである。

私にとって記述とは、患者の病気、人生、運命までも見抜こうとするあがきであり驕慢である。

私自身の臨床家としての自己を確認する作業であり、自身と患者とに対して立てる「証し」である。

私の中に満ちあふれる「力」であり、私を翻弄する「力」である。

記述は片時も私のそばを離れない、どうしてもなく私自身の一部であるが、この十九歳の青年と同じくどこまでも未知な顔をして私を見つめてもいるのである。

(同)

自分にとっての「記述」それは、「患者の病気、人生、運命までも見抜こうとするあがきであり驕慢」であり、「臨床家としての自己を確認する作業であり、自身と患者とに対して立てる「証し」であり、「私の中に満ちあふれる「力」であり、私を翻弄する「力」であるとされる。

この発表原稿の末尾には「記述」は「ブリコラージュ」(やっつけ仕事の寄せ集め細工)であり、

記述はおわらない
行き止まらない
塞き止められない
とうていまとめきれない
あふれていく、あふれていく・・・

と書かれている。

4 顔

発表ではスキゾフレニア(杉林は「統合失調症」とあまり呼びたくないようだ)だった

3人の女性の「顔」についての記述がある。

- ・ 20歳代女性「彼女は私を素通りして私の背後のなにものかと接しているように感じた」

杉林は人を釘付けにする顔には「見とれさせる顔」と「**見入らせる顔**」とがあるが、この女性の場合「見入らせる顔」であったと記している。「見とれさせる顔」は幸福な人間的輝きを放っているのに、「見入らせる顔」はつかみどころのない、空虚な顔であると。

- ・ 別の20歳代女性・・・張り詰めた感じはあくまで「顔つき」そのものが張り詰めているのであって、「顔つき」の内奥に患者の内面（人格など）を想定することはできない。スキゾフレニア患者にかなり共通するこの顔の特徴を杉林は「**面ざし**」とよぶ。その説明は以下の通り。

■ 「面ざし」は、彼女と穏やかに会話している時にも感じる。特に幻覚や妄想が出現しているようでもなく、穏やかに日常的な会話を交わしている時には、私は彼女にいいような透明感を感じる。穏やかな表情を浮かべ、限りないやさしさを漂わせながら、他愛ない会話に興じる彼女の顔は透明度が高い。通常であれば、私は彼女の顔の向こう側に不透明に折り畳まれた内面性に突き当たるはずである。ところが彼女の場合はそこを通り抜けて手ごたえのない不確実性の中に私は包まれる。このような穏やかな場面であっても、彼女の顔の固有性が薄らぎ、「面ざし」が立ち現れている会話の場にあふれる限りないやさしさは、この「面ざし」の現れに負うところが大きい。彼女の「面ざし」に晒される私は、私であることの構えを解除され、拡散された意識を漂い、いいようなやさしさに浸られるのである。この「やさしさ」は通常の意味での他者への配慮としてのやさしさではない。「やさしさ」を彼女や私に帰属させること、つまり、「彼女がやさしい」とか「私がやさしい」と捉えることも正確ではない。厳密に言えば、「面ざし」が立ち現れるその場全体に、「やさしさ」が薄明かりのように照らしだされているのである。

「面ざし」がもたらすやさしさを「彼女がやさしい」とか「私がやさしい」と捉えることも正確ではない。」「厳密に言えば、『面ざし』が立ち現れるその場全体に、『やさしさ』が薄明かりのように照らしだされている」という捕らえ方によってそのやさしさが捉えることができると杉林は言う。

40代の女性A子について杉林は「生が表裏なく赤裸々にわれわれに体験されるありさま」としての「**無垢**」を感じると書いている。

総じてスキゾフレニア患者の風貌は・・・

■ 統合失調症の患者の風貌は、普通の意味での風貌を超えて、まさにそこに『風』が吹いている。吹いている風が容貌を写し出している。風は過ぎ去るものである。過ぎ去り続

けるものである。過ぎ去り続けつつそこにありつづけるものである。風ぐことのない統合失調症の風。その風のところまで私は引き返す。引き返すことによってしかその風を感じることはできないように思う。そうするうちに私にもそれなりの風貌があらわれるかもしれない。治療らしい治療はできなくとも互いの風貌を交換しあう。ただ常同的で形式的な会話のようで、またすべてのはじまりであるかのような短い会話。私も患者もこれらの裏側に回ることにはできない。私はこれらの風に包まれそれによって生かされている。統合失調症患者と出会うときに決まって立ちこめてくるこのエレメントをスキゾフレニアエレメントとでも呼んでみよう。それは内海の緊張病性エレメントほどドラスティックなものではなく（このエレメントは落雷のような激しさがある）、谷川俊太郎が長年の詩作によって追求し続けた世界、樽味伸の「素描」「素地」「素の時間」の世界、蔵原伸二郎の「壺」の世界にも共通するような「過ぎ去り」を旨とする、弱く脆く儂く茫漠たるエレメントである。

「統合失調症の患者の風貌は、普通の意味での風貌を超えて、まさにそこに『風』が吹いている。**風ぐことのない統合失調症の風。**」とは面白い表現である。風に吹かれた見入られる面ざし・・・

以上の杉林の記述から一転して、「顔」といえばレヴィナスの有名な顔に関する論文がある。考えてみれば顔は表情を持ったり持たなかったりして身体の中かで一番ところを表しやすい部分である。顔には視覚（目）、聴覚（耳）味覚（口）呼吸（鼻、口）発声（口）といった五感に関わる重要な器官が付属している。視覚と聴覚が協同して言語の発語、読解、聞き取りが行われる（勿論点字のような触覚によるものもある）という意味では人間の判断を司る中枢部分だし、味覚、嗅覚などは快楽部分の中枢でもある。エロスにおいても顔によって興奮の度合いが違っている。顔を背けて話せば、反発・無視の行為と受け取られる。目は口ほどにものを言う・・・

さて、同じ＜他者＞論なのだが、レヴィナスの顔論はさきほどの杉林の内面論とは相当異なった地点からなされている。わかりやすいものから取り上げてみる。



顔において＜他者＞が、絶対的に他なるものが現前する。けれども顔は＜同＞を否定するわけではなく、また思いなしや権威、超自然的な脅威に充ちたものがそうであるように、＜同＞を蹂躪するわけではない。顔は、それを迎え入れる者の身の丈

のうちにとどまり、あくまで地上のものでありつづける。顔において〈他者〉が現前することは、際だって非暴力的なできごとである。私の自由を傷つけるのではなく、私の自由を責任へと呼びもどし、私の自由をむしろ創設するからである。それは非暴力的なものでありながら、〈同〉と〈他〉の多元性を維持する。顔において〈他者〉が現前することが平和なのである。〈他者〉との関係——〈同〉と境界を接していないような、絶対的に他なるものとの関係——は、アレルギーにさらされてはいない。一箇の全体性のうちにある〈同〉はアレルギーに苦しめられ、ヘーゲルの弁証法なら、そのアレルギーにもとづいていることになるけれども、〈他者〉との関係はそうではない。〈他なるもの〉とは、理性に弁証論的な運動を開始させる、理性にとっての一箇の醜聞ではない。それはむしろ最初の理性的な教えであり、いっさいの教えの条件である

（ レヴィナス「全体性と無限」第三部 B 3 顔と理性 熊野純彦 訳 ）

「顔において〈他者〉が、絶対的に他なるものが現前する。けれども顔は〈同〉を否定するわけではなく、〈同〉を蹂躪するわけではない。」

顔は安易な同一化（〈同〉）から分離されているけれども〈同〉を蹂躪するわけではない。

じぶんがとりむすぶ関係そのものから無限に遠ざかりながら、〈他者〉は絶対的なものとしてこの関係のうちでひといきに現前する。《私》は関係から、とはいえ絶対的に分離された存在との関係のただなかで、その関係から身を引き剥がす。他者が私にふり向くときのその顔は、顔の表象のうちに吸収されてしまうことがない。正義を叫ぶ他者の悲惨を聴きとることは、あるイメージを表象することではなく、責任あるものとして自己を定立することであり、顔のうちに現前する存在よりも過剰であると同時に過少なものとしてみずからを定立することである。過少なものであるのは、顔が私にじぶん自身の義務を思いおこさせ、私を裁くからである。顔のうちで現前する存在は高さの次元から、超越の次元から到来する。当の存在はそこで異邦人として現前しうるけれども、障害物や敵対者のように、私に対立することがない。他方、過剰なものとして自己を定立するのは、〈私〉としての私の定立が他者の本質的な悲惨に応答しうることであり、じぶんでそのための資源を見出すことであるからだ。その超越において私を支配する〈他者〉は、同時に異邦人、寡婦、孤児であり、かれらに対して私は義務を負っているのであるのである。

（ 同 7 間人称的なものの非対称性 ）

「〈他者〉は絶対的なものとしてこの関係のうちでひといきに現前する。」「顔のうちで現前する存在は高さの次元から、超越の次元から到来する。」「その超越において私を支配する〈他者〉は、同時に異邦人、寡婦、孤児であり、かれらに対して私は義務を負っている」このように顔は〈他者〉であり、絶対的なものとして現前する。それは超越においては異邦人、寡婦、孤児の姿をとっている。

このようにレヴィナスの顔、〈他者〉、超越は極めて倫理的な規定であって、フッサールの他者論（「デカルト的省察」）のように機能的なものではない。それゆえ、先ほどの杉

林の顔論とはちょっと次元が異なっているような気がする。もしも近さを感じさせるとしたら

レヴィナスのエロス論の方かもしれない。しかしレヴィナスのエロス論は極めて人間ぼくてスキゾフレンシア患者の分析のような神々しさはない。ちなみに次の一文。

顔の女性的な啓示というこの暴力によってしるしづけられているのは、恥じらいから隠されたものとしてのその本質から強いて引きはなされたこの不在の力、このいまだない、この無以下のものの力にほかならない。いまだないは、未来よりも遙かなもの、時間的ないまだない、無における程度の差を示すいまだないよりも遙かなものである。だから〈エロス〉はいっさいの投企、すべてのダイナミズムも超えた魅惑であり、根底的に慎みのないものなのである。それは冒瀆なのであって、光をはなち、意味するものとしてすでに現実存在しているものの開示なのではない。〈エロス〉はこうして、顔のかなたにおもむく。もうひとつの顔をかたどった仮面がそうであるように、顔がその慎ましきによって、べつのなにかをなおも覆っているわけではない。エロスの裸形が恥じらいなくあらわれることで、顔は重くなる。顔に投げかけられた無意味の陰によって、顔はとてつもない重みをもつ。もうひとつの顔が顔の背後に浮かび上がるはずだからではない。隠されたものが、その恥じらいから引き剥がされるからである。それは隠されたものであって、隠された存在者、あるいは存在者の可能性ではない。隠されたものいまだ存在しな、ものなのであって、したがってなに性をまったく欠落させているものなのである。

(同)

「〈エロス〉はいっさいの投企、すべてのダイナミズムも超えた魅惑であり、根底的に慎みのないものなのである。それは冒瀆なのであって、光をはなち、意味するものとしてすでに現実存在しているものの開示なのではない。」「エロスの裸形が恥じらいなくあらわれることで、顔は重くなる。顔に投げかけられた無意味の陰によって、顔はとてつもない重みをもつ。」と続けられるように顔はエロスの純潔と猥褻の冒瀆的なあいまいさの中に墜落する。それ故そこに現れるのは様々な秘策、幻影であって、人々はこの妖（あやかし）の前に挫折する。

以上杉林氏の発表について考察を加えたが、当日の原稿はまだまだ、いろいろな問題提起が含まれていて私は、その一端しか触れることができなかった。彼の著作などに触れてさらに問題が深められたら幸いである。

2014. 7. 26

残酷な少年事件——佐世保



7月26日長崎県の佐世保市で15歳の高校一年生の女子が首を絞められて死亡し、からだの一部を切断されるという惨事が起こった。

犯人は同じ高校の16歳の女子で一人暮らしの自分のマンションで犯行に及んだ。

この事件を知って誰もが思い出したのは1997年5月に起こった**酒鬼薔薇聖斗**による小学生殺人事件ではなかったろうか。この事件では死体の一部が酒鬼薔薇=以下S、の通っていた中学校の校門上に掲げられていた。犯行声明も新聞社に届けられており、極めてメッセージ性の高いものであった。少年Sは動物虐待を繰り返し、通り魔事件を引き起こし、最後の犯行に及んだ。その背景にかわいがってくれた祖母の死が

あったと伝えられている。

今回の少女の場合、大好きな母を前年にガンで亡くし、今年に入って父は再婚、本人は秋のオーストラリア留学のためと、家庭との折り合いが悪いせいで一人でマンション暮らしをしていた。愛する母をなくし、父は別の女性にすばやく乗り換えたという屈辱がわかまっていたことは想像に難くない。本人は金属バットで父に襲いかかったりもしている。

この件新聞によると本人は父親に再婚を勧めており、新しい母親を迎えて喜んでいたり、金属バットで襲いかかったのは再婚問題と関係ない、とかの報道がなされている。しかし、父親への抗議の気持ち、新しい家庭から排除されていく孤独感については、誰でも容易に想像がつくだろう。

また、動物解剖、虐待などがあったといい、被害者を解剖の真似事に使っていた。

酒鬼薔薇事件の時は1995年阪神淡路大震災、オウム真理教事件の直近であったし、今回は2011年東北大震災の直近であったことなどは、類似の社会的背景として考えられる。世の中は落ち着きがなく、生活になんとはない不安と疲れが蔓延し、若者の通り魔的殺人（だれでもよかった、殺したかった）脱法ハーブによる暴走事件、情報機器による脅迫事件、成功者への脅迫事件、ストーカー殺人事件、少女連れ去り事件など、攻撃性が刹那的、突発的、怨恨的なものが多く若者の不安定な社会的基盤、格差の広がりなどが、生きる目的を提示できない時代の病理となって噴出している。

殺人の技術は極めて簡単に模倣できる。世界的規模ではでは飛行機撃墜や従前からの紛争の再燃など、いとも簡単に女、こども、市民が犠牲になっている。その一瞬の破壊の後遺症は見るも無残である。また、世間が安定しない雰囲気の時には蓄積された攻撃性を抑制できないままそれを罪なきものにぶつけてしまう。

人間は壊れやすいものだ。ルールやモラルで守られているようでそれらは<技術>の前

で抑止力を持っていない。**技術**はもともと**没価値的**であり**没目的的**であり、有用性という神に仕えて科学技術として発展していく。そして原子爆弾や細菌兵器、化学兵器などの恐ろしい大量殺戮を可能ならしめるようになった。宇宙開発とはどうみても、ひとつには軍事技術のため、また人類破滅を見越した逃亡作戦としか見えてこない。これらのとめどない発展＝攻撃性を抑止するモラル、文化、文明というものはあまりに弱々しい。逆に大破滅が起こった後に「不戦の誓い」が協議され声を大にした警告がなされるが、それはすぐ地域の利害、権力の欲望によって蹂躪されてきた。(第一次、二次世界大戦後の例) 何度も言うが人間は壊れやすいものだ。

どんなに優れた教育実践を行っても、子供の渴きを救うことはできない。私は長崎県の教育実践が無効だというペシミズムのため息をついているわけではないのだが、余りに楽観的な人間生命の賛美は空想的な結果を招かざるを得ないことを憂えているのだ。「いじめ」の問題もそうだ、楽観的な仲良し論では事は解決しない。

2

酒鬼薔薇聖斗こと少年Sは1997年家裁から関東医療少年院に移送された。通り魔事件での女兒死亡に関して8000万円の慰謝料を払うことで示談成立。2001年東北中等少年院に移送。2004年成人した少年は仮退院、翌年本退院となった。

関東医療少年院時代には慕っている女性精神科医を侮辱されたとして院生の目をボールペンで突き刺そうとしたり、東北中等少年院では酒鬼薔薇であることがばれて激しいいじめにあい、半裸でカッターナイフを振り回し威嚇した、などというエピソードが伝わっている。(以上 Wikipedia より)

仮退院したSは少年院で取得した溶接技術の資格を生かして、ある工場で仕事をし、保護司宅で面談を受け、週一回精神科医のカウンセリングを受けていた。また新しい身元引受人と養子縁組を組み、2005年以降は保護観察期間も終わり、大人としての自由な社会生活を送っている。少年期の性的サディズムや「世界は闘争と破壊が真の姿」という価値観などは変わっていないかも知れないが、とりあえずは社会に溶け込んだようだ。年齢は現在30歳を超えていることになる。



思春期の破壊衝動に身を任せることによってしか出口を見つけられなかった少年たちは多い。＜更正＞ということがどこまで可能なのか、このケースだけでも難題であることがよく分かる。かといって口をつぐんで問題を回避することで次の道は開けないこともここに刻みつけねばならないことだ。

2014. 7. 29

文 学

トリエステーサバと一人の女

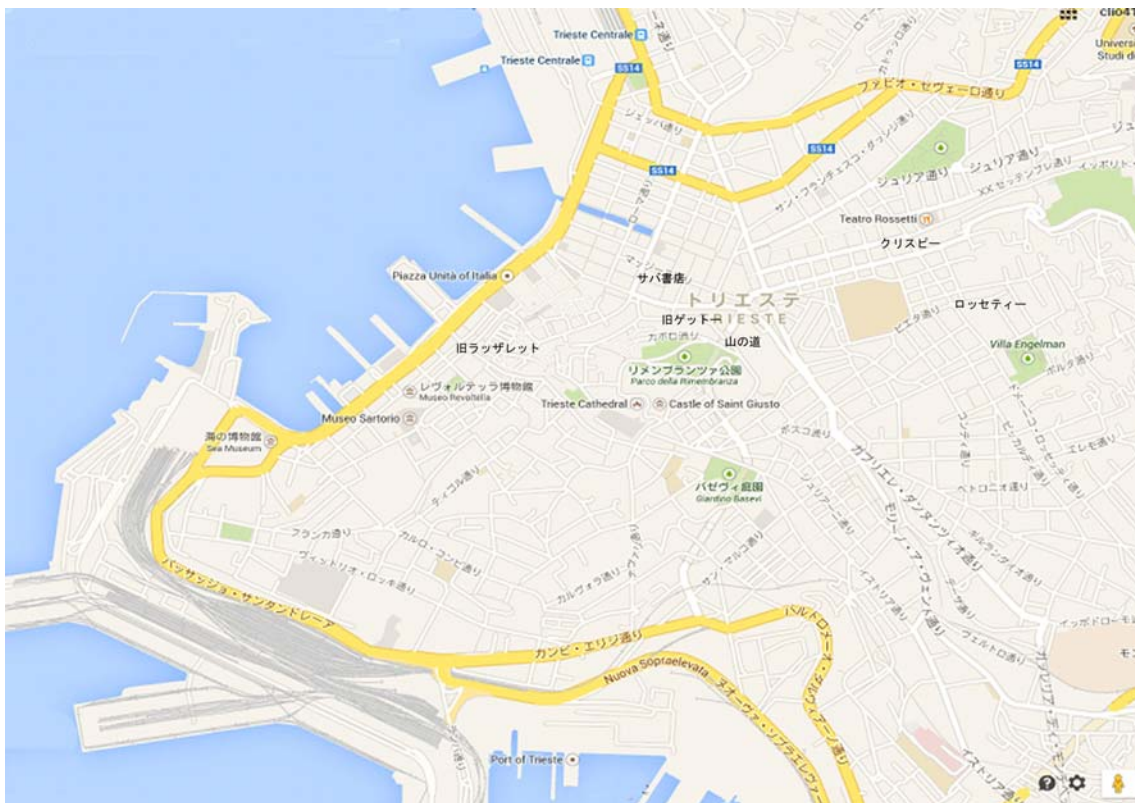
1 Trieste

トリエステはイタリア北西部に位置する旧ユーゴスラビアに隣接するイタリアの町である。530年もの長いオーストリアの支配下から独立し、イタリアに編入されたのは1918年のことであった。だから中部ヨーロッパの影響と同時にイタリア的な文化が混じった独特のコスモポリタンな風土を作り上げた。街は最初軍港として、イタリアに編入後は貿易港として栄えたが、良港（ジェノヴァ、ナポリ、ヴェネチア・・・）の多数存在するイタリアにあってはかえって往時の繁栄を築くことは難しかった。

ウンベルト・サバはこの地に1883年に生まれ、1957年、愛妻リーナの死の数ヶ月後74歳で亡くなった。ユダヤ人の母とイタリア人の父との間に生まれ、第2次世界大戦のユダヤ人迫害中に各地を転々とせざるを得なくなり、辛酸を舐めた。

彼の詩の中にトリエステを歌った詩がいくつかある。中でも「三本の道」Tre vie という詩は有名である。

海に面した統一広場の海岸通りに「ラッザレット・ベッキオ通り」があり、一キロ東の



丘には「ロセッティ通り」が、それを挟んでリメンブランツァ公園の北を「山の通り」Via del Monte があってそれを西に行くとすぐにユダヤ人ゲットーのあったリボルゴ街に出る。更にそれを少し西手に降りるとサン・ニコロー通りにウンベルト・サバ書店（旧「ふたつ

の世界の書店」)がある。

1992年にサバの詩集の翻訳者である須賀敦子はトリエステを2回目に訪問し、この道をたどったことを記しているが、「三本の道」ではこの三つの通りのことを歌っている。

トリエステには、閉ざされた悲しみの長い日々に
自分を映してみる道がある、
旧ラッツアレット通りという名の。

(中略)

悲しいことも多々あって、空と
街路の美しいトリエステには、
山の通り、という坂道がある。

(中略)

山の通りは聖なる思い出の道だが、
歓びと愛の通りは、
ドメニコ・ロッセッテイ街。

(サバ「トリエステと一人の女」 三本の道)

山の通りは聖なる思い出の道、というのはその道の先にユダヤ人の修道院、墓があったからだ。旧ラッツアレット街には現在その通りに「トリエステには、閉ざされた悲しみの長い日々に／自分を映してみる道がある、／旧ラッツアレット通りという名の。」

C'è a Trieste una via dove mi specchio
Nei lunghi giorni di chiusa tristezza
Si chiama Via del Lazzaretto Vecchio

の部分のプレートがはめ込んである。詩には各道の特徴が世間の人々の生活と共に描かれている。

またトリエステ全体のイメージを歌った詩に「トリエステ」がある。
それは面白い比喻でかたどられている。

トリエステには、棘のある
美しさがある。たとえば、
酸っぱい、がつつした少年みたい
な、
碧い目の、花束を贈るには
大きすぎる手の少年、
嫉妬のある
愛みたいな。



(同 「トリエステ」)

トリエステの魅力を「棘のある美しさ」と形容し、「酸っぱい、がつがつした少年」「花束を贈るには大きすぎる手の少年」「嫉妬のある愛」などに喩えられている。いずれの比喻も間尺に合わないギャップ（棘）の美しさだ。

2 Lina

リーナ Carolina Wölfler との出会いはたとえば、こんな風に描かれている。

部下の兵士らのなかに、じぶんがいた。
彼らのなかに、きよらかな私のミューズが。
内務班での、あるいは汗にまみれた
遊戯、暗くてせまい牢獄のなかで、

自由にはばたく、あるかないかの郷愁の
金いろの流れがうっすらと息づくソネット
の詩をいくつか、じぶんでも書いてみた、ぼくの
帰りを待っているあのひとのためだけに。

きみが見た夢のなかにいるような、そんな
だったよ、あの中のぼくは、リーナ。夢の話
を書いてきたきみの手紙にぼくは口づけをした。

「休暇をもらって帰ってきた水夫だったわ、あなたは、
あんまり熱心に日々のことどもを話してくれた
ものだから、なんてすてきな暮しと思ったのよ、わたし」

(サバ 「自伝」 11)

二人の生活は・・・

むすめだったきみの人生は
どこに行った？縫物をしてた、弱かったきみ
きみの小部屋か、作業場で。
兵舎みたいな喧噪、
ほんとにうるさい、そう、きみはいつた、
歌と憂愁にあふれて。
かくれて泣いたり、女囚の仲間が、

歌うと、きみも、ときに、声をあわせた。
でも、祭りの日や、夏の夕方には、
いっしょに出かけたね。
きみを、きみだけを待っていた、だれかと。
まずしい花たちのなかで、きみが薔薇だった、
純潔の薔薇。

(同 「家と田園」 リーナへの間奏曲)

だいたいこれでリーナ Lina という女性の印象は捉えられるだろう。それにサバの想いも。
それが最もうまく表現されているのは次のような一節だろうか。

おお、女王様、貴婦人様、
今日のあなたの優雅さは、昨日のとはまたちがう。
これまでもそうだったし、いつまでも。
いや、ぼくは、こういいたい、
きみが、冬のさなかに、
冷えきった、きみの肩を
むらさきのショールで
つつんでいると、それはやっぱり
きれいだったし、はじめて会った日から
これまでの、ぼくの最良の思いに
きみの横顔は、似ている。
あの日から、いつもきみを
そばにひきよせ、きみの愛にみちた
たましいのまわりで、ぼくは仕事をした。
いまはもうない、むかしの悩みから、
ぼくは、きみのたましいを、自由にした。



(同 「家と田園」 リーナへの間奏曲)

二人の生活は平凡でつましい。

丘まで、あるいは、海岸通りに、
うつくしい夕方、ふたりで
散歩にでかけると、
みな目のには、ぼくらの
絆は、ごくむつまじくうつるのだ。
多くの血であがない、多くの

変則な歓びも訪れる、ふたりの暮しだが、
連中の気に障るなにもない。
ふたりは、みなに優しいし、おだやかな
市民だし、目ざすのはいいぶどう酒一杯。
ただ、胸中には金切り声がひびき、
旗が風にはげしくはためく。

祭日には、ぼくが人気ない町はずれを選ぶのが、
少々、奇妙なくらいで、あとは
レストランの庭で夕食をとる、
まったくふつうのふたりにすぎない。
もう自由をなつかしんでる夫と、
焼きもちをやいている妻と。
他の人たちとはっきり違う点など、
友よ、ほとんどないのさ。

芸術と愛という
逆なふたつの運命をここに
秘めたぼくたちだが。

（ 同 「トリエステとひとりの女」 ある散歩のあとで ）
「連中の気に障るなにもない。／ ふたりは、みなに優しいし、おだやかな／市民だし、
目ざすのはいいぶどう酒一杯。／レストランの庭で夕食をとる、／まったくふつうのふた
りにすぎない。／もう自由をなつかしんでる夫と、／焼きもちをやいている妻と。」

3 Terra di nessuno

サバはユダヤ人の母とイタリア人の父との間に1883年にトリエステで生まれた。
浮薄な父はサバが幼い頃、家庭を捨て、サバは母の手でゲットーで育てられた。父を嫌い、
ヘブライ語でパンを意味する「サバ」と自分を呼んだのはこの辺の事情による。

ぼくにとって父親は《人殺し》だった、
はたちのとき、はじめて会うまで。
そのとき、わかった、彼は幼なすぎたのだと、
それに、ぼくの才能は彼からもらったのだと。

表情にはぼくの目のうすい青さがよどみ、

甘くてこすい、惨めな男の、ほほえみが。
巡礼みたいに、世界をわたりあるいて、
ひとり以上の女を愛しては、喰いあらし。

快活で浮薄な男だったのに、母はというと、
人生のすべてにずっしり重さを感じてたので、
彼は母の手からボールみたいにすりぬけて行った。

「父さんなんか」母は言った「似てはだめよ」
そのことを、ずっとあとから、ぼくは理解したのだ、
二つの民族の古い諍いがぼくのなかで闘あうのを。

(サバ 「自伝」 3)

父親のことを「彼は幼なすぎたのだ／ 甘くてこすい、惨めな男」と切って捨てる。

ユダヤ人としてのサバの後半の人生に訪れたのはファシズムの嵐だった。1938年の時点でトリエステのユダヤ人は6200人。イタリア全土では46656人、ユダヤ人はイタリアの人口の1%であった。

1938年に出了されたユダヤ人排除の法令(国の学校からその職務に就くユダヤ人およびその子どもの在籍を排除する法令)を皮切りに1943年のナチスの進攻によってトリエステにもリジエラ収容所が作られ、ユーゴからのユダヤ人、トリエステのユダヤ人、イタリア各地のユダヤ人などが収容所で殺された(その数は3000～5000人といわれている。)



もともとムッソリーニはヒトラーのような生物学的人種差別主義者ではなく、イタリア内ではユダヤ人差別がそんなにあったわけではなかった。しかしそれでもナチスとの協定関係で1938年以降はユダヤ人排除の政策が公然となった。

サバは古書店を閉めてパリへ脱出する。しかしまた思い返してフィレンツェ、ローマ、ミラノなど身を隠しながら転々とした。トリエステがナチスから解放されてからはここに戻ったが戦後のサバの姿は「こわばった、動きのない」人物として友達に目撃されている。

ずっとむかし、
ぼくは楽々と生きていた。土は
ゆたかに、花も実も、くれた。
いまは、乾いた、かたい土地を耕している。

鍬は、

石ころにあたり、藪につきあたる。もっと深く

掘らなければ。宝をさがす人のように。

(同「最後のこと」仕事)

気をつけながら、きみの茎（注：バラの）を彼女は洗っていた。

衰れっぽく、ぼくと、はじめてのぼくの贈物に

そっとわらって、両手で胸に留めた。

やがてぼくは、その胸を去り、遠くに行った。

ぼくは彷徨った、さまようのが、人間の性だから。

人生がぼくをうちのめしたが、敗けたのは

半分だけ。心は生き残った。

(同「地中海」薔薇についてのヴァリエーション)

「鍬は、／石ころにあたり、藪につきあたる。／ぼくは彷徨った、さまようのが、人間の性だから。／人生がぼくをうちのめしたが、敗けたのは 半分だけ。心は生き残った。」

これは決して負け惜しみではなかろう。彼には一つの夢があった。

新しい町が建ちはじめていた。その中で

ぼくがはじめて受けとめた、あまくて

虚しいのぞみ、

じぶんの生を、熱い

みな的人生に入れ込むという

すべての日の、

すべての人と

おなじになるという。

(同 「死んでいくところ」 町はずれ)

虚しいのぞみ、それは「じぶんの生を、熱い／みな的人生に入れ込むという」また、
「すべての日の、／すべての人と／おなじになるという。」

この詩は以下のように続く

教会の壁はいまも

黄色い、そのまわりの草地の

緑は褪せたが。ずっと下に

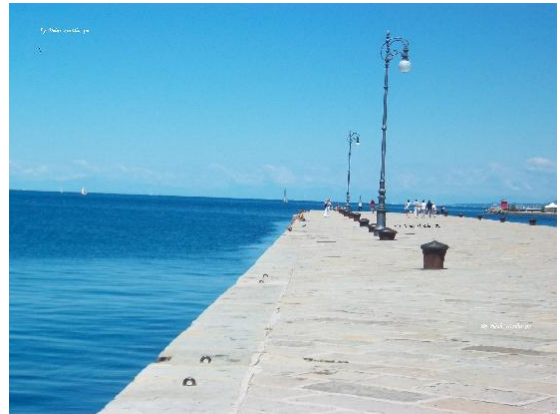
もりあがる海には、船がたった一隻、

巨大な船、

片方に傾いてじっとしている。かたち、

色、
あまい、卑怯な、ぼくのためいきが
そこから生まれた人生、限られた
世界。ぼくは、そのほかにも
かたちを、
色を創った、じぶんのままでいて、つらい
ぼくの苦しみで。そして死が
ぼくを待っている。

いつか戻るだろう、
ここに、さもなくば、ほぼ
おなじような、他の町はずれに、
花の日々が。そして、だれか、ぼくでな
いやつが
ぼくの人生をもういちど生きるだろう
青春の極限の
焦りのなかで、そいつも願うだろう、
希うだろう、
じぶんの人生をみな
人生に組みこんで、
みなとおなじになりたいと、
そして彼には見えるだろう、その時代のある日の
人たちが。



(同)

ここでサバは珍しく高々と歌い上げている。自分の死後にも次の世代に託す想いが。
こうしてユリシーズは帰還したのか？

若いころ おれは ダルマチアの
沿岸で 海を渡った。 波がしらに
小さな島々が 見えかくれして まれに
鳥が一羽獲物を狙って 羽を休めた。
藻に被われた 島々は ぬるぬるして
エメラルドのように 太陽に燦いた。 満ち潮と
夜が すべてを消し去ると 風下の
帆は その陰険な陥し穴を避け
はるか沖合に はためいた。 今日

おれの王国は あの NO MAN 'S LAND 港は
他人のために 灯りをともし まだ 意地をはる
精神と 傷だらけの人生への 愛が
おれを 沖へと 突き返す
(同 「地中海」ユリシーズ 1946)

NO MAN 'S LAND (Terra di nessuno 戦場の敵味方接する無人地帯、誰のものでもない土地) を王国にして、傷だらけの人生への 愛が沖へと 突き返すもの・・・

2014. 6. 7

(引用詩は「須賀敦子全集」第5巻 ウンベルト・サバ詩集 河出文庫 による
他に Umberto Saba “Il canzoniere” Einaude 2009)

益子直美——上を向いて歩く？



あるラジオ番組を聞いていると、ゲストに益子直美が出ていて、バレーボールの試合後、試合前に儀式みたいにしていたこと、という話になった。

益子直美といえば、テレビアニメ「アタック No.1」の影響を受け中学時代に頭角を現し1980年代後半から90年代前半まで大林素子とともに女子バレーボール全日本代表メンバーとして活躍したアタッカーである。私はそのころバレーボール観戦にさほど興味がなかったので益子の試合は記憶にない。90年代後半からの柳本監督、真鍋監督時代の大林、木村、竹下というようなメンバーの10年来の試合はよく見たし、声援も送ったものだが・・・ちなみに益子は1992年のバルセロナ・オリンピックには出場できず、その年現役引退した。(バルセロナ五輪の監督は米田、選手に大林、中田、吉原などがいた。戦績は第5位。)

さて話を前に戻して、試合直前によくしていた儀式として音楽を聞いて自分の気持ちを調整することがあったそうだ。最初はロックなどを聞いていたが、ロックでは気分がハイになってしまって試合中に落ち着くどころではなかったそうだ。それでもっと地味な曲にした。それが彼女の「人生で一番大切な曲」となった。スターダストレビュー「上を向いて歩こう」。もちろんこのよく知られた曲は坂本九の歌で、アメリカでは「スキヤキ」という理解に苦しむよう



なタイトルで発売されたが、60年代の曲でありながら現代に生き残った。ア・カペラ a cappella（伴奏なしの合唱、重唱の曲）で、スーダストレビューの根本が歌っている。実際に流されたこの曲を聴いたが（一般にはコーラス付の根本独唱なのだが、益子の聞いていたのはコーラス抜きの根本独唱だけのもの）確かに幾分悲しく、陰々滅々としてくるが、最後には妖艶ささえ感じさせる。なるほど激しい戦闘の待っている直前にはこういった曲のほうかはるかに気持ちを集中させ、落ち着かせてくれることを納得させられた。戦う女たちにこのような秘策があったのだ、と妙におかしくもなり、感心もした次第。

上を向いて歩こう
にじんだ星をかぞえて
思い出す夏の日

一人ぼっちの夜
幸せは雲の上に
幸せは空の上に

現役引退後、益子はテレビ局のレポーター、メインキャスターなどをしながら広く芸能活動をこなしている。大林素子などは苦戦しているが益子は40歳になって12歳年下のロードレーサーと結婚、写真集も3冊出し、順風満帆、上を向いて歩いているようだ。

2014. 6. 13

ピダム——愛の疑惑（「善徳女王」）

1

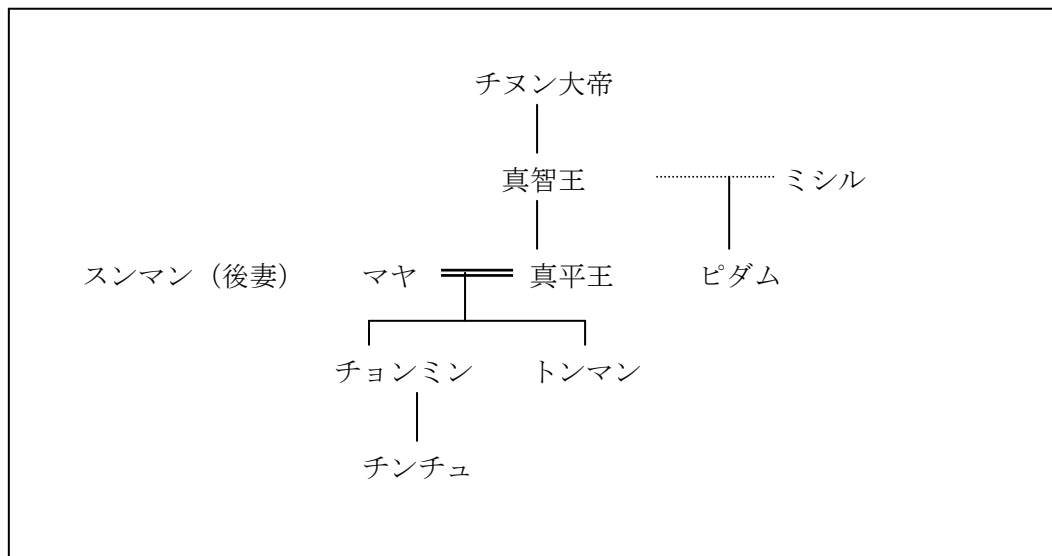


「大王の夢」「善徳女王」の2作を部分的に見て、その中の善徳女王（トンマン）にかかわる愛の物語でとび抜けてピダムの話が面白かったので、この人物について書くことにした。最も2作品全部を見たわけではなく（「大王の夢」は70話、「善徳女王」は62話もある。）たまたまテレビ大阪で放映中の「大王の夢」のピダムとヨンファ

の話に興味を抱きまとめてみたいと思った。ただ、最初に見たのが「大王の夢」の方で、そこに描かれているチェ・チョロ演じるピダムはひたすら権力奪取に野心を燃やす策謀家として描かれており、女の王である善徳女王を排除する男として描かれている。この印象が強かったので、「善徳女王」の方に登場するキム・ナムギル演じるピダムとはあまりにギャップが大きすぎて戸惑った。このドラマにおけるピダムは権力にひたすら執着する男としてではなく、善徳女王（トンマン）への愛ゆえに破滅していく男として描かれているのだ。

そんな訳で「大王の夢」のピダムとヨンファの話も面白いのだが、まず「善徳女王」のピダムとトンマン（善徳女王）について書いてみる。

新羅の第27代大王は初めて女帝が王位を継いだ。この善徳女王トンマンはもともと眞平王の子どもとして生まれた双子の姉妹の妹の方であった。（姉はチョンミョン）しかし双子が生まれると王の代は途絶えるという预言から王の愛人であったミシル（美室）は皇后の座を正妃マヤから奪うためマヤと双子の殺害を企てるのだが、王が正妃マヤのことを慮って双子の片割れ（トンマン）を侍女のソファに託しそれに元風月主ムンノも加担して逃れさせる。ムンノはこのトンマンとミシルの子ピダムとを結婚させようとするがソファはそれに反対し、二人で逃げる。こうしてトンマンの受難が始まり、タクラマカン砂漠にまで逃げ延びたトンマンはたくましく成長していく・・・



2

自分の出生の秘密を知るためにトンマンは小さい頃自分の脱出を助けたムンノが居るといふ萬努郡の如来寺に向かう。同じ頃姉のチョンミョンも如来寺に向かつており、姉妹とも知らず偶然二人は出会って知り合いになる。チョンミョンはユシンの父ソヒョンを徐羅伐（そらぼる：当時の首都）に迎え入れ、トンマンは男としてユシンの率いる龍華香徒の一員として武術に励むことになる。これが女王一臣下として生涯を共にする二人の出会いだった。

やがて自分の出生の秘密を知ったトンマンは女王の座を狙っているミシルの追っ手から逃げるためにユシンとともに逃げ出す。追っ手はミシルの家臣のみならずユシンの父ソヒョンの手下も加わり間一髪のところを謎の男が現れて二人を救う。この謎の男こそピダムだった。（第21話）ピダムは今は魔王となった真智王とミシルの間にできた子だがこの時点では本人はそのことを知らない。現王真平王の妃となろうとし、女王の座を狙うミシルにとっては魔王の子は邪魔だった。捨てられたピダムはムンノによって育てられた。こうして生涯の宿敵（愛と憎しみの相克の対象）となるトンマンーピダムーユシンの三角関係が出来上がる。



以上、このドラマの前半を主要人物だけを取り上げ、要約した。

このドラマの山場はその後、中篇ミシルの政変（第46話～51話）、後編ピダムの叛乱（第

56話～62話)の二つだろう。

トンマンにとっての生涯の宿敵はミシルであった。ミシルは王権を狙いトンマンを幽閉、殺害しようと企む。トンマンはこのとき初めて自分が王になるという待望を明らかにして



ミシルに決戦を挑む。ミシルは奪った玉璽を使い臣下を従わせ、戒厳令を敷いてトンマンを捕まえようとする。いちかばちかトンマンは一人で宮廷に出廷し、公開尋問を提案した。その場が両勢力の対決の場となり、破れたミシルは辺境の不落の城、大耶城（テヤジョウ）に逃げ込む。事態はい

よいよ内戦の様相を呈してくるが百済の進攻を目前に辺境の兵たちを使えないと察知したミシルは祖国新羅のために毒杯を飲んで果てる。傍にはピダムもいて母の愛を乞うが拒絶される。

こうして乱は収束され、トンマンによる新しい王政が始まった。トンマンはピダム自身から本当はミシルの子どもだと聞かされ驚くが、自身捨てられたこども時代を思い出しピダムを憐れに思い抱いて慰める。この後新しい人事刷新の中でピダムは陛下直属の「司量部令」（国家秘密警察の長官）の地位を与えられ、辣腕をふるいはじめる。

こうして物語は悲劇の後半に突入していく。

3

司量部令の地位を与えられ、権力を手にしたピダムは変貌していく。かつてナイーブでニヒルだった青年は人を監視する不気味な目つきの鋭い男に代わってしまった。しかも彼が見据えているのは国家や大義といったものではなかった。それはひたすらトンマン（善徳女王）の愛と信頼をうる為の忠義だった。そのためトンマンの一存で彼の行動は変化する。トンマンはユシンという軍事的天才、忠義の臣下を抱えながら、女として甘えられるこころの安らぎをピダムに求めていた。宮廷の長官、上大等に彼を任命してからは、余生を彼とともに過ごしたいと願うようになる。そしてついにピダムとの婚姻を発表する。ピダムは光栄に思う気持ちと同時に愛の思いに感無量となり、トンマン死後は自分は政界を去るという誓約書をトンマンに差し出す。しかしこのことが思わぬ波紋を広げていくことになった。

まず婚姻によってピダムは配下の貴族たち（旧ミシルの親族）の私兵が国家の正規の兵（兵部）へ編入されることになり、貴族たちは王に軍事権力を差し出し、奪われることになるのだ。当時は王の正規軍と貴族の私兵はむしろ貴族のほうが強いくらいだった。それゆえ貴族たちはこの婚姻をよからぬことと反発した。しかも女王死後にはピダムは政界から引退するという密約書がばれることによってピダムの後ろ盾を失ってしまうことを旧ミシル系の貴族たちは恐れた。そういうわけでこの貴族たちは密かに鉾山採掘の名目で屈強

の労働者を鉾山に集め、それを兵士として訓練していた。そして一派は女王を廃位し、ピダムを王とするための様々な策略を練って実行する。まるでかつてのミシル対トンマンの図式が再現したかのようであった。しかも捜査を開始した聖骨（半分王の血筋をひいたもの）であるチュンチュが一派におそわれその策略の出所が旧ミシル系の貴族たちであることを掴んだチュンチュはピダムにその責任を取らせようとする。

事態の重大さを知った女王はいったんピダムを辺境で休息させ事態を独力で早急に解決しようとする。ピダムはその意を受け辺境に旅立とうとするが、その前に自分の責任として旧ミシル系の貴族たちを粛清しようとした。この動きを察知し、王に忠誠をつくそうとするピダムを一派のヨムジョンはかつてから送り込んでおいた侍衛府（王宮の警護兵の役所）の武士を使って辺境に移動しようとするピダムを殺害しようとする。この刺客を殺害する前に侍衛府の武士であることを確認したピダムは恐ろしい考えに囚われる。彼は女王に命令され自分を辺境に行かせる途中で殺しに来たのではないか、という考えに。問い詰めると武士は「陛下の命令で」と嘘の自白をする。「陛下はおまえを信頼してなどいない」というチュンチュの思わせぶりの言葉も思い出され、ついにピダムは女王が自分を追い払うために刺客をよこしたのだと曲解してしまう。ここからピダムの進むべき道は一直線である。＜女王を廃して自分が王になること＞。

こうしてピダムは反乱軍の党首となり、もうのつびきならぬことを悟ったトンマンもピ



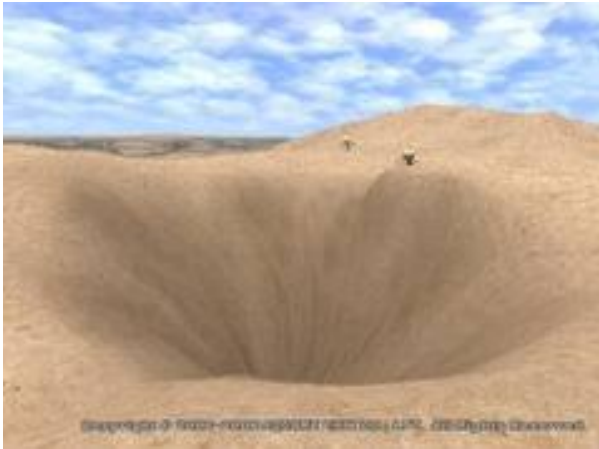
ダム討伐を決意する。しかし運命は皮肉なもので本当にトンマンは自分を排除しようとしたのか、ということ調査させるうちにそれはヨムジョンの策略であることを突き止めたピダムにとっては反乱を勝利させることなどもはや何の意味もなかった。＜死ぬ前にただ、あの女（ひと）に本当のころを伝えること＞。こうしてピダムの最後の王軍への討ち入りが決行される。トン

マンのいる所へ・・・大勢の兵士を切り刻みながらトンマンの兵舎の目前でピダムはユシンにとどめを刺される。

追い詰められ、最後になって女の誓いを信じられなくなり、その疑惑ゆえに滅びていく男の最期。「オセロ」まがいの愛の悲劇がここにはある。しかし歴史ドラマに愛憎劇をこれでもか、これでもかと絡ませる韓流ドラマの特徴が実に鮮やかに表れた一編でもあった。

2014. 7. 10

忍びよる破滅と傍観者



1

山崎正和の「鷗外——闘う家長」のⅢは「勤勉なる傍観者」という章である。この章の冒頭に彼はこんなことを書いている。

鷗外の作品を読んででいちじるしく目につくのは、彼が人間の運命の傾き方について、一貫した独特のイメージを持つ

ていることであろう。すなわち、主人公の非運はおおむねささやかな偶然によって不意に襲って来るか、そうでなければ、蟻の孔から水が浸み入るように、これという事件もなしにじわじわと忍び寄って来る。いいかえれば、主人公はつねに日常性のただなかで、身をたてなおす間もなく不幸に見舞われるのであって、気がついたときには、事態はすでに手遅れになったかたちで彼らをからめとっている。

（ 山崎正和「鷗外——闘う家長」Ⅲ 「勤勉なる傍観者」 ）

鷗外の作品の主人公の悲運は「ささやかな偶然によって不意に襲って来るか、そうでなければ、蟻の孔から水が浸み入るように、これという事件もなしにじわじわと忍び寄って来る。」それゆえ主人公は日常性のただなかで、身をたてなおす間もなく不幸に見舞われ、気がついたときには、事態はすでに手遅れになっている。

西洋で悲劇的人間といえバオセローにせよオイディプスにせよ悲劇の状況の中でせいはいもがきながらも、如何とも知れぬ力によって崩れ落ちていくというイメージが強いが、鷗外の主人公の場合ささやかな偶然や、これという事件もなしに、じわじわと忍び寄って来るという経過をたどる。その典型的な例を山崎は「護持院ヶ原の敵討ち」で説明してみせる。

姫路の城主、酒井雅楽頭忠實の上邸で泊まりの番をしていた大金奉行山本三右衛門はたまたま相方が病欠欠席していたため一人で番をしていて、金品目当ての何の関わりもない小使亀吉に殺されてしまう。しかしその結果残された子供たち（宇平、りよ）には「仇討ち」という宿命がその一生を義務づけるのである。

すなわち、三右衛門の遺児たる宇平とりよにとって、仇討ちという武士の義務を果す日まで、終りのない精神的な流浪の生活が始まるのである。恐ろしいことは、この非日常の世界があたかも日常性の世界と背中あわせにあって、突然の不幸は、たんにその間の薄壁に小さな孔をあけたにすぎない、という印象をあたえることであろう。仇討ちの義務は武士に

とってあらかじめこの世に組み込まれている地獄であり、けっして巨大な悲劇がそのとき初めて生み出した人生の「例外」ではない。もちろん、巨大な悲劇は見る者にとって恐ろしいが、しかしそれは、あまりの巨大さのゆえに日常性から遠いものとしての安心感をあたえてくれる。だが鴟外の場合、突発する不幸がささやかな偶然であるだけにかえってわれわれは、「板子一枚下」にある地獄の避けがたい恒常性を思い知っておののくのである。

(同)

敵討ちをしなければ、家督を相続できないということもさることながら、武士の意地としての必然的な行動としての束縛が遺児たちの生涯を決定する。それはたまたま相方が病欠で三右衛門ひとりで番をしなければならなかった、という偶然と襲撃の日がその日であったということによって起こった出来事であった。



このことは「阿部一族」においては家長彌一衛門の主君忠利との齟齬が反抗を呼び起こし、主君への反逆、一族の滅亡へと更に大規模な破滅を引き起こす事件となって描かれる。

「己は己だ」というこの自覚を表現するために、やがて彌一右衛門は主君の許しなく腹を切り、嫡子・権兵衛は主君の霊前で髪を切って出家をする。足もとから崩れる運命に抵抗するのは反対に、むしろそれをみずからの足で踏み崩すことによって、彼らは自己の存在を証明しようとする。こうして結局は一族全滅の道をたどった阿部家の顛末は悲惨だが、しかし、その悲惨さはあくまでも厳密な意味での「悲劇」とは無縁のものというほかはない。なぜなら、彼らはつねに迫って来る非運の先廻りをしているのであって、ある意味で、その非運のあり得べき大きさを徹底的に験したとはいえないからである。真に「悲劇的」な人間は目の前の非運にどこまでも抵抗し、にもかかわらず、ついに力尽きることで逆に運命の大きさを身をもって証明する人間だということは、周知の定義であろう。

(同)

「目の前の非運にどこまでも抵抗し、にもかかわらず、ついに力尽きる」という真に「悲劇的」な人間に比べて、足もとから崩れる運命に、むしろ加担してしまいネガティブな自己証明をしようとする鴟外の、これらの主人公たちを山崎は「反・悲劇的」な人間と呼び、およそ3つに分類している。

1 破滅を急ごうとするひとびと。

「阿部一族」「大塩平八郎」など

2 自分の破滅を知りながら、それを傍観者的に眺めている人間。

「梶原品」伊達常宗、「あそび」木村、「鶏」石田少介、「百物語」飾磨屋

3 逆境のなかでいきいきと蘇り、逆に自分の行動に確信を感じ始める人間。

「護持院ケ原の敵討ち」山本りよ、「梶原品」品、初子「安井夫人」お佐代
「山椒大夫」安寿、「渋江抽斎」五百、「羽鳥千尋」

以下、2の「自分の破滅を知りながら、それを傍観者的に眺めている人間」について考えてみよう。

2



この第2の類型に属する主人公は第1の類型に属する主人公に較べて破滅を急ごうとはしないが、その破滅の成り行きをじっと観察しながら、その崩壊感覚を不都合なこととは思いつつも、じっと来るべきものとして耐え、待ち続けながら傍観している。かといって何ら呆けた思いで事態を見ているのではなくて、それなりの熱い気持ちでそれを見ているのである。

たとえば「鶏」の小倉に着任したばかりの少佐石田少介。そこには、数年前に妻をなくした彼が、新任の地で家探しから始まって、その家に落ち着くまでの顛末が細かく描写されている。破滅とか崩壊とかいう大げさなものではないが、その落着しようとするまでの経過がいかに緩慢で滑稽でミゼラブルなのだ。

新しい借家を借りて50くらいの女中の婆さんの時、馬の世話をする別当の虎吉をとりあえず雇った。ある日戦地で知り合いの麻生という人物がやってきて雄鶏を置いていった。その内、鳥町で石田は一羽の雌鳥を買ってきて雄鳥の中に放った。するとその後いつの間にか虎吉が自分の雌鳥を立て続けに2羽入れて合計4羽になった。当然雌が卵を産む。それを虎吉は自分の雌鳥の卵だが、旦那様（石田）にも分けてあげろと言う。どっちの雌鳥が産んだ卵か分からないのを虎吉は恩着せがましく主人の雄鳥によって産ませ、適当に自分の家に持ち帰っていたのだ。不愉快だったが、石田はほっておいた。時婆さんは石田のことを「けちでバカ」だと思っていたので諦めて黙った。そのうち隣の女がこれ見よがしに大きな声を出して、婆さんが台所のものをごまかして自分の生活に流用している、とか、虎吉が馬の麦をごまかしているとか、あることないことしゃべりまくる。石田は黙って微笑さえ浮かべこれを聞いている。そして葉巻をくゆらして、書見に入る。

かといって石田が何の対策も立てないのではない。まず時婆さんを解雇して別の下女を雇うことにした。最初は25くらいの髪の薄い女。石田は気にいらず取り替えた。次にやってきたのは16のはきはきした春という女の子。子の子を気に入って雇い、もう一人久

という13歳の女の子を入れたが、この子は粗野なのでやめた。

七夕が過ぎ、盂蘭盆が過ぎた。鶏は雛をかえした。そのうち石田はこめ櫃の米の減り方が早いのに気がついた。春に聞いてみるとそれは虎吉のせいだった。虎吉は自分の米を石田の米びつにいれ、適当に石田の米のほうを持ち帰っていたのだ。味噌も醤油も、薪もこの調子で、調理道具も主人のものを使っていた。石田はあきれたが、虎吉の新経理法か、とうなってしまう。しかし虎吉のものと自分の物を区別するために新しい道具を買い揃え、そのことを虎吉に伝えた。別に虎吉を解雇するでもなく、百日紅の向こうに二十六夜の打ち上げ花火を見ていた。

まあざっとこんな話なのだが、生活の中にシロアリが巢食らうように、たかって崩れていくような気持ち悪さを抱え込みながらも、石田はぼんやりとその事態を眺めている。勿論生活が崩壊するといった大げさなものではない。しかし、じわじわと崩壊が近づいてきて、何らかの行動は取るものの、誰も助けてくれない。しかもその崩壊のきっかけはすぐにはわからず、ことをよく知っている友人や近隣の女や、下女によって、あるとき不意に明らかになるのである。そしてあわてて小細工を弄してみるがそれは次々に立ち起こってくる少事件によってなし崩しになっていく。このちょっとしたきっかけによる崩壊と、それがいつやも知れぬという気味の悪さ、それをまた主人公が傍観的にじっと見つめているというのが、この小説の面白さだろうか。

もっとはつきりした例は「百物語」に明らかである。

3

“百物語”というのは怪談会のことで蠟燭を100本立てて1話語るごとにその蠟燭を消していき100本目が消えると、ほんとうの幽霊が現れるという遊びである。鴟外の「百物語」はこの会を豪商、飾磨屋が両国から船に乗って寺島の飾磨屋の別荘で催すのに主人公“僕”が参加する話である。

ところで飾磨屋は今紀文と呼ばれたほどの豪商ではあるが、豪遊しつくしたいまや破産寸前といううわさはしきりである。東京一の美人芸者、尾崎紅葉もほれた太郎を連れていつも遊んでいる。この日も太郎を従えていた。しかしいまや破産寸前のこの男はいったい何を考えているのだろうか？



僕は飾磨屋の前生涯を知らない。あの男が少壮にして鉅萬の富を譲り受けた時、どう云ふ志望を懐いてゐたか、どう云ふ活動を試みたか、それは僕に語る人がなかった。併し彼が芸人附合を盛んにし出して、今紀文と云はれるやうになってから、もう徐程の年月が立

ってゐる。察するに飾磨屋は僕のやうな、生れながらの傍観者ではなかつたらう。それが今は慥かに傍観者になつてゐる。併しどうしてなつたのだらうか。よもや西洋で僕の師友にしてゐた學者のやうな、オルガニツクな欠陥が出来たのではあるまい。さうして見れば飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創痕を受けてそれが癒えずにゐるために、傍観者になつたのではあるまいか。

若しさうだとすると、その飾磨屋がどうして今宵のやうな催しをするのだらう。世間にはもう飾磨屋の破産を云々するものもある。豪遊の名を一時に擅にしてから、もう大ぶ久しくなるのだから、内證は或はさうなつてゐるかも知れない。それでゐて、こんな催しをするのは彼が忽ち富豪の主人になって、人を凌ぎ世に傲った前生活の惰力ではあるまいか。その惰力に任せて、彼は依然こんな事をして、丁度作家が同時に批評家の眼で自分の作品を見る様に、過ぎ去った栄華のなごりを、現在の傍観者の態度で見てゐるのではあるまいか。

(森鷗外 「百物語」)

僕は考える「察するに飾磨屋は僕のやうな、生れながらの傍観者ではなかつたらう」「飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創痕を受けてそれが癒えずにゐるために、傍観者になつたのではあるまいか。」生まれながらの傍観者でないとすると、無形の創痕が傍観者の原因なのか。僕は考える。「丁度作家が同時に批評家の眼で自分の作品を見る様に、過ぎ去った栄華のなごりを、現在の傍観者の態度で見てゐるのではあるまいか。」山崎正和は次のようにコメントする。

「少壮にして鉅萬の富を譲り受けた」ということは、いいかえれば、この主人公が早すぎる「家父長」になつたということであろう。彼は財産の悪しき「管理者」であり、養うべき子を持たない「父」であつたかもしれないが、しかしまちがつても、父の庇護のもとに放蕩をつづける「子」の立場にはなかつたはずである。そして、あまりにも早く「父」になりすぎ、しかも荷風のいう「生活難を謳ふ」必要のない人間の場合、ともすれば自己の存在を賭した活動の意欲を失うのは、一種の宿命のようなものだといえる。おそらく、若い飾磨屋は青春期の荷風と同じく、「なすべき仕事」のないことに悩み、さらに荷風と違って、國家や父親にさからって「自己の陰画」を自覚することもできなかった。じつは飾磨屋の受けた「無形の創痕」とはそういう天性の不安であつて、その深い無力感が、破産に瀕した今もお彼を奇妙な「傍観者」にひきとめていると見るべきであろう。

(山崎正和「鷗外——闘う家長」Ⅲ 「勤勉なる傍観者」)

「飾磨屋は青春期の荷風と同じく、「なすべき仕事」のないことに悩み、さらに荷風と違って、國家や父親にさからって「自己の陰画」を自覚することもできなかった。」その結果、天性の不安、深い無力感としての「無形の創痕」をこうむつたのではないか、というのが山崎の考えである。確かに飾磨屋には荷風のような國家や父親という反抗の対象を持つことなく若くして家父長となり、「なすべき仕事」もないまま、自己を傍観することしかない

無力感を味わったのだろう。しかしこの無力感によって破滅にじわじわと追い詰められていく不気味な傍観者とはいったい何なのだろう。この「百物語」の末尾では百物語が佳境に入る前に飾磨屋は太郎を連れてぷいと二階に消えてしまっている。

逃げ出すことのできない終末の到来を最後まで傍観者的に凝視しようとする不気味さにさぞかし、読者は慄然とさせられるのではないだろうか。山崎はこれらの主人公のことを「反・悲劇」と銘打っているが、こういった悲劇を本来の「悲劇」と考える人物も存在する。

この最後の種類の不幸は前の二種の不幸よりもずっと悲劇に適しているとわたしは思う。なぜなら、これがわれわれに見せてくれる最大の不幸は、なにか例外的なこととして起こるのでもなければ、珍しい状況や怪物的な人物によって引き起こされるものでもなく、普通の人の行ないや性格から自然にまたごくかんたんに出てきて、ほとんど本質的なものとして出現し、まさにこのことによって、人生にこのような不幸のあることをわれわれに怖ろしいほどまざまざと感じさせるからである。前の二種類の不幸では、われわれは恐怖すべき運命や凄絶きわまりない人間の悪を見て、これを畏怖すべき力とは感じるけれど、ただその力をはるか遠方からわれわれを脅かしているにすぎないので、われわれとしては必ずしも諦めの境地に逃げ場を求めないでも、おそらくこれらの力から逃れるすべを心得ることかできよう。ところが最後の種類の不幸となると、われわれに示されているのは人生を乱し幸福を破るあの種の力であって、われわれにしてもいつなんどきそのような力にまきこまれることにならないとも限らないのだ。肝心な点はわが運命からも想定かできる（誰も身に覚えのある）人生の紛糾によって最大の苦悩が引き起こされるのであり、時と場合によってはわれわれもひょっとして犯しかねない行為によって最大の苦悩がもたらされるのだから、われわれには不正を嘆くことさえ許されてはいないのだ。このような力を見せつけられると、身の毛もよだって、われわれは地獄のただ中にある心地さえするのである

（ ショーペンハウアー「意志と表象としての世界」第三巻 51節 ）

ショーペンハウアーは悲劇を3つに分類する。

- 1 一人の不幸の張本人がぎりぎりのところまで達する悲劇
「オセロ」「ヴェニスの商人」「アンティゴネ」など
- 2 偶然と間違い（盲目的な運命）によって引き起こされる悲劇
「オイデポス」など古代悲劇。「ロメオとジュリエット」「メッシーナの花嫁」など
- 3 ごく普通の人間関係から引き起こされる悲劇（途方もない間違いとか、未曾有の偶然があるわけではない。） 現代の悲劇

この第3番目の悲劇がなぜ恐ろしいかという点、「われわれにしてもいつなんどきそのような力にまきこまれることにならないとも限らない」状況から悲劇が発生するからである。

第1や第2の悲劇にあっては、その運命の凄絶さはかなり縁遠く、よしんば起こっても仕方のないこととして諦めることができる。しかし第3番目の悲劇は平凡な日常人といえども避けようがないのである。さすがニーチェの師匠！あっぱれな考えだ。

こう考えてみると鴎外の小説の主人公を「反・悲劇」の人物と規定した山崎の考え方は多少修正せねばならない。すなわち「反・悲劇」こそわれわれに最も近い悲劇なのであって、そこから逃げ出す術はないということだ。誰もが気づかないうちに蟻地獄にはまりこみ「あの時・・・」とうめくような瞬間がありうるということだ。

2014. 8. 11

<補遺>

傍観者がテーマだったので触れなかったが、山崎の論文でまだ気になる人物が2人いた。一人は「大塩平八郎」の大塩、もう一人は「安井夫人」の佐代である。

(1)「大塩平八郎」

大正2年に執筆されたこの歴史小説は明治43年に起こった大逆事件を念頭に、鴎外がその考えをここに盛ろうとした小説だったが、前4作（「興津弥五右衛門の遺書」～「護持院ヶ原の敵討ち」）に較べてみて「歴史離れ」よりも「歴史其儘」の方が勝った作品となった。

大塩平八郎の乱は幕末1837年（天保8年）に大飢饉における民衆の惨状、役人の傲慢に業を煮やして大阪町奉行与力、大塩自身が決起した反乱であるが、事前の密告によって包囲され逃亡、一ヵ月後追い詰められて放火、自刃した事件であった。

以後大塩の著述は禁書とされ、容易に手に入らなかったが、鴎外が小説の資材とした幸田成友の「大塩平八郎」（明治43年）は大塩の全貌をまとめて以後の研究の基礎となった。この著が出されるのに大塩の死後60年を費やしている。

大逆事件については体制内の知識人として裁判の成り行きに注目していた鴎外はすぐさま「沈黙の塔」を執筆したが……。この事件を機に転向した作家たちも多く、新帰朝者の永井荷風などはドレフュス事件の時のゾラのように抗議の弁論を主張し得ない不甲斐無い自分に失望して以後官能の世界に耽溺していくことになった。

この小説に関しては様々な観点から書くことができるであろうが、よく指摘される部分だけを抜き出しておこう。

己はまだ三十代で役を勤めてゐた頃、高井殿に信任せられて、耶蘇教徒を逮捕したり、奸吏を糾弾したり、破戒僧を羅致したりしてゐながら、老婆豊田貢の磔になる所や、両組与力弓削新右衛門の切腹する所や、大勢の坊主が珠数繫にせられる所を幻に見ることがあったが、それは皆間もなく事実になった。そし事実になるまで、己の胸には一度も疑が萌

さなかった。今度はどうもあの時とは違ふ。それにあの時は己の意図が先づ恣いままに動いて、外界の事柄がそれに附随して来た。今度の事になってからは、己は準備をしてゐる間、何時でも用に立てられる左券を握つてゐるやうに思つて、それを慰謝にした丈で、動もすれば其準備を永く準備の儘で置きたいやうな気がした。けふまでに事柄の捗つて来たのは、事柄其物が自然に捗つて来たのだと云つても好い。己が陰謀を推して進めたのではなくて、陰謀が己を拉して走つたのだと云つても好い。一体此終局はどうなり行くだらう。平八郎はかう思ひ続けた。

（ 森鷗外「大塩平八郎」五 門出 ）

かつて耶蘇教徒を逮捕したり、奸吏を糾弾したり、破戒僧を羅致したりしていた時代にあった行動に対する確信は今回（乱）の場合失われている。「あの時は己の意図が先づ恣いままに動いて、外界の事柄がそれに附随して来た。」しかし今回は「己が陰謀を推して進めたのではなくて、陰謀が己を拉して走つたのだ」という風に事件が大塩個人を超えて展開し始めていた。それを一体此終局はどうなり行くだらう、とぼんやり考える受動的、傍觀的自分がある・・・と、これは鷗外が付度した大塩の胸中であつて、実際はどうであつたか分らない。しかし小説家として、歴史離れをして鷗外は大塩の心中を推し量つたのである。大塩はもっと剛毅な男であつたかもしれない。しかし巨大な事件が個人の心中、思惑とは別の水準でかつてに動いていってしまうという体験は、少しは「歴史」的な事件を体験したものには容易に首肯できることなのだ。そういう意味では鷗外は間違つたことを書いたのではなかった。

（2）「安井夫人」

安井仲平は醜男（ぶおとこ）だった。父は日向の飢肥（おび）藩に仕え仲平には3つ違いの兄文治があつた。2人とも小さい頃痘瘡を患い、兄は軽かつたが弟の仲平は重く右の目がつぶれた。背が低く浅黒い仲平は背の高くきりつとした兄と較べられて、陰口を叩かれた。それで兄とは一緒に外出することを避けるようになった。二人とも勉強家であつた。しかし兄は病弱で26の時亡くなった。

仲平はその後、昌平黌（しょうへいこう）に学び藩の学問所で講壇に立つことになった。29歳であつた。そこで仲平の嫁取りが問題となり、父は親戚の川添の娘に標的を定めた。姉の豊は二十で、器量は普通、妹の佐代は16で「岡の小町」と呼ばれるほどの美人だつた。仲平の風采を考えると年齢的にも容貌的にも姉の豊がふさわしく思えて、仲平の姉に交渉を依頼した。

姉は最初、姉の豊に話をもちかけた。ところが本人からにべもなく断られた。面子をつぶされ帰っていくと、途中、川添の下男から呼び止められた。引き返してみると川添の奥さんが思いもかけない提案をした。それは、妹の佐代本人が仲平の嫁になりたいと言つた、というのである。思いもかけないことであつたが、最良の結果を持ち帰り、めでたく二人

は祝言をあげた。仲平 29 歳、佐代 16 歳、13 歳違いの夫婦であった。

以下その後の夫婦の人生を分かり易いように表にまとめてみよう。

川添佐代	年齢	年齢	安井仲平
結婚	16	29	結婚
長女、須磨子誕生	17	30	
		33	振徳堂（助教）
		35	江戸勤務
	21	38	江戸勤務（昌平黌 斉長）
	28	41	佐代を江戸に呼び寄せる （三計塾）
二女 美保子（早死）			
三女 登梅子（急病で死）			
四女 歌子（23で死）			
長男 棟蔵（22で死）			
次男 謙助（医者、28で自殺）	33		
	35	48	浦賀へ米艦来航 大儒息軒先生と呼ばれる
（☆＝後継）			
須磨子＝中村		49	海防策（飢肥藩）
小太郎☆1		54	藤田東湖と交わる
三郎☆3		55	浦賀へペリー来航 攘夷封港論、藩を辞職
謙助＝淑子		57	蝦夷開拓論
千菊☆2 重病	45	58	
	50	63	隠居。桜田門外の変 1860 安政7年
死去	51	64	江戸城用人席（直参）

		6 6	陸奥塙代官（小普請入）
		6 7	藩の上邸、海嶽楼
		7 0	隠居、彦根藩
		7 1	桜田邸、 徳川幕府終焉 1 8 6 8
		7 3	
		7 8	死去

この表で見えてみると、仲平は38で昌平黌の斉長となり、大儒息軒先生と呼ばれ、藤田東湖とも交わっている。浦賀へペリー来航時には攘夷封港論、蝦夷開拓論などを著しており、学者としては一流であった。また幕府の要職にも付き日向藩からも重んじられていた。兄が26歳で亡くなったのに較べて、幕末を乗り切り、お佐代さんの死後14年間も生きながらえ明治に死した。全体に醜男であったにも関わらず美しい奥さんをもらい、学殖、地位ともども、めでたい一生であったように思われる。

一方安井夫人、お佐代さんはどうであったろうか。家族関係を見てみると2男4女を産みながら大半を短命で失っている。最後まで生き残ったのは長女の須磨子のみであった。夫の立身出世を見守り、家族のはかない命を看取り・・・美人の彼女には別の生き方もあったろうに、何を思って生きていたのだろうか。鴎外は小説の末尾でこのことを記している。

お佐代さんは夫に仕えて労苦を辞せなかった。そしてその報酬には何物をも要求しなかった。ただに服飾の粗に甘んじたばかりではない。立派な第宅こおりたいとも言わず、結構な調度を使いたいとも言わず、うまい物を食べたがりも、面白い物を見たがりもしなかった。

お佐代さんが奢侈を解せぬほどおろかであったとは、誰も信ずることが出来ない。また物質的にも、精神的にも、何物をも希求せぬほど恬淡であったとは、誰も信ずることが出来ない。お佐代さんにはたしかに尋常でない望みがあって、その望みの前には一切の物が塵芥のごとく卑しくなっていたのであろう。

お佐代さんは何を望んだか。世間の賢い人は夫の栄達を望んだのだと言ってしまうだろう。これを書くわたくしもそれを否定するごとは出来ない。しかしもし商人が資本をおろ

し財利を謀るように、お佐代さんが労苦と忍耐とを夫に提供して、まだ報酬を得ぬうちに亡くなったのだと言うなら、わたくしは不敏にしてそれに同意することが出来ない。

お佐代さんは必ずや未来に何物をか望んでいただろう。そして瞑目するまで、美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれていて、あるいは自分の死を不幸だと感ずる余裕をも有せなかったのではあるまいか。その望みの対象をば、あるいは何物ともしかと弁識していなかったのではあるまいか。

(森鷗外「安井夫人」)

お佐代さんが奢侈を解せぬほどおろかであったとは、誰も信じないであろうとして「お佐代さんにはたしかに尋常でない望みがあって、その望みの前には一切の物が塵芥のごとく卑しくなっていたのであろう。」と鷗外はまず推測する。「尋常でない望み」とはしかし何だろう。

鷗外の結論は「お佐代さんは必ずや未来に何物をか望んでいただろう。そして瞑目するまで、美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれて」いたとなっている。献身と自己犠牲、まだこのような美德が生きている時代であった。

山崎正和は「闘う家長」のなかで、このお佐代さんの姿を「灰燼」の主人公節蔵の裏返された姿だと説明している。節蔵の自己隠蔽は周囲のものからむしろ何か大きなものを見つめているのだと錯覚させる。その人工性が実はお佐代さんの「遠くを見つめる目」と同じではないか、というのである。お佐代さんは貞女の鑑どころか、行き所を失って傍観者とならざるを得なかった女性にすぎない、というわけである。しかし、これなどは芥川が「袈裟と盛遠」で夫を助けるために身代わりとなる袈裟の捨身をエゴイズムと捉える分析と同じにしか私には思えない。それは近代人の心理主義的過剰な分析と言えはしまいか？ 同じことが山崎の分析にも言えるのである。そういう意味で彼の考えはとるにたりないものだ。

時 事

西村主審の采配——ブラジル対クロアチア



サッカーのワールドカップ2014年ブラジル大会が始まった。

12日のサンパウロ・アリーナでの開幕戦でA組の初戦、ブラジル対クロアチアは3対1でブラジルの勝利となった。

前半はオウンゴールでクロアチアが先制、その後ネイマールのゴールで1対1で後半に折り返した。この試合は光栄なことに審判団は西村雄一主審を含め3人が日本人という構成だった。西村は前半にネイマールに警告を出し、公平な審判に務めていた。後半が両チームの勝負どころとなった24分、ブラジルのFWフレジがゴール直前のペナルティエリア内でクロアチアのDFロブレンに倒されると判定され、ブラジルにペナルティキックが与えられたのだ。ペナルティエリア内の反則は軽くボールに触れたハンドでもペナルティキックとなる。西村主審はこのとき3～4人のクロアチア選手に詰め寄られながらも、冷静に確信をもってロブレンの反則を指摘し、ブラジルにペナルティキックを与えた。ペナルティキックはかなりの確率で入る可能性が高いから1点を争うような試合では死活問題となる。はたしてネイマールはキーパーに、はじかれはしたものの勝ち越しゴールを決めた。

この判定についてクロアチア側から大ブーイングが起こった。特にコバチ監督は地元テレビに「主審は試合のレベルに達していない、恥だ」「フレジは体重もありあれほど簡単に倒されないはず。ルールを適用できないようでは力不足」と吐き捨て、地元メディアは「主審のミス」「主審はブラジルの肩を持った」と非難を浴びせた。

一方、ブラジルのスコリラ監督は「映像を10回見たがPKだと思う。」「判定でブラジルに恩恵を受けたとは思っていない」と語った。

実際のところはどうだったのだろうか。しかしこの「実際のところ」というのが実は難しい。ロイター通信では「フレジがわざと倒れた(シュミレーション)ので



は」と書き、英BBC放送では「わずかな接触なのに」と報じた。

私も2～3回しかその映像を見ていないが、新聞写真などと総合して言えることはゴール直前のボールを蹴りかけているフレジの背後からロブレンはフレジの左腕のシャツの袖口をつかみ、右腕に自分の右腕を入れて前進を阻止（ロック）している。この動作がなければフレジは入ったかどうかは別にして倒れたとしてもボールを蹴っていたに違いない。映像では西村主審がこの場面を遺漏なく眺められる位置から確信を以ってペナルティキックの判定をなしたものと思えた。そういう意味では主審の裁定はまちがってはいなかった。

開幕戦の試合の判定は後の試合にもひとつの基準となるので神経質になっているのだろう。またクロアチアとしては自チームのモチベーションを保つためにもこういった非難・擁護を繰り返すことは当然と考えているのであろう。しかし難しい判定は最後には主審の判定にまかせるしかない。そのための主審だから。

西村雄一主審は2010年ワールドカップ南アフリカ大会において4試合の主審を務めウルグアイフランス戦、オランダブラジル戦（準々決勝）では高い評価を得た。また準決勝（ウルグアイオランダ）決勝戦（オランダスペイン）の第4審判も務めた。そういう審判だから決してブラジル大会の主審として経験不足とか力量不足ということはない。各国の熱い思いが交錯し火花を散らしている現状をよく表している事件だった。

宇多田ヒカルなどは拙速にも12日にはツイッターでクロアチア人に謝罪し
“I hope Croatian people don't hate Japanese/people after their unfortunate match
against Brazil today...”

13日には誤審ではないと気づき西村氏に謝罪。

「周りのサッカーファンがみんな誤審だって騒いでたから鵜呑みにして失礼な冗談を書いてしまった西村さんごめんなさいorz」

いったいどうなっているのか、宇多田の頭の中は・・・

（写真は京都新聞13日夕刊、14日朝刊掲載のものです。）

2014. 6. 14

フェミニズムへのテロ

——都議会セクハラやじ

1



6月18日に行われた東京都議会定例会の一般質問で塩村文夏（あやか）議員が女性の晩婚化について質問中、男性議員から「おまえが結婚しろ」「産めないのかよ」などという

野次が飛んだ。

その晩、塩村は Facebook でこの事態の一部始終を報告し、東京の女性の晩婚化、不妊治療を受ける女性の多いことなどを念頭に質問したこと、友人にも不妊治療を受けている女性がいてなかなか大変なこと、この女性を侮辱し、貶めた野次は自分ひとりに向けられたものではなく、全女性に向けられたセクハラ侮辱であり、こういう都議会議員がいることは 2020 年に向けて成熟都市をめざす東京にとって恥ずかしく、ふさわしくないことだと訴えた。

都議会にはただちに 1000 件を超える批判が殺到、塩村のツイッターへのリツイートは 2 万 7 千件を超えた。

塩村は 10 代からグラビアアイドルとして活躍し、ミスコンでも数回受賞している。オーストラリアへ留学、その後フライト・アテンダントとしても勤務した。とくに 2007 年には、さんまの「恋のから騒ぎ」の 14 期生となり、説教部屋行きは 10 回歴代一位タイとなった。番組内では、元彼から慰謝料 1500 万円をもらい、留学費用にしたこと、交際していた男性に「妊娠した」とうそをついたことなどがあることを告白。

その後、放送作家となり、動物愛護活動も行い、2012 年には維新の政治塾生となったが、橋本の考え方に違和感を感じ（この感覚は正しかった！）2013 年みんなの党に入党その年の都議選で世田谷区から立候補、当選した。つまり先日の都議会での質問は議員一年生としての質問であって、当然待ち構えて、ヤジでいじめてやろうという輩がいたことが推測される。

塩村は直ちに議長にやじった議員を特定し、謝罪するよう処分要求書を提出したが、議長はやじった人物名が特定されていない文は正式なものとして受け取れないと、受け取りを拒否した。

2

フェミニズムの問題をまとめてみよう。（Wikipedia 参照）

オーソドックスなものに「リベラル・フェミニズム」があり日本社会ではこのオーソドックスなフェミニズムが中心だったのではないだろうか。リベラル・フェミニズムはリベタリアンの（自由至上主義）な考え方に立脚する。身体は個人のものであり、中絶は個人の権利に属するし、大麻所持使用も個人の問題で国家が規制すべきものではないと考える。

リベラル・フェミニズムの批判は

- ・ ジェンダー・ステレオタイプの固定化、女性蔑視への批判
- ・ 性別分業への批判
- ・ 同性婚禁止への批判
- ・ 妊娠中絶に関する制限への批判

- ・ 社会的地位の制限に対する批判

などがある。

それに対してラディカル・フェミニズムは性的従属を強いるのは家父長制を起源とし、女性の生殖能力の多様性を利用した男性優位、女性抑圧を作り出すとする。それゆえ結婚、家庭も女性解放の障害とみなす。

ラディカル・フェミニズムの主張は

- ・ ポルノグラフィ撲滅・・・ポルノグラフィは性犯罪、DV,セクシャルハラスメントを助長する。ポルノグラフィは女性解放の障害となる。
(リベラル・フェミニストはポルノを規制しても性差別や暴力を減らすことはできないと説く)
- ・ レイプへの抗議行動

最後に「反フェミニズム」(バックラッシュ：逆回転)

伝統的な立場として性別分業、役割分担を尊び、家族の健康な存続をめざす。それゆえ、フェミニズムは男女の役割を否定し、家族の解体を促し、男女を敵対させるものとして批判される。

また女性優遇措置を逆に男性差別と考える。

アンチ・フェミニズムの主張

- ・ 男子校は女性差別であるというのは女子高・大学が堂々とまかり通っているのにたいして逆差別である。
- ・ ラディカル・フェミニズムの女系天皇禁止は差別であるという主張に対して批判
- ・ 性表現の規制は、表現の自由を損なう。
- ・ 「男女」が男性優位なら「女男」と表記すればいいのか？それはただ女性優位の表現にすぎない。(逆差別)

以上を分かりやすいように表にまとめておこう。

主 義	主 張	特 徴
-----	-----	-----

リベラル・フェミニズム	・ ジェンダー・ステレオタイプの固定化、女性蔑視への批判 ・ 性別分業への批判 ・ 同性婚禁止への批判 ・ 妊娠中絶に関する制限への批判 ・ 社会的地位の制限に対する批判	リベラリズム 徹底した個人主義 男性との同一性・平等 男と女という利害集団、 階級闘争という視点をとらず、リベラルな社会慣行の漸進的解決を望む
ラディカル・フェミニズム	・ ポルノグラフィ撲滅 ・ レイプへの抗議行動	女性従属の原因は 家父長制、 生殖能力に基づく男性優位の階層構造
アンチ・フェミニズム	・ 男性差別は逆差別 ・ 女系天皇批判 ・ 性表現に寛容	男女役割分担 性別分業制 健康な家族

ポルノの行き過ぎた表現は視聴者、演技者共に心身の傷をうけるから慎むべきだが、なくしたからといって性犯罪が減るわけではない。プラトンの詩人追放説を再考してみればこのことの意味がわかるはず。

私はどちらかといえばリベラル・フェミニズムに近いし、一部アンチ・フェミニズム的なところがある。日本の社会はリベラル・フェミニズムの線に従って漸進的に改革されつつはあるようだ。しかし10年前頃のテレビドラマを見ていると、つくづくここ（日本）は男性優位社会だったのだなという感を深くする。

3

この件に関しての海外評はウォールストリートジャーナル（米）、ガーディアン（英）CNNテレビ（米）いずれも性差別の暴言という骨子で詳報した。（京都新聞23日朝刊）また自民党石破幹事長は「発言したものは名乗るべきだし、もし仮にそれが自民党議員であったとしたなら、党としてお詫びしなければならない」と言った。都知事の舛添は「聞こえなかつ



た」と言い、責任者にふさわしからぬあいまいな答弁に終始している。

かつて子宮頸がんで子宮全摘出に至った辛い過去を持つ自民党女性局局長、三原じゅん子参議院議員は「私は生む前に宿すこともできません。」とブログに書き込み、「日本はいつになったら変わるのか、許せない」と怒りを表明した。

誰が見てもこの三浦の率直な感想で普通と考えるだろう。塩村都議は過激なフェミニストではない。ブログの政策を読んでみても、穏健なリベラル・フェミニズムの主張を掲げている。一方野次を飛ばした方は推測するに一年生議員をいじめてやりたい、「余りに美人過ぎる議員」なる世評に竿さしたいオヤジで、いうなれば反フェミニズムの体質をもった保守派なのだろう。しかし茶番としても品格もなにもなく、ただ東京の薄汚さをアピールしただけの愚か者にしか見えてこない。仮面を被ったものの思わずの本音、というクオリティの低い政治家の典型、おっちょこちょいにちがいない。しかも何を思ったのか、そういうものをスクラムを組んで擁護しようとする。何か間違っているんじゃないの？こんなところで集団的自衛権を行使して！

2014. 6. 23

<付記>

6月23日「早く結婚すればよいのに」とやじった自民党の都議がそれ以前には関係ないとは否定していた証言を翻して自分が言ったと塩村議員に名乗り出、謝罪した。

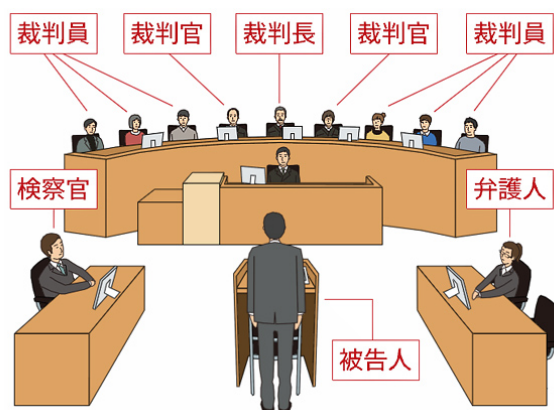
その都議は鈴木章浩（51）一男、二女の実業家の父であり、2年前に泳いで尖閣諸島に上陸し、「女性が働きやすい社会の実現」を政策に掲げていた。

「自分で子どもを産め」とか「産めないのか」といった議員は特定されないまま都議会の最終本会議では、残りの議員を特定することなく、議会の信頼回復を盛り込んだ自民、公明、結い、維新、みんなの党の5会派の共同提出案が可決された。みんなの党会派、民主党などの提出した鈴木議員以外の議員の特定、および共産党の鈴木議員の議員辞職の案はともに否決された。

石破幹事長は党として詫び、安倍首相は国会閉会の各派あいさつ回りでみんなの党に詫びた。都議会議長、都知事などの議会の品位を貶めるような野次の自粛などの呼びかけなどもあったが、全体にこれ以上事を荒立てたくない、という雰囲気の中で幕引きが行われたという印象が強い。

（ 6.26 ）

裁判員裁判の陥穽



1

7月24日幼児虐待死事件で傷害致死罪に問われた夫婦の上告審で最高裁は2

012年3月の一審判決（大阪地裁、裁判員裁判。求刑懲役10年、判決懲役15年）二審判決（大阪高裁、裁判官のみで審理。一審判決を支持）のいずれをも破棄し、父親に懲役10年、母親に懲役8年を言い渡した。

（ 図：青山学院大学AGUインサイトより ）

事件は大阪で一歳8ヶ月の三女を両親が殴り、頭を平手で殴り床に打ちつけ怪我を負わせ、結果幼児は2ヵ月後に死亡したというものだ。一審判決では検察の求刑は懲役10年というものだったが、判決においては（裁判官3人、裁判員6人）児童虐待の昨今の風潮に鑑み、今まで以上に厳しい罰を科すべきだとして、求刑の1.5倍の懲役15年を判決とした。これに対して最高裁は一審判決は社会情勢を強く反映させて考えるあまり、量刑の根拠が具体的に示されていない、二審判決は一審判決を不合理で破棄すべきものとするべきであった、と批判した。つまり公平性を保つためこれまでの量刑の傾向を踏まえ、直感的な判断ではなく、具体的な根拠を示すべきだとしたのである。

裁判員裁判は2009年から始まり市民感覚を取り入れた新しい裁判として注目され、出発した。刑事事件の第一審を担当し、構成は裁判官3人、裁判員6人で「証拠調べ」「有罪か無罪かの判断」「有罪の場合の量刑の判断」を担当する。評決は過半数で、最低、裁判官一名、裁判員一名は賛成しなければならない。

市民の日常感覚、常識を裁判に反映させ、司法に対する国民の理解と信頼の増進を目的とするが、近年「求刑越え」（求刑よりも判決のほうで期間が上回ること）の傾向が問題とされていた。特にその傾向は強盗致傷、虐待、強姦などといった事件に関して多い。

それ以外に事件の特性を裁判官も、裁判員も理解していないために起こる求刑越えという現象もある。その例は2012年7月30日の大阪地裁（裁判員裁判）の判決でおこった。以下その件について概要を見てみよう。

2

この事件は12歳から約30年ものひきこもりを続けたアスペルガー症候群の男性（42）が支援を続けた姉を包丁で刺殺した、という事件で求刑は懲役16年だったが、判決では懲役20年となった。

その判決理由は

- ①事件に精神障害の影響があるとはいえ、十分な反省のないまま社会に復帰すれば、この事件と同様の事件を起こす可能性がある。
- ②社会にアスペルガー症候群に対応できる受け皿が用意されていない現状では、被告人長期間刑務所に収容させることで内省を深めさせる必要性がある。

であった。要は「再犯の予防」と「社会秩序の維持」のための判決である。

事件の内容をもう少し詳しく見てみると、数年前に母親が死亡し、姉が代わりに本人男性の面倒を見ていた。事件の発端は姉が「食費などは自分で出さない」と書置きをしたことにあったようだ。本人は姉が自分に報復していると考え、殺害を決意した。事件後、親族たちは本人の引取りを拒否した。



長期間刑務所に収容したところで、障害にかかわる社会的な問題は解決しないし、実際のところは、発達障害支援センターや地域生活定着支援センターなどの受け皿があり、そういったことを裁判官・裁判員たちは検討もしなかったのだろう。そもそも3人の裁判官はそういった専門家を呼んで議論する機会を設ける必要があるはずだが、そういう配慮もなかったということは評決の会議は障害者に対する差別と偏見から出発していたとしか思えない。この判決に対して大阪学院大学法科大学院の村井敏邦はネット「村井敏邦の刑事事件・裁判考（16）」で次のように批判している。

これまでの裁判では、アスペルガー症候群の故に責任能力を軽減・否定したものはありませんが、量刑においては、それを考慮して刑を多少なりとも低くしていました。アスペルガー症候群を否定したケースでは、執拗性、残虐性が高いなどを理由として、死刑を言い渡したものも見られます。

しかし、今回の判決は、アスペルガー症候群であることを刑を重くする理由にしています。犯行自体の執拗性、残虐性に加えて、十分な反省がないまま社会復帰すると、再犯の可能性のあることとアスペルガー症候群に対する社会の受け皿がないことを理由にして、社会秩序の維持から考えうる最高刑を言い渡したとしています。

人格障害とか、精神病質とかを理由として、刑を重くした判決は、これまでも見られました。しかし、今回の判決ほど明確に社会秩序の維持を前面に出して、できる限り社会から隔離する必要があるとしたものは、ないと言ってよいでしょう。

しかも、今回の判決は、アスペルガー症候群に対する誤解、あるいは偏見を前提として、量刑を行なっています。まず、アスペルガー症候群そのものに反社会性を認めていることが大きな誤解、偏見です。上述のように、アスペルガー症候群にある人は、社会性の発達に障害があります。しかし、これは、反社会的であることではありません。社会の側がその症状を理解して対応しさえすれば、十分に社会的活動ができ、現に、アスペルガーと認められる人の多くが、問題なく社会的活動を行なっています。

（村井敏邦「村井敏邦の刑事事件・裁判考（16）」）

今回の判決は、アスペルガー症候群であることを刑を重くする理由にしている点に問題ありと指摘している。刑法の原則である「責任主義」によると心神耗弱者に関してはその責任能力の有無によって刑が決定される必要があるが、今回の判決はその逆なのだ。つまり、アスペルガー症候群であることを刑を重くする理由にしていると点、誤解、あるいは

偏見を前提として判断が行われている。

また裁判官の役割についての批判では

今回の判決について言うならば、果たして裁判官は、裁判官としての役割を果たしたのかが問題になります。評議が公開されていない以上、どのような過程で議論がすすめられたか、まったくわかりませんが、少なくとも、法律の専門家としての裁判官は、偏見や予断が評議を支配するような事態になった場合には、それが法の原則に反することを評議の場で明確に表明し、そのような事態を回避するように努力すべきでしょう。果たしてそのようなことが行われたのだろうか、大いに疑問となるところです。

精神障害の影響を肯定しながら、その影響を過大に評価すべきではないというにとどまらず、その影響よりも社会秩序の維持を優先すべきであるという判断は、責任主義という刑法の原則に反することです。この原則に基づく量刑判断をすべきことを説くのは、裁判官の役割以外にはありません。

(同)

明快に裁判官の「役割」が指摘されている。

以上、裁判員裁判の問題はここに述べたような「量刑」の問題にとどまらず、法制上の、ありかた、裁判員そのもののあり方などに関して多岐にわたっている。勿論、裁判員裁判の問題を追及していくと、そこに日本の司法制度の問題点、矛盾点が浮き彫りにされるのは言うまでもないが、とりあえず事件の審理への公正かつ妥当な判決のための準備と議論の適正化を行うべきだろう。

2014. 7. 27

有敵の人—ある科学研究者の死



1

S T A P細胞でいろいろな意味で騒がれた理研、再生科学総合研究センター（C D B）の副センター長、笹井芳樹が5日職場の研究棟で自殺した。3通の遺書のうち一通は小保方さん宛で、内容は「あなたは悪くない」「S T A P細胞の研究を完成させてください」といった内容だったようだ。（現在警察保管。小保方さんにはまだ渡っていない。）

36歳の若さで京大医学部の教授となり、C D BではE S細胞（胚性幹細胞）を使った組織再生に取り組み、脳の下垂体や眼の網膜の立体組織を

試験管の中で作ることに世界で初めて成功した。2012年には英国ネイチャー紙で特集を組まれ、ノーベル賞候補に挙げられるなど世界的な研究の牽引者であった。また国の幹細胞研究の戦略立案に携わり、CDBへの予算獲得、神戸への企業誘致などにも有能な企画交渉人であった。

また、小保方さんのSTAP論文が英国ネイチャー紙に掲載されたのは笹井の指導と名声あったからこそであった。しかし御存知の通りSTAP細胞論文は一敗地にまみれ、轟々たる批判の嵐、処分人事の進行、改革委員会からのCDBの改組の提案など今年に入って事態は急速に賞賛から、非難に一転し、4月公式会見を行った前後には精神的な疲労が耐えがなくなっていたようだ。（3月には副センター長辞任を申し出ているが受理されなかった）仕事と憂き世のしがらみにしがみつかれて、こころの余裕を取り戻す間もない自殺であった。うつ状態が進行していったのであろう。

私は先日「無敵の人」という『黒子のバスケ』脅迫事件』についての論考を発表した。「この世に地位も金も絆もない犯罪を犯すことになんのためらいもない人間」のことを「無敵の人」と呼ぶのだが、笹井の立場はこの逆で、地位も名誉も金も絆も有り余る社会的立場にあって、自分を＜無＞にする時間など、また習慣など、どこにもなかったのだろう。そういう意味では「有敵の人」と呼ぶのもおかしいかも知れないが、あちこちに気兼ねし、築いた賞賛の城が落城していく恥ずかしさと苦しさの耐え、一挙手一投足を、まるで監視されているかのように感じながら生きていたのだろう。攻めの姿勢で打って出ることでもできず守勢の中で＜無＞に還ることもできなかった。“渡る世間は鬼ばかり”の世界で自分を頭からまるごと肯定してくれる抱擁者にも出会えなかったのだろう。

昔、歌手（元グループサウンズ：テンプターズ）萩原健一が大麻で逮捕された時、出獄後京都の嵐山天竜寺で参禅修行したことがあった。その後、模範的ではなかったが、彼はもういちどやり直して俳優としてカムバックした。そういう場所を変えてのギアチェンジが必要であったような気がするのだが、理研という組織はもともと危機管理には優れていなくて、無能な采配しかふれない幹部はいたずらに時を浪費していたのだ。

私はたまたま最近の論考でニーチェの「善悪の彼岸」（第6章 われら学者たち）を検討していて「哲学するとは何か——ambientな『家具の哲学』」を書いたばかりだったが、この中でニーチェの科学批判に触れた。いまその一節を引用してみる。

客観的人間は一個の道具であり、一つの高価な、毀れ易い、そして曇り易い計量器であり、芸術品的な鏡であって、大切にされ、尊重さるべきものである。しかし、彼は何らの目標でも、何らの出口や上り口でもなく、爾余の生存がそこにその存在理由を見いだすようないかなる補足的人間でもなければ、いかなる結論でもなく——まして端初でもなく、産出や第一原因でもなく、支配者になろうとする強健な、力強い、自体的な存在でもない。却って、単に柔かい、吹き膨まされた、華奢な、軽快な鋳型壺であって、それに従って「形づくられる」ためには、まず何らかの内容と実質とに待たなければならない。——通常、

それは実質と内容を欠く人間であり、「自己を欠く」人間である。従ってまた、《蛇足ながら》女にとっても全く取るに足りない代物である。——

(ニーチェ「善悪の彼岸」 207)

客観的人間（科学的人間）への辛らつな批判がここにある。この「善悪の彼岸」207節は実に面白いアフォリズムだ。何度読んでも味わい深い。その骨子は冒頭の「客観的人間は一個の道具であり、芸術品的な鏡」という部分だ。このあたりをアフォリズムの別の箇所から拾ってみよう。（以下引用■）

■ 厭世主義者のように、もはや呪ったり罵ったりはしない客観的な人間、数千の完全な失敗や部分的な失敗を重ねた挙句にようやく科学的本能が花盛りを迎え、そして花盛りを過ぎた理想的な学者は、確かに存在するかぎりの最も貴重な道具の一つである。しかし彼もまた一層強力なものの掌中に属する。彼は単に一つの道具にすぎず、われわれに言わせると、彼は一つの鏡なのだ。——彼は決して「自己目的」ではない。客観的人間は実の一つの鏡であって、認識さるべきすべてのものに服従することに慣れており、認識することが、すなわち「反映すること」が与える悦び以外の悦びを知らない。——彼は何ものかが来るまで待っている。そしてその場合、最も靈妙な存在の軽い忍び歩きの量音をさえも、自分の皮膚の表面に聞き洩らすことがないようにと、敏感にその感受性を拡げている。「個人」的なものの幾分か彼の上になお残っているとすれば、彼にはそれは偶然的なものに、しばしば恣意的なものに、更にしばしば妨害的なものに思われる。それほどまでに彼は自分自ら他の形態や事件の通路と反映になってしまっているのだ。

客観的人間（科学的人間）は、一個の道具であり、鏡である。すなわち「反映すること」が与える悦び以外の悦びを知らない。彼の中には「個人」的なものはごくわずかしが残っていない。

2

■ 彼は自己を省察して「自己」へ立ち戻ろうと努力するが、間違いをやらかすことが稀しくない。彼はややもすると自己を取り違えがちである。彼は自分固有の必要事に関しても間違いを仕出かし、この点でのみはお粗末であり怠慢である。恐らく、健康のこととか、女や友人の瑣末な事柄や風通しの悪い閨房の事情とか、仲間や付き合いがないことなどが彼を悩ますであろうし、——それどころか、彼は自分の苦悩について篤と考えるように自らを強いるであろう。が、そんなことは無駄だ！　すでに彼の思想はさまよい出て、より一般的な場合に向かう。そして、彼はどのようによいのかを昨日も知らなかったし、明日になっても知らない。彼は自分に対する真面目さを失い、また時機をも失ってしまった。彼は快活ではあるが、それは困窮していないからではなく、むしろ自分の困窮に対処する

ことができないからである。どのような事柄や体験をも迎え入れる習慣、自分がぶつかるすべてのものを受け容れる明るい囚われない饗しの好き、彼一流の思惑のない好意、諾否について危険なほどの無頓着、ああ、彼がこのような自分の美德の贖いをしなければならぬ場合が十分にあるのだ！そして、およそ人間として彼は、全く易々とこれらの美德の《残り滓》になるのだ。

彼は自己を省察して「自己」へ立ち戻ろうと努力する。しかし、彼の思想はさまよい出て、より一般的な場合に向かう。それゆえ、自分の困窮に対処することができない。「どのような事柄や体験をも迎え入れる習慣、自分がぶつかるすべてのものを受け容れる明るい囚われない饗しの好き、彼一流の思惑のない好意、諾否について危険なほどの無頓着、ああ、彼がこのような自分の美德の贖いをしなければならぬ場合が十分にあるのだ！」この結果彼は易々とこれらの美德の《残り滓》になってしまう！



また

■ もし彼から愛や憎しみを求めるなら——私がここで言うのは、神や女や動物が解するような愛や憎しみだが——、彼はできるだけことはするであろうし、またできるだけものを与えるであろう。しかし、そのすることや与えることが大したものでないにしても、——彼がそこでこそ自分の不純な、脆い、疑わしい、朽ちはてた姿を見せるとしても、怪しむには当たらない。彼の愛は意図的なものであり、彼の憎しみは技巧的なものであり、むしろ《無理な曲芸》であり、ちっぽけな虚栄であり誇張である。彼が純粹であるのは、客観的であることができるかぎりにおいてだけにほかならない。

彼から愛や憎しみを求めるならそれは意図的な、技巧的な《無理な曲芸》であり、虚栄であり誇張である。それは彼の不純な、脆い、疑わしい、朽ちはてた姿をさらけ出すことになる。なぜなら、彼が純粹であるのは、客観的であることができるかぎりにおいてだけだからだ。

このように客観的人間（科学的人間）の優柔不断さが暴露されれば、生きることの設計図を描く力がいかに必要かがわかるだろう。この限りにおいて科学者は「無敵の人」ではありえないし、STAP万能的ではありえないのだ。

2014. 8. 7

[注] STAP細胞=Stimulus-Triggered Acquisition of Pluripotency cells

刺激惹起性多能性獲得細胞 Pluri=多量、多数、多発、過剰